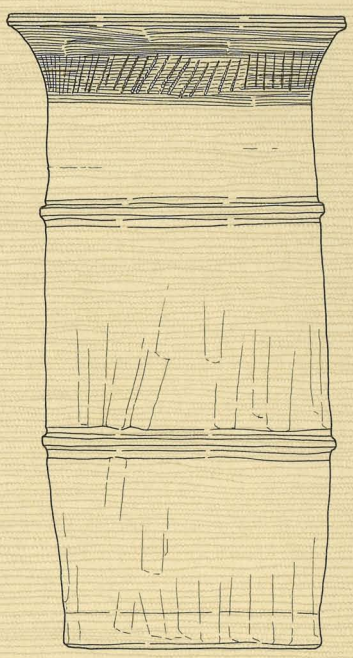
土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第14集

伏原大塚古墳



1993・3

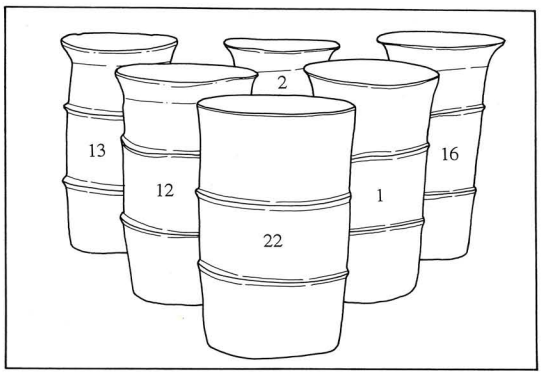
高知県土佐山田町教育委員会

伏原大塚古墳

1993・3

高知県土佐山田町教育委員会

円筒埴輪



円筒埴輪（1～3・11）

円筒埴輪（12・13・16・22）

須恵器四耳壷（10）

須恵器大甕（11）

須恵器台付長頸壷（40・41）・台付直口壷（43）

須恵器子持壷（54）・子持器台（55）

序

美しい風土と環境に恵まれた土佐山田町は，古くから文化の開かれた所として夙に著名であります。特に，文化は長い歴史と風土の中で，我々の先祖のたゆまない努力と創意によって培われ生み出されたものであります。このすばらしい自然と文化を受け継ぎ次代へ伝えることは，現代に生きる我々の責務であると思われます。

土佐山田町は，県下３大河川の一つ物部川の右岸に形成された河岸段丘である長岡台地上で発展してきた町で，北部には四国山地の山々が迫り，南部は土佐湾に向かって開けた地形を呈しています。この台地上には弥生時代後期の代表的な遺跡である「ひびのき遺跡」を始めとして数多くの遺跡が所在します。中でも今回報告する伏原大塚古墳は，現存する県下の古墳の中では最大規模で，四国でも最大級の大形方墳であることが判明しました。町史編纂事業の一環として行った昭和52年度の調査結果と総合すると物部川水系を統括していた首長墓であったものと考えられます。そして，この調査結果から土佐の歴史解明の大きな手がかりが得られたものと確信しております。

報告書を刊行するに当たり，この報告書が学術的に活用されることはもちろんのこと，本書を通して埋蔵文化財の御理解と保存，保護の一層の御協力をいただけましたら喜びにたえません。

最後に，このような貴重な成果が得られましたのも調査を担当していただいた（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター廣田佳久主任調査員を始め，御指導賜った文化庁文化財保護部記念物課松村恵司文化財調査官，また御協力いただいた高知県教育委員会，（財）高知県文化財団，農林水産省関西林木育種場四国支場，地権者及び作業員の方々に対しまして，ここに厚くお礼申し上げる次第です。

平成５年３月31日

土佐山田町教育委員会

教育長　岡本章博

例　言

1．本書は，土佐山田町教育委員会が平成３・４年度に実施した伏原大塚古墳の発掘調査報告書である。平成４年度の調査は，国庫補助を受けて行った。

2．発掘調査は，高知県教育委員会の指導のもと土佐山田町教育委員会が主体となり実施した。平成４年度の調査では松村恵司氏（文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官）の指導を受けることができた。

3．発掘調査及び整理作業は，土佐山田町教育委員会の依頼を受け，高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員廣田佳久が担当し，同センター調査補助員竹村三菜（平成４年度）の補助を得た。調査の事務，総括は土佐山田町教育委員会社会教育課が当たり，平成３年度は同課長依光征二郎，同主事山崎京子，同主事補中山泰弘，平成４年度は同課長前田隆明，同主事中山泰弘が行った。

4．本書の執筆，写真撮影，編集等は廣田佳久が行った。

5．遺構については，ＳＴ（竪穴状遺構），ＳＫ（土坑・土坑墓・集石墓），ＳＤ（周溝・溝跡），ＳＸ（性格不明遺構），Ｐ（ピット）で表示し，遺構ごとの通し番号である。

6．遺物については，須恵器（縮尺1/4・1/6），埴輪（縮尺1/6），土師器（縮尺1/4），装身具（縮尺2/3），馬具（縮尺1/2），土師質土器（縮尺1/3），金属製品（縮尺1/3），近世陶磁器（縮尺1/3）ごとにまとめ，表記の縮尺で実測図を載せた。実測図の番号は，各器種ごとの通し番号で，図版の番号と一致している。

7．発掘調査に当っては，平成元年度に土佐山田町が実施したひびのきサウジ遺跡の際設定した基準点（磁北を基準とする任意座標で，ＴＰ８と方向点が残っていた。）を基にトラバース測量を実施し，測量成果に基づく基準点を使用した。標高は，２等水準点（ＧＨ：48.870m）を基準として実施した水準測量の成果を使用し，海抜高を示す。

8．遺構の縮尺率はそれぞれに示しているが，原則としてＳＴは1/80，ＳＫは1/50で掲載した。また，方位（N）は磁北である。

9．調査にあたっては，地権者の方々をはじめとする地元関係者，高知県教育委員会，土佐山田町文化財保護審議会の御協力をいただいた。また，整理作業では多くの諸氏から貴重な助言を得、高知県文化財団埋蔵文化財センター整理作業員の皆様に御協力いただいた。記して深く感謝する次第である。

10．出土遺物は，平成３年度分が「91－６ＹＯ」，平成４年度分が「92－６ＹＯ」とそれぞれ注記し，土佐山田町教育委員会において保管している。

報 告 書 要 約

1．遺 跡 名　伏原大塚古墳　遺跡番号 190129　遺跡地図 No. 15－231

2．所 在 地　高知県香美郡土佐山田町百石町２丁目

3．立　　地　物部川右岸の河岸段丘（長岡台地）上　標高約51m

4．種　　類　古　墳

5．調査主体　土佐山田町教育委員会

6．調査契機　駐車場建設及び遺跡確認調査

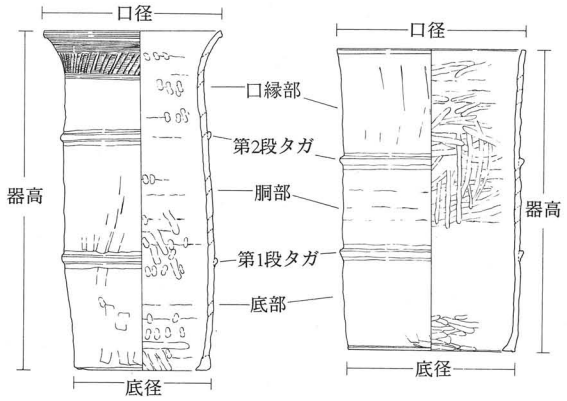
7．調査期間　平成３年８月１日～９月30日
平成４年７月27日～８月７日，９月９日～９月14日，12月17日～平成５年１月21日

8．調査面積　661m²

9．検出遺構　〔弥生時代〕ＳＴ　２棟
〔古墳時代〕ＳＤ　２条，ＳＫ　４基
〔中　　世〕ＳＫ 20基，ＳＤ　２条
〔近　　世〕ＳＫ　３基，ＳＤ　３条

10．出土遺物　須恵器，円筒埴輪，土師器，金環，馬具，土師質土器，柄付香炉，近世陶磁器

11．内容要約　伏原大塚古墳は，県下に残る唯一の前方後円墳ではないかとみられていたが，今回の調査で古墳を取り巻く周溝が確認され，東西約43m，南北約38mの方墳（周溝を含む）であることが判明した。現在のところ四国最大の方墳である。また，周溝からは多量の円筒埴輪片が出土し，須恵器系の透しを持たない円筒埴輪が復元された。周溝は中世段階に埋められたとみられ，周辺は墓地化する。



円筒埴輪各部名称，計測区分図

目　次

第Ⅰ章　調査の契機と経過 1
1．古墳発見から今日までの経緯 1
2．契機と経過 2
3．調査日誌抄 3

第Ⅱ章　遺跡の地理的，歴史的環境 7
1．地理的環境 7
2．歴史的環境 8

第Ⅲ章　調査の概要 11
1．調査の方法 11
2．調査区の概要 12

第Ⅳ章　遺　構 20
1．A　区 20
2．B　区 24
3．C　区 25
4．D　区 26

第Ⅴ章　遺　物 29
1．須恵器 29
2．埴　輪 33
3．土師器 46
4．装身具 46
5．馬　具 47

第Ⅵ章　その他の遺構と遺物 49
1．弥生時代 49
2．古　代 50
3．中　世 50
4．近　世 59

第Ⅶ章　昭和52年度の調査 62
1．須恵器 62
2．装飾品 71

第Ⅷ章　考　察 73
1．伏原大塚古墳の築造時期とその意義 73
2．円筒埴輪の特徴とその意義 77
3．まとめ 78

挿　図

Fig. 1　現地説明会 4
Fig. 2　調査風景 5
Fig. 3　土佐山田町位置図 7
Fig. 4　伏原大塚古墳と周辺の遺跡分布図 9
Fig. 5　伏原大塚古墳周辺地形図 11
Fig. 6　伏原大塚古墳調査区全体図 12
Fig. 7　トラバースポイント配置図 12
Fig. 8　A・D区周辺図及びグリッド設定図 14
Fig. 9　A区セクション図 15
Fig. 10　A・D区周溝検出時平面図 15
Fig. 11　B区周辺図とグリッド設定図 16
Fig. 12　B区（TRB－2）セクション図 16
Fig. 13　C区周辺図とグリッド設定図 17
Fig. 14　C区（TRC－1）セクション図 17
Fig. 15　D区セクション図 18
Fig. 16　A・D区遺構平面図　－弥生・古墳－ 21
Fig. 17　SD－1セクション図 21
Fig. 18　SD－1・2セクション図 21
Fig. 19　SK－1 22
Fig. 20　SK－2 22
Fig. 21　SK－3 23
Fig. 22　SK－4セクション図 23
Fig. 23　SX－2セクション図 23
Fig. 24　B区遺構平面図 24

Fig. 25　ＴＲＢ－１セクション図 25
Fig. 26　Ｃ区遺構平面図 25
Fig. 27　ＴＲＣ－１セクション図 25
Fig. 28　ＳＤ－１セクション図 26
Fig. 29　ＳＫ－４ 27
Fig. 30　ＳＫ－５ 28
Fig. 31　須恵器実測図１ 29
Fig. 32　須恵器実測図２ 30
Fig. 33　須恵器実測図３ 31
Fig. 34　須恵器実測図４ 32
Fig. 35　円筒埴輪実測図１ 34
Fig. 36　円筒埴輪実測図２ 35
Fig. 37　円筒埴輪実測図３ 36
Fig. 38　円筒埴輪実測図４ 37
Fig. 39　円筒埴輪実測図５ 38
Fig. 40　円筒埴輪実測図６ 39
Fig. 41　円筒埴輪実測図７ 40
Fig. 42　円筒埴輪実測図８ 41
Fig. 43　円筒埴輪実測図９ 42
Fig. 44　円筒埴輪実測図10 43
Fig. 45　円筒埴輪実測図11 44
Fig. 46　円筒埴輪実測図12 45
Fig. 47　土師器実測図 46
Fig. 48　金環実測図 47
Fig. 49　馬具実測図 47
Fig. 50　須恵器実測図５ 50
Fig. 51　Ａ・Ｄ区遺構平面図　－古代・中世－ 51
Fig. 52　ＳＫ－11・19 51
Fig. 53　ＳＫ－12～14 51
Fig. 54　ＳＫ－15・16 52
Fig. 55　ＳＫ－17 52
Fig. 56　ＳＫ－23・24 53
Fig. 57　ＳＫ－27～29 54
Fig. 58　ＳＫ－34・37 55

Fig. 59　ＳＫ－39セクション図 56
Fig. 60　土師質土器・青磁実測図 58
Fig. 61　青銅製品実測図 59
Fig. 62　ＳＫ－40，ＳＤ－７セクション図 59
Fig. 63　近世陶磁器実測図 60
Fig. 64　Ａ区遺構平面図　－近世－ 61
Fig. 65　須恵器実測図６ 64
Fig. 66　須恵器実測図７ 66
Fig. 67　須恵器実測図８ 68
Fig. 68　須恵器実測図９ 70
Fig. 69　須恵器実測図10 70
Fig. 70　須恵器実測図11 71
Fig. 71　ガラス小玉実測図 71
Fig. 72　伏原大塚古墳全体図 73

表

Tab. 1　伏原大塚古墳と周辺の遺跡分布表 9
Tab. 2　トラバース測量座標成果一覧表 13

図　版

巻頭図版１　円筒埴輪
巻頭図版２　円筒埴輪（1～3・11）
巻頭図版３　円筒埴輪（12・13・16・22）
巻頭図版４　須恵器四耳壺（10）・須恵器大甕（11）
巻頭図版５　須恵器台付長頸壺(40･41)・台付直口壺(43)・須恵器子持壺(54)・子持器台(55)
ＰＬ．１　調査前全景（南西より）
　　調査前全景（南西より）
ＰＬ．２　Ａ区近世遺構検出状態（北より）
　　Ａ区近世遺構完掘状態（北より）
ＰＬ．３　Ａ区周溝検出状態（北より）
　　Ａ区周溝完掘状態（北より）
ＰＬ．４　Ａ区遺構完掘状態（北上空より）
　　Ａ区遺構完掘状態（東上空より）
ＰＬ．５　Ａ区遺構完掘状態（南東より）

A区遺構完掘状態（東より）
ＰＬ．６　A区ＳＫ－40（北より）
A区東壁版築状土層検出状態（西より）
ＰＬ．７　A区埴輪出土状態（西より）
A区ＳＤ－１セクション（北より）
ＰＬ．８　A区ＳＫ－１（北より）
A区ＳＫ－１（北より）
ＰＬ．９　A区ＳＫ－２（北より）
A区ＳＫ－２（北より）
ＰＬ．10　B区ＴＲＢ－１周溝（ＳＤ－１）検出状態（南より）
B区ＴＲＢ－１周溝（ＳＤ－１）完掘状態（南より）
ＰＬ．11　B区ＴＲＢ－２周溝（ＳＤ－１）検出状態（東より）
B区ＴＲＢ－２周溝（ＳＤ－１）完掘状態（東より）
ＰＬ．12　B区ＴＲＢ－１周溝（ＳＤ－１）セクション（東より）
B区ＴＲＢ－２周溝（ＳＤ－１）セクション（東より）
ＰＬ．13　C区ＴＲＣ－１遺構検出状態（南より）
C区ＴＲＣ－１遺構完掘状態（南より）
ＰＬ．14　D区調査前全景（北西より）
D区遺構検出状態（北より）
ＰＬ．15　D区遺構完掘状態（北より）
D区周溝（ＳＤ－１）セクション（東より）
ＰＬ．16　D区ＳＫ－４集石検出状態　－上　層－（西より）
D区ＳＫ－４集石検出状態　－下　層－（西より）
ＰＬ．17　D区ＳＫ－４遺物出土状態　－基底面－（西より）
D区ＳＫ－４セクション（東より）
ＰＬ．18　D区ＳＫ－５検出状態（北より）
D区ＳＫ－５北壁セクション（南より）
ＰＬ．19　D区ＳＫ－５（南より）
D区ＳＫ－５（南より）
ＰＬ．20　D区ＳＫ－５（南より）
D区暗渠の石組（南より）
ＰＬ．21　A区埴輪・D区埴輪・A区土師器（1）・馬具（1）・柄付香炉（1），D区須恵器（11）出土状態，A区ＳＫ－３
ＰＬ．22　A区須恵器（Fig. 50－1）出土状態，A区ＳＫ－11～14・16～19

ＰＬ.23　Ａ区 ＳＫ－23・24検出状態，Ａ区 ＳＫ－23・24完掘状態，Ｄ区 ＳＫ－27～29・37
ＰＬ.24　須恵器四耳壺
須恵器大甕
ＰＬ.25　円筒埴輪（1・2・12・13・16・22）
円筒埴輪（1～3）
ＰＬ.26　円筒埴輪（1・12・13）
ＰＬ.27　円筒埴輪（2・3）
ＰＬ.28　円筒埴輪（4・5・11・14）
ＰＬ.29　円筒埴輪（12・13）
ＰＬ.30　円筒埴輪（16・18・22）
ＰＬ.31　円筒埴輪口縁部１
円筒埴輪口縁部２
ＰＬ.32　円筒埴輪口縁部３
円筒埴輪口縁部４
ＰＬ.33　須恵器器台（Fig. 34－14），土師器（1），金環（1），円筒埴輪（39），ガラス小玉（1·2）
ＰＬ.34　須恵器鉢（Fig. 34－15），土師質土器（20），柄付香炉（1）
ＰＬ.35　円筒埴輪（24・25・30・31），馬具（1～3）
ＰＬ.36　須恵器（1・8），土師質土器（1～8）
ＰＬ.37　土師質土器（9～16・18・19）
ＰＬ.38　主体部出土須恵器
須恵器高杯（8～11）
ＰＬ.39　須恵器台付長頸壺（40・41），台付直口壺（43）
須恵器子持壺（54），子持器台（55）
ＰＬ.40　須恵器高杯（8～11・29・35）
ＰＬ.41　須恵器台付椀（36），台付長頸壺（39～42）
ＰＬ.42　須恵器台付直口壺（43），台付広口壺（49），子持壺（54），子持器台（55）

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1. 古墳発見から今日までの経緯

高知県香美郡土佐山田町楠目に所在する伏原大塚古墳は，今回の調査が行われるまで県下に残る唯一の前方後円墳ではないかと考えられていた古墳で，県内では宿毛氏平田曽我山古墳[1]に次ぐ規模を誇るものであった。

当古墳が資料にみえるのは昭和27年に著された安岡源一の『高知県縄文式弥生式古墳文化遺跡地名表』の次の一文である。

「香美郡大楠植村字楠目伏原大塚　出土遺物（須恵器・馬具・曲玉・管玉）横穴式石室円墳方向（西南面）現存なし」

一方，今回当古墳について明治以降の様子を記憶している方[2]に話を聞くことができた。ただし，当古墳を当時古墳として認識していたという訳ではない。それによると古墳の盛土自体は明治の初め頃までは確認できたとのことで，明治年間に現在古墳の北側にある県道がつくられる際，盛土の大半は削平されたが，石室の石は大き過ぎたため使用されずそのまま残ったとのことであった。なお，県道工事に使用された盛土には多数の骨が含まれていたそうである。以後，そのままの状態で残っていたらしいが，大正６・７年にはすでに石室の石は散逸し現在の状況になっていたとのことであった。この話からすると先の資料が作成される30年以上前から現況とほとんど変わらなかったことになり，外見のみで，南西方向に開口する横穴式石室を有する円墳と判断できたのかやや疑問が残る。場合によれば他の古墳を指し示したのかもしれない。

次に伏原大塚古墳の名が資料に登場するのは昭和43年に刊行された『高知県史』考古編である。同書には次の一文がある。

「香美郡土佐山田町楠目伏原大塚　伏原古墳群の１（須恵器・馬具・勾玉・管玉）」

そして，前方後円墳ではないかと考えられるようになったのは昭和49年頃とみられ，実際帆立貝式の前方後円墳と想定されたのは昭和52年に行われた発掘調査の結果からである。発掘調査と言っても５日間と短期間のものであった。その結果については『土佐山田町史』，『古代学研究』第103号等に記されている。それによると，「後円部径30m，前方部先端部幅30m，全長45mを測る帆立貝式の前方後円墳である可能性が強く，内部主体はすでに大半が削平され床面と側壁の一部しか残存していないが，竪穴式石室とみられ後円部中央やや西よりに築かれていた。前方部は国道195号線によって寸断されている。遺物はすべて床面から出土し，有蓋高杯，台付長頸壺，台付直口壺，台付広口壺，子持広口壺，子持器台等数多く，一古墳としては県下最多である。また，県内唯一の須恵質の円筒埴輪が出土した。」などの調査結果がでている。しかし，当時からいくつかの疑問が提示されていた。それは，確実に前方後円墳なのか，粘土を床面に敷いたものが竪穴式石室といってよいのか，円筒埴輪と言われるもののなかに須

恵器の器台があるのではないか等々の[3]疑問であった。これ以降これと言った進展もなく今日に至っていた。

因に，県下に残る「大塚（オオツカ）」と呼称されている地名をみてみると，現在３ヵ所で確認されている。それらは，高知市一宮大塚，土佐山田町伏原大ツカそして当古墳の所在する伏原大塚である。このように土佐山田町伏原には二つの「おおつか」と称される地名が残る。しかし，古墳が確認されている「おおつか」は当古墳のみである。また，土佐山田町新改字須江大塚古墳[4]と記載された古墳があるが，ホノギ図には「ツカアナ」と記されており，「大塚」という地名は見当たらず[5]，現在のところ「大塚」という地名は前述の３ヵ所のみということになる。

2.　契機と経過

伏原大塚古墳は，現地形で前方後円墳であるかのように東側では土地の境界線，西側では赤線道としてくびれ部とみられる部分が残存する。特に西側の痕跡は正にその墳形であるかのような残り方をしている。これ以外は前述のとおり，盛土と考えられる部分はほとんどなく，現況では畑地となっているが，後円部の中央部と考えられる箇所には石室の一部とみられる岩が３ヵ所に露出している程度で，指摘されないと見過してしまいそうな残存状況を呈していた。

さらに，周辺部は市街地化しており，新たな発見を生み，当古墳を再びクローズアップさす事実が残されている余地に期待する者は多くはいなかったのではなかろうか。

しかし，今回の調査に先だって行われた隣接地の調査において新たな結果を生む発見があった。それは，平成２年７・８月に実施された大塚遺跡の発掘調査[6]においてであった。大塚遺跡は，当古墳の北西部に隣接する遺跡で，丁度隣接部分で当古墳に関連するのではないかとみられる竪穴状の遺構を検出したのであった。これによって隣接部分に古墳関連遺構が残存する可能性が高まり，翌年３月に行った古墳西側の畑の試掘調査では当古墳の周溝とみられる溝跡２条を検出することができた。結果的には，先の竪穴状遺構は周溝の一部であり，周溝確認の手がかりとなった。

時を同じくしてその畑が病院の駐車場となる話が持ち上がり，急遽当該地を発掘調査することとなった。この調査が今回報告する平成３年度の調査である。調査は平成３年８月１日から10月８日まで実施し，500m²を調査した。その結果，後円部ではないかと考えられていた部分が周溝によって方形に区画されていることが判明し，前方部が存在するであろうという前提のもとに前方後方墳ではないかと推定するに至った。また，古墳の西側には周溝が２条設けられていることも確認され，さらに2,000点にも上る円筒埴輪片が出土し，その存在が確定した。

この調査結果を受け，平成４年度は国庫補助事業として墳形，規模を確認する目的で発掘調査を実施することとなった。調査対象地として３ヵ所を選定した。それらは，後方部と前方部のくびれ部と推定される箇所，後方部の北東隅と考えられる箇所，前方部の南東部が残存しているのではないかとみる箇所の３ヵ所であった。これら土地の所有者は，医療法人同仁会，入

野照喜氏，農林水産省の各位であり，遺跡に対する御理解並びに調査に対する快諾をいただくことができた。調査は，土地の状況に応じ，３回に分けて行い，最終的な調査面積は161m²であり，埋め戻し作業が終了したのは平成５年２月４日であった。

3. 調査日誌抄

(1) 平成3年度の調査　A区（伏原大塚古墳西側の調査）

1991年8月1日～10月8日

8・1　本日から発掘調査にはいる。掘削に先立ち，調査区並びに土置き場の草刈りを行う。また，測量基準点の埋設とローリングタワーの設置を行う。

8・2　トラバース測量と水準測量並びに調査前の全景撮影を同仁病院屋上より行う。

8・5　雨天のため調査は中止。

8・6　本日から掘削作業に取りかかる。表土層の約2/3を掘削する。

8・7　昼過ぎに重機による表土層の掘削を完了し，精査したところ周溝の埋土直上で近世の溝状遺構検出。

8・8　前年度の試掘トレンチの埋め土の除去並びに発掘区及び周辺地形図を平板測量する。

8・9　試掘トレンチの埋め土除去後，近世の遺構の調査にかかる。

8・11　遺構の調査。溝跡は，全面に拳大から人頭大の石を投棄した土坑を切っていた。

8・13　遺構の調査に並行して平面測量を行う。

8・14　遺構の調査と平面測量を行った後，近世の遺構の完掘状態の写真撮影を行う。

8・19　古墳の調査に移る。

8・20　古墳の周溝の検出作業を行ったところ，周溝は南側で東へ曲っていた。

8・21～23　雨天のため調査は中止。

8・26～27　周溝の検出作業を行う。

8・28～29　雨天のため調査は中止。

8・30　周溝の検出作業を行う。

9・2　古墳の周溝の検出状態の写真撮影を行い，遺構の調査に移る。

9・3　ＳＸ－１・２，ＳＫ－１，及び中世の土坑の調査を行う。並行して中世の集石墓の平面実測を行う。

9・4　ＳＸ－１・２，ＳＤ－１の調査を行う。ＳＫ－３からは須恵器に混じって弥生終末期の土器も出土。

9・5　ＳＤ－１の南西コーナー部以北では，埴輪の出土が多くなる。ただ，破片ばかりで原形を留めたものは皆無に等しい。

9・6　ＳＤ－１の内側で検出した弥生後期の遺構の調査も行う。ＳＤ－１からは埴輪の出土が目立つ。ＳＫ－１から須恵器の四耳壺が散在した状態で出土。

9・9　ＳＤ－１から出土する埴輪はすべて破片であるが，それぞれにまとまりが認められる。ＳＤ－２の調査を開始する。

9・10　埴輪を座標で取り上げつつＳＤ－１を掘り下げていく。並行して，セクション，集石の平面実測を行う。

9・11　ＳＤ－１の南西コーナー部基底面より半裁された土師器の甕が置かれた状態で出土した。写真撮影，実測後取り上げる。ＳＤ－２は北に向かってやや深くなるが，ＳＤ－１の深さに比べ約半分の深さである。また，埴輪の出土量も少ない。

9・12　北側の調査を開始する。ＳＤ－１・２の調査を中心に行う。

9・13　雨天のため調査は中止し，現地説明会の資料作成を行う。

9・17　ＳＤ－１の基底面から約10cmの間には埴輪の出土はほとんど認められない。ＳＤ－２からはほとんど遺物は出土しない。集石墓の実測，調査を行う。

9・18　本日もＳＤ－１・２の調査を中心に行う。ＳＤ－1の基底面からＳＫ－１出土の四

耳壺の把手の一つが出土する。また，ＳＤ－１からは埴輪に混じって，手づくね製の土師質土器と青銅製の柄付香炉が出土し，周溝の埋没時期の決め手の一つとなる。

9・19　調査は完了していないが，周溝の全容がほぼ明らかになったので，今回の調査の記者発表を行った。引きつづき，ＳＤ－１・２の調査を行う。

9・20　ＳＤ－１・２の調査。ＳＤ－１からは埴輪の出土も多いが，ＳＤ－２からは遺物がほとんど出土しない。

9・21　本日は午後２時から一般対象の現地説明会を開催する。約110名の参加者があった。

9・24　雨天のため調査は中止。

9・25　ＳＤ－１の調査と調査区を区切っていたバンクセクションの実測とバンクの除去作業を行う。

9・26　ＳＤ－１出土の埴輪の取り上げ，並びに集石墓の調査を行う。

9・27　台風のため調査は中止。

9・30～10・1　雨天のため調査は中止。

10・2　ＳＤ－１・２，ＳＫ－２及び集石墓の調査を行う。集石墓からは土師質土器が副葬された状態で１～２点出土する。

10・3　南側の調査区を区切っていたバンクのセクション実測と除去作業を行う。及びＳＤ－１・２の遺物取り上げ。

10・4　本日は残りの遺構の調査を行い，完掘状態の写真撮影を行う。

10・5　本日は午後から平面実測のための杭打ちを行う。

10・6　午前中セスナ機で上空から写真撮影を行い，午後から平面実測を実施する。約半分を完了。

10・7　残りの平面実測とレベル測量（眼高51.337m）を行う。

10・8　残りのレベル測量を行い本年度の調査を終了する。

Fig. 1　現地説明会

(2) 平成4年度の調査　B区（伏原大塚古墳後方部北東隅と推定した箇所の調査）

1992年7月27日～8月26日

7・27　本日から平成4年度の調査を開始する。調査トレンチの設定と基準点ＴＰ４－①・②の埋設を行う。

7・28　表土層以下人力で掘削し，調査したところ第Ⅲ層上面で周溝を検出した。丁度，ＳＤ－１の北東コーナー部であった。

7・29　周溝の調査に移る。西側に比べ埴輪の出土量が極端に少ない。基準点をＴＰ－４から測り込む。

7・30　引きつづき周溝の調査を行うと共に調査トレンチを新たに設定し，表土層の掘削に取りかかる。周溝コーナー部では埴輪がやや集中して出土する以外，散発的でその量はわずかである。

7・31　周溝のコーナー部はほぼ掘り上げる。コーナー部で出土した埴輪を平面実測し，取り上げる。周溝は1条のみで，西側のように２条設けられていない。

8・3　周溝コーナー部の調査を終了し，新たに設定した調査トレンチの調査に移る。また，最初の調査トレンチの平面実測と土層断面図の作成を行う。

8・4～5　雨天のため調査は中止。

8・6　調査トレンチの水汲みを行い，完掘状態の写真を撮影した後，コーナー部の調査トレンチの埋戻し作業に移る。遺構保護のため砂

を敷く。

8・7　新たに設定した調査トレンチは南北２m，東西５mの規模で，地表下約75cmのところで周溝を検出した。検出した周溝は東側半分であった。

8・17　１週間ぶりに調査を再会する。調査トレンチの水汲み後，周溝（ＳＤ－１）の調査に移る。埴輪の出土量は西側に比べ極端に少ない。引き続き，平面実測並びに土層断面図を作成する。

8・18～20　雨天のため調査は中止。

8・21　都合により調査を中止する。

8・24　遺構の再精査を行い，完掘状態の写真を撮影する。雨が降りだしたため埋戻し作業は明日に延期する。

8・25　雨天のため調査は中止。

8・26　本日は２つ目の調査トレンチの埋戻し作業を行い，Ｂ区の調査を完了する。埋戻しに際しては遺構面に砂を敷き，遺構の保護に当たった。

Fig. 2　調査風景

Ｃ区（伏原大塚古墳前方部南東部分に当たると推測した箇所の調査）

1992年9月9日～9月15日

9・9　本日からＣ区の調査を開始する。林木育種センターの北西隅部分に南北３m，東西７mの調査トレンチを設定する。本日は，表土層の掘削と伐根作業並びに基準点（ＴＰ５－①・②）の埋設を行う。

9・10　周辺部の地形測量，基準点の測り込み及び遺構検出作業を行う。周溝と思しき溝跡１条とそれを切って掘り込まれた近世以降の土坑２基を検出した。

9・11　遺構の調査を行う。２基の土坑からは多数の礫に混り，埴輪片も数点出土。溝の深さは30cmと今まで検出した周溝に比べ浅く，周溝の一部であると断定するには至らなかった。

9・14　完掘状態の写真撮影後，平面実測，土層断面図の作成等を行う。

9・15　調査トレンチの埋戻し作業を行い，Ｃ区の調査を完了する。

Ｄ区（伏原大塚古墳西側のくびれ部と推定した箇所の調査）

1992年12月16日～1993年2月4日

12・16　本年度最後の予定区であるＤ区の調査を開始する。本日は重機を使用して表土層の除去作業を行う。南側半分には近世以降とみられる整地層の堆積が認められた。

12・17　本日も重機を使用し，整地層の除去作業を行い，遺構検出に努める。精査中，周溝（ＳＤ－１）検出面から埴輪片に混じり金環１個が出土する。

12・21　検出面の精査，杭打ち，並びに遺溝検出状況の写真撮影を行い，午後から遺構の調査にかかる。検出した遺構の状況からして前方部の存在は薄く，どうも方墳の可能性が強い。

12・22　周溝の内側で，並行した形に掘られた舟形の土坑（ＳＫ－４）並びに，周溝に直行した形に掘られた土坑（ＳＫ－５）の調査を行う。双方の遺構から拳大から人頭大の河原石の集石を検出した。年内の調査は本日で終了した。

1・5　昨年に引きつづき遺構の調査を行う。

ＳＫ－4からは埴輪の口縁部とほぼ同じ作りの須恵器の大甕が出土。ＳＫ－５の集石には規格性が認められる。

1・6　本日もＳＫ－４・５の調査を行う。ＳＫ－４の下部からも集石を検出し，実測し取り上げる。ＳＫ－５は上部の集石を取り除くと箱形に石組された暗渠であることが判明した。

1・7　本日から周溝（ＳＤ－１）の調査を開始する。周溝検出面から中世の集石墓が数基検出される。

1・8　検出した遺構の調査に並行して，廃土の移設作業を開始する。ＳＫ－５では暗渠部分に埋った土を取りのぞく。ＳＤ－１からの埴輪の出土は少なく，散発的である。

1・11　可能な限り発掘区の拡張作業を行う。周溝（ＳＤ－１）はさらに東へ延びており，方墳であることがほぼ確定的となった。

1・12　遺構の調査と拡張作業を行う。埴輪の出土が少ない。東へ行くに従って数が減る。

1・13　遺構の調査と拡張作業を行う。中世墓では人骨が残存するものも認められた。

1・14　雨天のため調査は中止。

1・15　残っている遺構の調査を行い，ほぼ完了する。

1・19　周溝の調査終了後，完掘状態の写真撮影を行う。文化庁松村調査官から指導を受ける。

1・20　平面実測を行う。

1・21　レベル実測を行い，調査を終了する。

1・29　新聞発表を行う。現地説明会は調査区が狭い上，周囲はすべて民地のため今回は見送った。

2・2～4　埋戻し作業を行う。遺構面には遺構保護のため砂を敷いた。これで，本年度の調査を完了する。

註

(1) 岡本健児編著『日本の古代遺跡39高知』　保育社　平成元年　など
(2) 福留勇亀吉さん（明治43年生まれ）から聞くことができた。なお，明治の初めの頃の様子は勇亀吉さんが父から聞いたとのことであった。
(3) 岡本健児「高知県」『日本考古学年報』30　(1977年度版)
(4) 岡本健児『高知県史』考古編　高知県　昭和43年など
(5) 土佐山田町文化財保護審議会委員岡林華伝氏の教示による。
(6) 土佐山田町教育委員会『大塚遺跡発掘調査報告書』平成２年３月

第Ⅱ章　遺跡の地理的，歴史的環境

1．地理的環境

土佐山田町は，高知県の中央部やや北東寄りに位置し，行政区画では香美郡に属す。東を香我美町，香北町，南を野市町，西を南国市，北を本山町と大豊町の１市５町と境を接し，西から南東にかけては平野部，北から北東にかけては山間部となっている。面積は110.98km^2，人口22,800人（平成５年２月末現在）を有し，高知県最大の町であると共に高知平野の一角に位置した歴史と伝統の町ともいえ，東にある三宝山の中復には国指定史跡，天然記念物である竜河洞があり，高知県でも有数の観光地となっている。

地理的には，根曳峠・甫喜ヶ峰・赤塚山を結ぶ分水嶺から注ぎ出た物部川が東部，新改川（国分川）が西部を南流し，太平洋に流れ込んでいる。この両河川によって形成された河岸段丘，扇状地がほとんどの遺跡の立地となっており，特に，物部川は山間部で見事な河岸段丘，平野部で広大な扇状地を形成している。

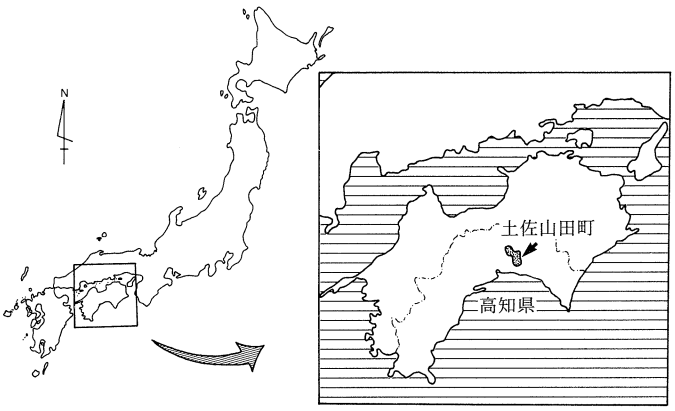


Fig. 3　土佐山田町位置図

現在の中心街は，この物部川によって形成された河岸段丘上（長岡台地）に発展し，主要幹線道路である国道195号線は，中心街を東西に横断し，県道と町道がそこから南北に派生した形となっている。鉄道（土讃本線）もこの国道に沿う形で東西に走り，丁度市街地を過ぎたところから北に方向を変え，四国山地に向かう。

今回報告する伏原大塚古墳は，高知平野の東部を南流する先の物部川右岸の長岡台地の北東部に位置し，高知平野を一望できる箇所に位置する。所在地は，香美郡土佐山田町楠目伏原字大塚で，現在の地番でいえば香美郡土佐山田町百石町２丁目３～４番に該当する。古墳の前面は国道195号線が東西に通り，周辺は市街地化が進み，古墳の面影を留める箇所はほとんど見られなくなっている。救いは，古墳を区画する周溝が現地表から比較的深い部分で検出されていることから宅地の下にも残存している可能性があることと，主体部の存在した部分は削平され石室の石が露出した形とはなっているも畑地として残り，盛土の基底部が破壊されていないとみられる点であり，将来新たな発見の余地がない訳ではない。ただ，現状では築造当時の面影はなく，古墳北東部隅に当古墳を守るかのように蔵王権現を奉った社が鎮座しているのみである。

2. 歴史的環境

土佐山田町は，前述のとおり地理的に恵まれ，県下最大の高知平野の一画に位置することから原始以来，綿々とした人々の営みを大地に刻み付けている。中でも，県下最大の古窯址群を有し，古墳時代以降特にその発展に目を見張るものがある。

歴史を追ってみてみると，現在のところ最古の遺跡は吉野川の上流穴内川に近い繁藤にある飼古屋岩陰遺跡[(1)]を挙げることができる。高知自動車道建設工事に伴って発掘調査が実施され，縄文時代早期の押型文土器，厚手無文の蔦島式土器，中期の船元Ⅱ式土器，後期の彦崎ＫⅡ式土器が出土すると共に多数のサヌカイト製の石鏃が伴出している。ほぼ同時期の佐川町不動ヶ岩屋洞穴遺跡はチャート製の石鏃が中心となっていることと対照的で，サヌカイトの主産地である香川県金山との地理的条件等によるものが大きかったのであろう。また，本遺跡からは，弥生時代後期後半の土器も出土している。縄文時代ではこれ以降目立った遺跡は発見されていないが，林田遺跡では晩期前半の遺構も確認されており[(2)]，今後，田村遺跡群の弥生時代初頭の集落に繋がる遺跡も発見されよう。

弥生時代では前期に属する遺跡の確認には至っておらず，稲荷前遺跡[(3)]など中期以降の遺跡の存在が判明している。中でも中期後半に属する遺跡が多く，先の遺跡以外に原遺跡[(4)]，原南遺跡[(5)]，予岳遺跡，雪ヶ峰遺跡などが知られている。中でも，前述の竜河洞遺跡は著名で，昭和６年に洞窟が発見され，遺跡は昭和８年に確認されている。遺構，遺物は三宝山中腹の開口部で検出され，その土器は竜河洞式土器と呼ばれた。弥生時代も後期になると遺跡数・規模の拡大がみられ，特にひびのき遺跡[(6)]に代表される後期後半に属する遺跡の急増が認められる。ひびのき遺跡は当古墳に近接しており，また，隣接して同時期のひびのきサウジ遺跡[(7)]も確認され，当古墳の周辺に弥生後期後半期の大規模な集落の存在が推察される。これら集落は古墳時代にはいると忽然と消えてしまい，次に姿を再び現すのは古墳時代も後期になってからである。

この時代を代表するのが，今回報告する伏原大塚古墳である。これ以降７世紀にかけて北部の山麓部を中心に群集墳が点在する。この期の須恵器の窯跡は今のところ発見されていないが，当古墳の埴輪の存在を考えれば，出現期は少なくとも当古墳の築造期と同時期まで遡ることは可能であろう。この古窯跡は新改・植地区に所在し，須江古窯跡群と呼称され，須恵器の「すえ」の名が残る県下唯一の土地でもある。律令体制にはいってからも，下流に国衙跡，国分寺等が造営され，古代を通じ窯業の盛んな地域となっている。一方，古墳時代後期の集落は当古墳に隣接した前述のひびのきサウジ遺跡で検出されている。時期的にみて当古墳と密接に関連した集落跡とみられるが，10棟などと言う住居数で構成される人数では到底当古墳を築造することは不可能であり，周辺部には想像以上の規模の集落が存在したと推測される。因に当古墳は伏原古墳群５基の中の１基に数えられている。

古代には，香美郡と長岡郡に属し，前者には町名のもととなった山田郷，石村郷，後者には殖田郷がある。また，石村郷内には「大領」の地名並びに方形の区画が残る部分があり，香美

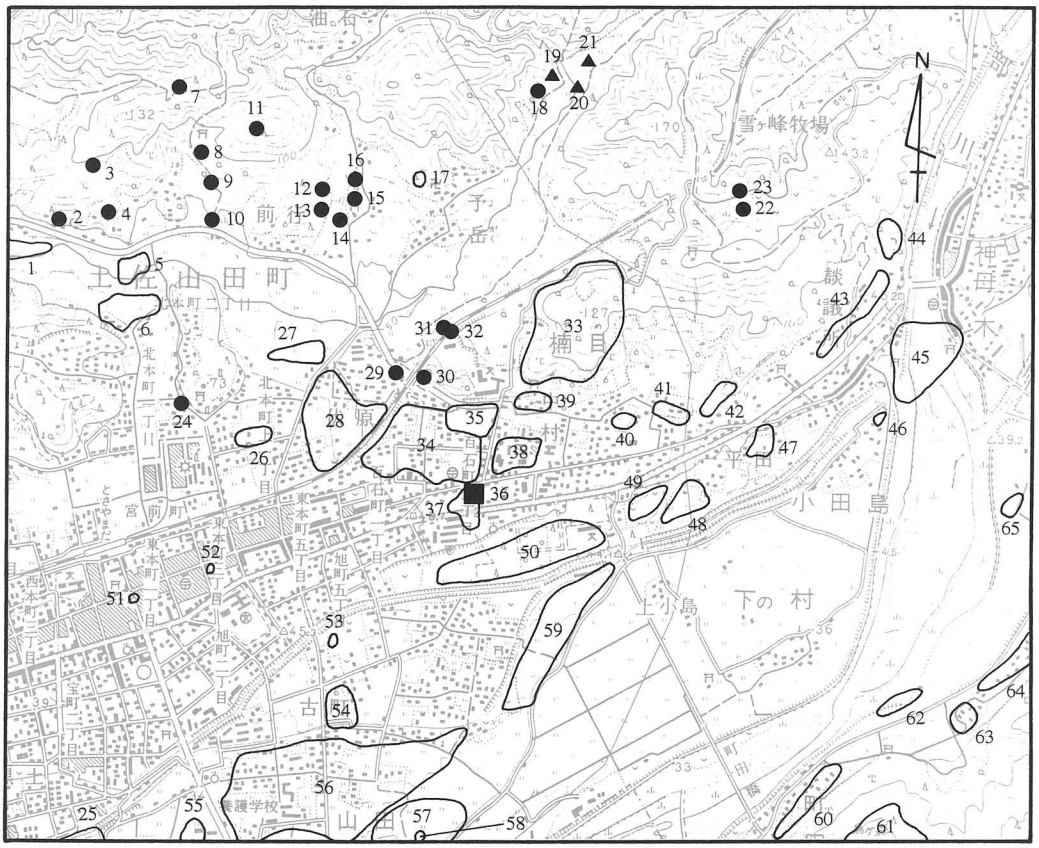


Fig. 4　伏原大塚古墳と周辺の遺跡分布図（S＝1：25,000）

Tab. 1　伏原大塚古墳と周辺の遺跡分布表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	西クレドリ遺跡	弥生	23	雪ヶ峯２号墳	古墳	45	山田堰	近世
2	東平南古墳	古墳	24	八王子西古墳	〃	46	小田島遺跡	古代
3	杖坂２号墳	〃	25	下夕野遺跡	〃	47	郷本遺跡	弥生
4	杖坂３号墳	〃	26	長谷川丸遺跡	〃	48	前ノ芝遺跡	古代
5	植キノサキ遺跡	中世	27	メウカイ遺跡	弥生	49	大西土居遺跡	弥生
6	山ノ間丸遺跡	〃	28	伏原遺跡	古墳	50	楠目遺跡	古代
7	深坂古墳	古墳	29	鏡野学園古墳	〃	51	公儀の井戸１	近世
8	中沢古墳	〃	30	小倉山古墳	〃	52	公儀の井戸２	〃
9	溝渕古墳	〃	31	伏原１号墳	〃	53	古町北遺跡	弥生
10	桜ヶ谷古墳	〃	32	伏原２号墳	〃	54	古町西遺跡	〃
11	杖坂東古墳	〃	33	楠目城跡	中世	55	クロアイ遺跡	〃
12	前行山１号墳	〃	34	ひびのきサウジ遺跡	古墳	56	原遺跡	〃
13	前行山２号墳	〃	35	ひびのき岡の神母遺跡	弥生	57	高柳遺跡	中世
14	神母古墳	〃	**36**	**伏原大塚古墳**	**古墳**	58	高柳土居城跡	〃
15	大元神社古墳	〃	37	大塚遺跡	〃	59	稲荷前遺跡	古墳
16	大元神社北古墳	〃	38	ひびのき遺跡	弥生	60	ガニウド遺跡	〃
17	山田氏累代墓所	中世	39	ひびのき大河内遺跡	〃	61	鳥ヶ森城跡	中世
18	予岳古墳	古墳	40	田所神社遺跡	〃	62	加茂神社西遺跡	〃
19	予岳窯跡	〃	41	横田遺跡	〃	63	加茂城跡	〃
20	長谷山１号窯跡	平安	42	南森城跡	中世	64	加茂遺跡	〃
21	長谷山２号窯跡	〃	43	宮田遺跡	弥生	65	山田島遺跡	古墳
22	雪ヶ峯１号墳	古墳	44	雪ヶ峯城跡	中世			

郡衙の推定地となっている。駅家跡の推定地も新改川（国分川）左岸の植地区にあり，古窯跡の存在と合せ，古代の要衝の地であったことは疑いないところである。先のひびのきサウジ遺跡からも平安時代に属する集落が発見されている。出土遺物に緑釉陶器や刻書土器など一般の集落のそれとはやや趣を異にする遺物もあり，その性格が注目されている。

中世では戦国７雄の１人に数えられた山田氏が，建久４年（1193年）土佐に入部以来勢力を延ばし，楠目に築城した山田城を拠点として城下町建設を行っている。しかし，天文18年（1549年）には長宗我部国親の攻撃を受けて敗北し，長宗我部氏の支配下にはいる。この前後に当古墳に樹立していた円筒埴輪が周溝に投棄され，周溝が埋められている。そして，その上から多数の土坑墓が検出され，古墳の周辺は墓地化したことが窺える。

以後，山内氏が高知に入城し，中世の終焉，近世の始まりとなり，古墳周辺も目立った痕跡は残されず，今日に至る。

註

（1）日本道路公団・高知県教育委員会『飼古屋岩陰遺跡調査報告書』1983・3

（2）平成4年度の発掘調査において確認されている。包含層からは縄文後期初頭と晩期中頃の土器も発見されているとのことである。

（3）土佐山田町教育委員会『稲荷前遺跡発掘調査報告書』1990年

（4）高知県教育委員会『公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－原遺跡－』1982年
廣田典夫・廣田佳久「公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－原遺跡－」Ⅱ『高知県文化財調査報告書』第25集　高知県教育委員会　1984年

（5）高知県文化財団『原南遺跡発掘調査報告書』1991年

（6）土佐山田町教育委員会『ひびのき遺跡』1977年

参考文献

『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会　1979年

『角川日本地名大辞典39　高知県』角川書店　1986年

『土佐の須恵器』廣田典夫　1991年

『土佐山田の文化財』土佐山田町教育委員会　1986年

『早咲遺跡』大方町教育委員会　1991年

『県史跡　鹿持雅澄邸跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1992年

『高知県の歴史』山本大　山川出版社　1970年

第Ⅲ章　調査の概要

1. 調査の方法

伏原大塚古墳は，昭和52年（1977年）に墳丘部の調査が行われて以来，本格的な調査が実施されていなかったが，平成３年度の調査を契機に継続して平成４年度も古墳の全容を確認すべく学術調査を実施することとなった。

発掘調査に当たっては，まず，基準点の設置を行った。基準点は，平成元年度に土佐山田町教育委員会が実施したひびのきサウジ遺跡の際設定していた磁北を基準とした任意座標の基準点ＴＰ１（64.324，103.992）と磁北控（ＴＰ８）（92.777，100.000）を基にトラバース測量を実施し，測量成果（Tab. 2）に基づく基準点を使用した。因に，Ｘ軸は磁北に向う値を正，Ｙ軸はＸ軸に直交する軸とし東に向う値を正とするようになっており，今回，新たにＴＰ２～７

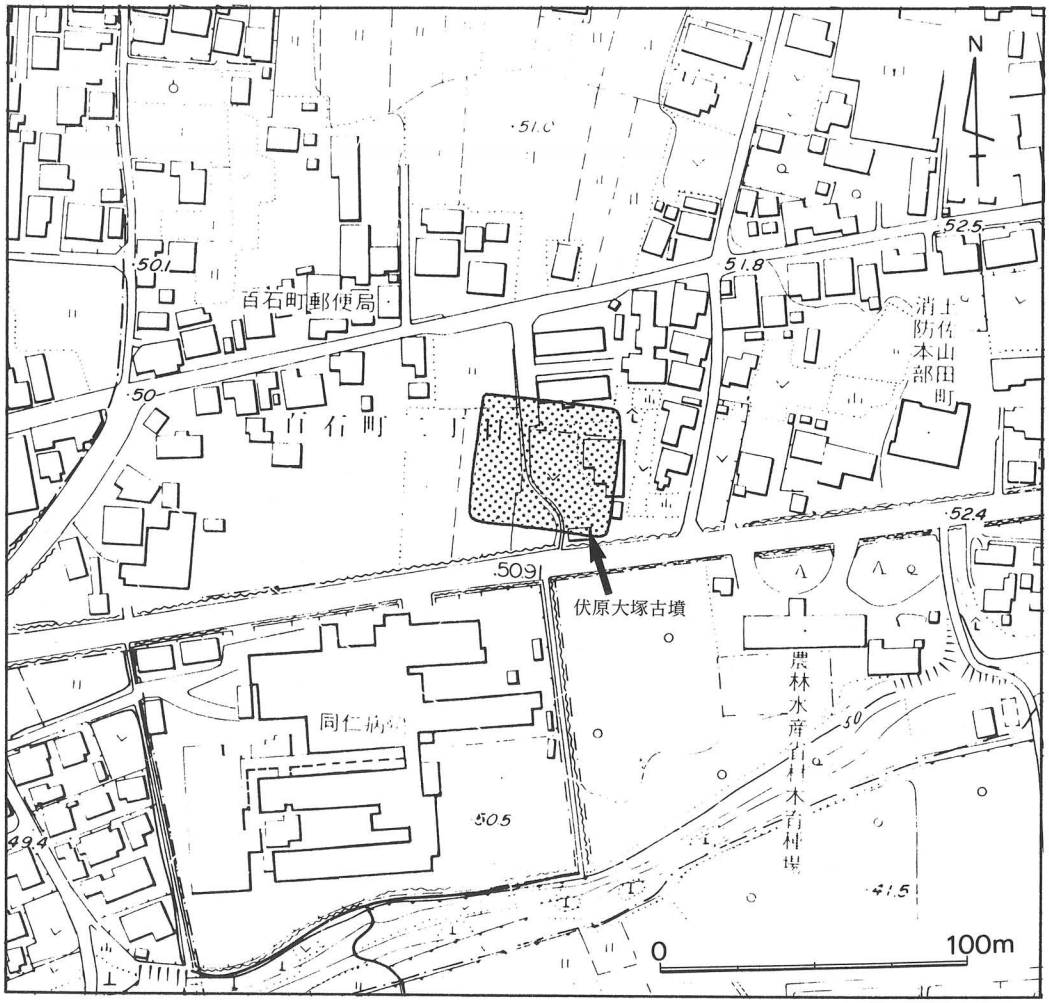


Fig. 5　伏原大塚古墳周辺地形図（S＝1：2,500）

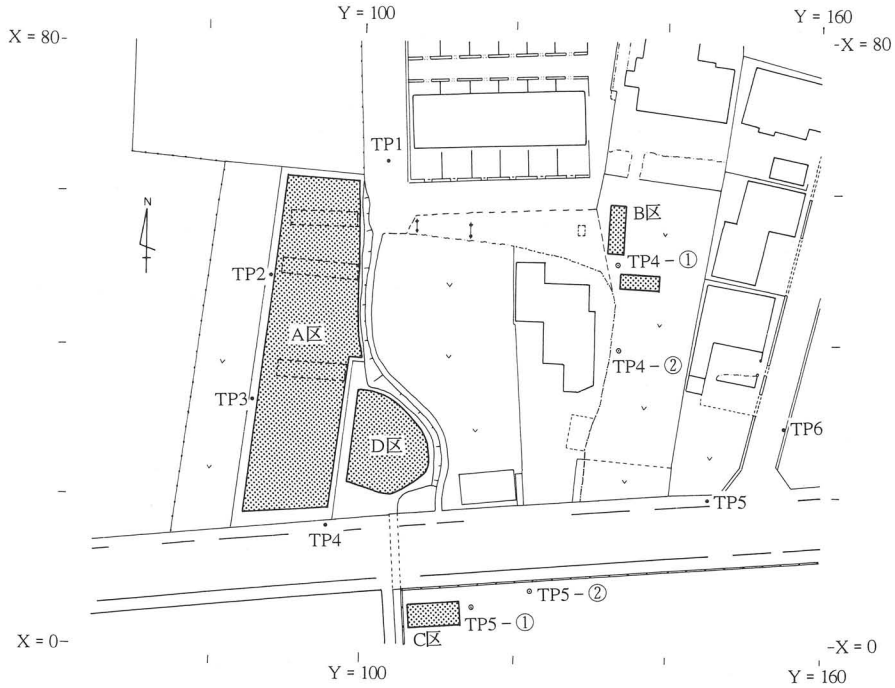


Fig. 6　伏原大塚古墳調査区全体図（S＝1：1,000）

を設定した。使用した機械は，10秒読みの測距測角儀，測機舎ＳＦＴ４Ａであった。測量結果は，Tab. 2に記し，同時に実測した水準測量の結果も同様に記載した。

調査区は，調査年度，調査順にA区，B区，C区，D区と呼称し，平成３年度にA区，平成４年度にB～D区の調査をそれぞれ実施した。調査は，原則としてすべて人力で掘り下げることとしたが，A・D区は機械力を使用し表土層の掘削を行った。調査対象面積は平成３年度が583m²，平成4年度が1,000m²で，最終的な調査面積は661m²であった。なお，発掘調査面積の内訳は，A区が500m²，B区が24m²，C区が21m²，D区が116m²である。

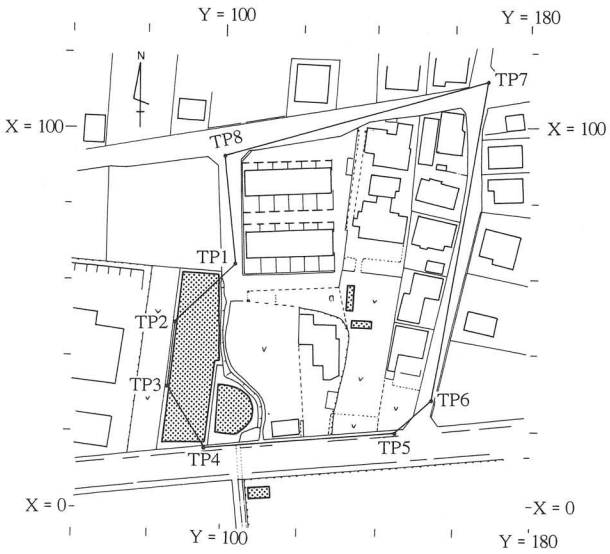


Fig. 7　トラバースポイント配置図（S＝1：2,000）

2. 調査区の概要

(1) A区

伏原大塚古墳の西側の畑地で，南側

Tab. 2　トラバース測量座標成果一覧表　（路線名　伏原大塚古墳　測点名　ＴＰ１～ＴＰ８　実測精度　1/34,402）

測角点	方向点	整正方向角	水平距離（m）	X（m）	Y（m）	座標点	標高（m）
ＴＰ８	ＴＰ１	172° 00′ 48″	28.732	64.324	103.992	ＴＰ１	51.074
ＴＰ１	ＴＰ２	225° 42′ 40″	22.336	48.727	88.003	ＴＰ２	51.317
ＴＰ２	ＴＰ３	189° 19′ 56″	17.070	31.883	85.235	ＴＰ３	50.340
ＴＰ３	ＴＰ４	147° 26′ 39″	18.802	16.035	95.353	ＴＰ４	50.363
ＴＰ４	ＴＰ５	87° 26′ 18″	49.667	18.255	144.970	ＴＰ５	50.959
ＴＰ５	ＴＰ６	42° 49′ 43″	14.650	28.999	154.929	ＴＰ６	51.465
ＴＰ６	ＴＰ７	11° 57′ 21″	82.474	109.684	172.014	ＴＰ７	51.206
ＴＰ７	ＴＰ８	256° 47′ 16″	73.972	92.777	100.000	ＴＰ８	51.773
ＴＰ８	ＴＰ１	172° 00′ 48″	28.732	64.324	103.992	ＴＰ１	51.074

を国道195号線，北側を平成２年度の調査区（大塚遺跡），南東部をＤ区と境を接する。調査対象面積は583m²で，標高は約50.4ｍを測る。

まず，調査区が東西約14m，南北約47ｍと南北に細長いため，発掘区を北から順に１区，２区，３区と分けた。調査は，廃土処理の関係上南側の３区から順次実施した。

その結果，遺構は，表土層及び整地層除去後に近世の溝跡等，これらの遺構除去後に中世の集石墓や土坑墓，そして，遺物包含層を取り除いた段階で周溝のプランを検出することができた。中・近世の遺構の検出面はほぼ平坦であるのに対し，周溝の検出面は東西で15～20cmの比高差があり，古墳の周囲を意識的に掘り下げたことが窺える。また，古墳の盛土の一部とみられる部分との境で古墳築造の際の版築を確認することができた。古代寺院等のように整然としたものではないが，周溝掘削の際の廃土である地山の砂礫層と黒色粘質土（黒ボク層[1]）を交互に敷きつめ叩き締めていた。

層序

Ａ区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　黒褐色粘質土層

第Ⅲ層　黒色粘質土層

第Ⅳ層　褐色粘質土層

第Ⅴ層　黄褐色砂礫土層

この内，南部を中心に第Ⅱ層，場所によっては第Ⅲ層が認められず，代わりに整地層（赤色礫岩粒を含む赤褐色粘質土層で4層に分層される箇所もある）が検出された。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測る。現状は畑地で畝状をなす。

第Ⅱ層は基本的に古墳時代の遺物包含層であるが，後世の遺構や整地層によって掘り込まれ，

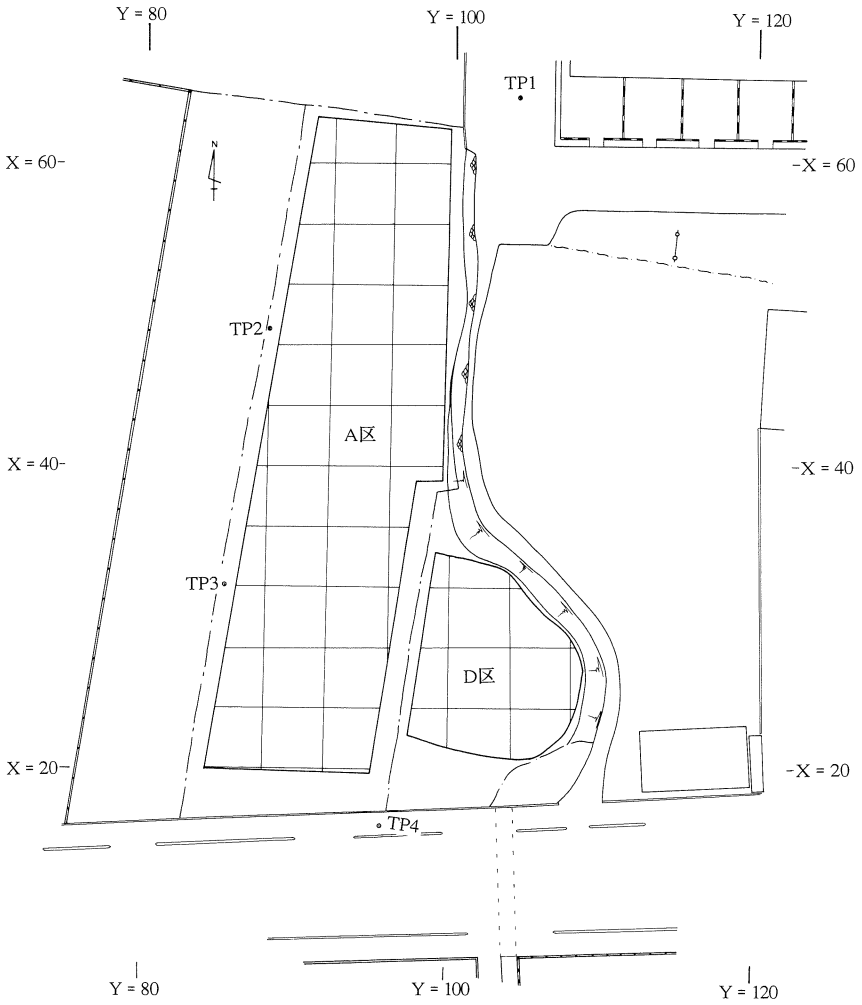


Fig. 8　A・D区周辺図及びグリッド設定図（S＝1：500）

または削平されており，遺存状況は不良であり，出土遺物もほとんど細片で復元できたものは僅かであった。

第Ⅲ層は黒ボク層であり，第Ⅳ層上面に基本的には堆積するが，全般に削平が著しく，残存している箇所は少ない。

第Ⅳ層は自然堆積層で，周溝及び弥生時代の遺構の検出面となっている。周溝の内側及び標高の高い部分で認められた。

第Ⅴ層は地山の砂礫土層で，南西端部及び標高の低い部分での遺構検出面となっていた。また，この砂礫土層の検出面が，南西方向に向かってやや高くなっていることから旧地形もその方向を中心に微高地となっていたとみられる。なお，周溝はこの砂礫土層を0.8～1.0m掘削して設けられている。

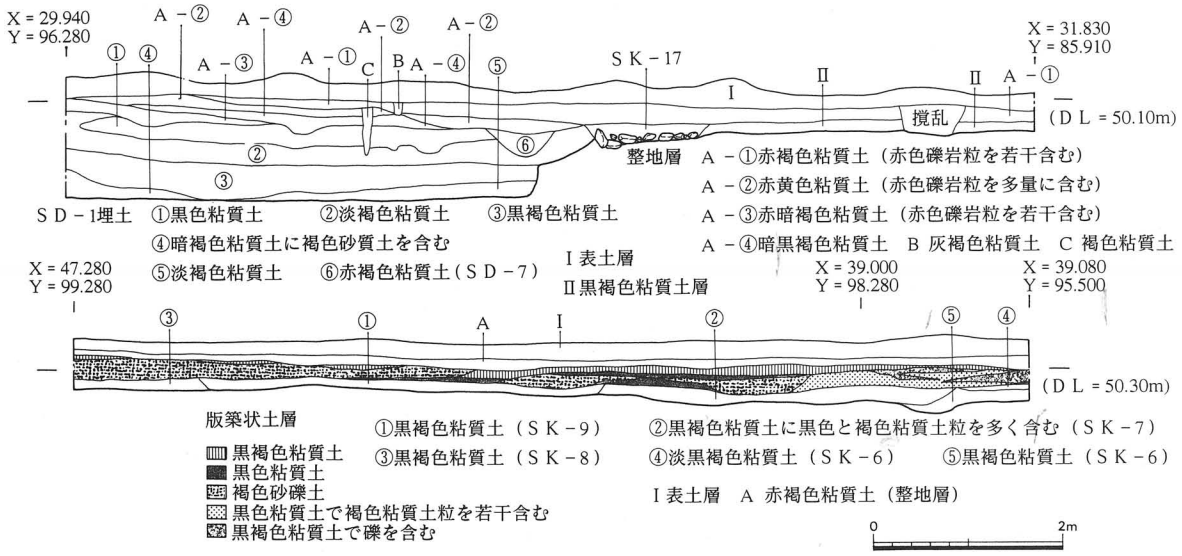


Fig. 9　A区セクション図（S＝1：80）

(2) B区

平成３年度のＡ区の調査において，古墳の周溝の西端が検出され，さらに調査当時後方部南西端とみられるコーナー部も確認された。そのため，この対角線に当たる北東端のコーナー部を確認すべく，調査対象地として選定した調査区である。調査対象地はＡ区と古墳を挟んでほぼ対称的な地形を呈しており，東西約11m，南北約42mを測る。調査区が民地でありかつ現状で作物が植えられていたが，希望する部分を調査することができた。ただ，発掘区は，調査区が前述の状況のため，限定された。

まず，古墳の北東端とみられる部分に東西２m，南北７mの南北トレンチ（TRB－1）を設定し調査した結果，丁度北東端のコーナー部を検出することができた。周溝の埋没状況はＡ区

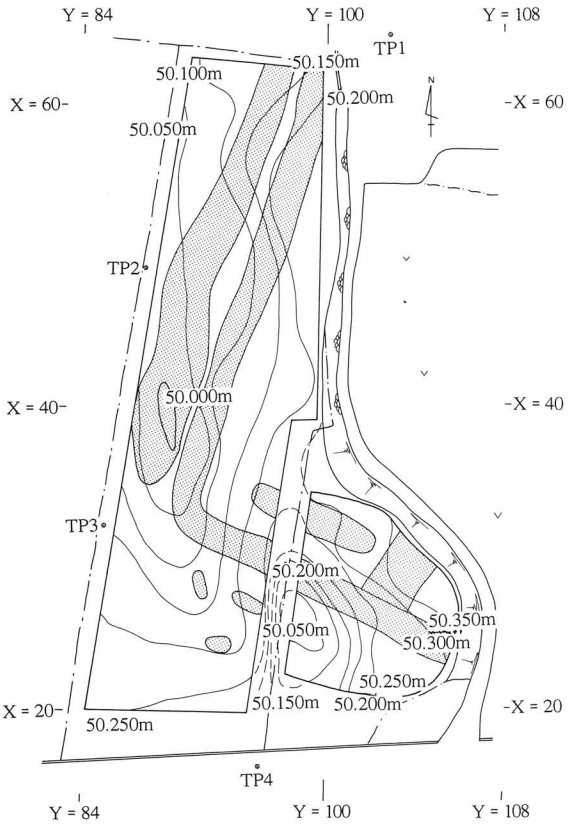


Fig. 10　A・D区周溝検出時平面図（S＝1：200）

のそれとほぼ同じであったが，埴輪の出土は極端に少なかった。次に，ＴＲＢ－１南東端から2.5ｍのところから南に２ｍ，東に７ｍの東西トレンチ（ＴＲＢ－2）を設定した。ＴＲＢ－１とは直交する。このトレンチは周溝の東端を確認する目的で設定したトレンチであった。調査の結果，周溝は１条のみで，古墳の西側のように周溝は２条設けられていなかった。

層序

Ｂ区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　暗褐色粘質土層

第Ⅲ層　暗黒褐色粘質土層

第Ⅳ層　褐色粘質土層

第Ⅴ層　褐色砂礫土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面であった。

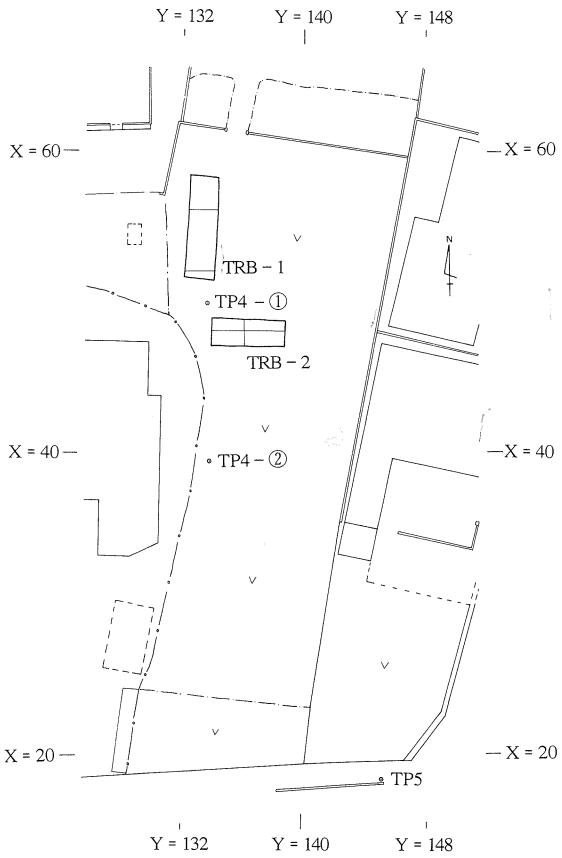


Fig. 11　Ｂ区周辺図とグリッド設定図（Ｓ＝1：500）

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～25cmを測る。現状は畑地であった。

第Ⅱ層は腐食土層であるが，厚さが50～60cmもあり下層部では遺物包含層の存在も考えられたが，径20cmを測る木の根を始めとして無数の木の根が縦横無尽に張っており，識別できなかった。またそれを裏付けるに足るだけの遺物の出土もみられなかった。第Ⅲ層も第Ⅱ層同様腐食土層の可能性もあるが，周溝の内側でのみ確認され，古墳の盛土の一部ともみることもできる。しかし，丁度西側に楠の大木があり，根による撹乱も考えられ，今回の調査だけでは断定することはできなかった。

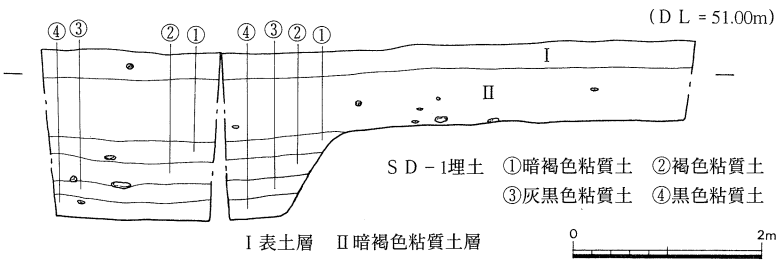


Fig. 12　Ｂ区（ＴＲＢ－２）セクション図（Ｓ＝1：80）

第Ⅳ層はＡ区でも認められた自然堆積層で，周溝の検出面となっている。Ｂ区では周溝内側

でのみ確認された。

第Ⅴ層も各区で認められる地山の砂礫土層で，周溝の検出面ともなっている。B区では周溝の検出面はすべてこの砂礫土層となっていた。また，ＴＲＢ－１では北に向って本層の検出面が上がっており，調査区北側がやや微高地となっている可能性もある。

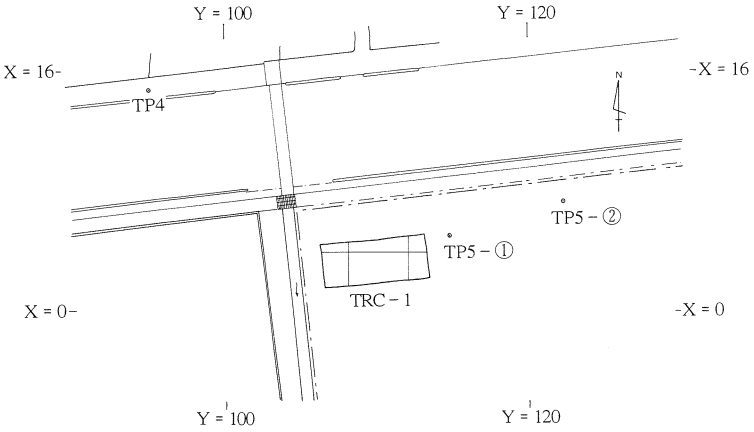


Fig. 13　C区周辺図とグリッド設定図（S＝1：500）

(3)　C区

前方部確認のために選定した調査区である。この時点では残存する地形から前方部の存在が有力視されていたが，現状では調査可能な部分が少なく，それを確認できるのはC区及びD区に限られた。D区については作物の関係上，すぐには調査にはいれないため，本調査区を先に調査することとした。

調査区は，古墳とは国道195号線を挟んだ南側の林木育種センター（農林水産省・林野庁関西育種場四国事業場）内であった。調査区は国有地であったが，事業場長の調査に対する御理解をいただき調査することができた。

調査は，まず，一帯に植えられている楢，桧，桜などの樹木の間隙をぬって発掘区を設定した。発掘区は南北３m，東西７mの東西トレンチ（ＴＲＣ－１）で，希望する北西隅に設定することができた。調査の結果，溝状の遺構と近世以降の土坑２基を検出した。溝状遺構（ＳＤ－３）は，２基の土坑（ＳＫ－41・42）によってその大半が削られ，残存部が少なく，方向的には周溝の一部と考えることも可能であったが，確定するには至らなかった。

層序

C区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　表土層

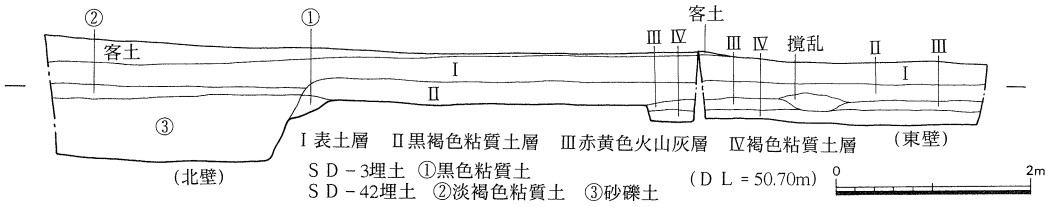


Fig. 14　C区（ＴＲＣ－1）セクション図（S＝1：80）

第Ⅱ層　黒褐色粘質土層

第Ⅲ層　赤黄色火山灰層

第Ⅳ層　褐色粘質土層

第Ⅴ層　黄褐色砂礫土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅲ層上面であった。

第Ⅰ層の表土層は，厚さ20～30cmで腐食土層ともなっている。

第Ⅱ層はA区・D区で認められる古墳時代の遺物包含層と考えられ，トレンチ東側で確認された。ただし，包含する遺物は僅かでかつ細片であった。

第Ⅲ層は所謂アカホヤと称される火山灰層[(2)]である。この周辺地域では，黒ボク層の下層で土壌化せず残ったアカホヤをみかけることは良くあるが，今回のようにプライマリーに近い状態で検出されることはほとんどない。

第Ⅳ層は各調査区，地山の砂礫土層の上で認められる自然堆積層である。他の調査区ではこの上面が遺構検出面となっている。

第Ⅴ層は地山の砂礫土層で，第Ⅳ層の下層で検出される。２基の土坑はこの層を掘削して掘り込まれていた。

(4)　D区

古墳の前方部と後方部のくびれ部を確認すべく選定した調査区である。平成３年度調査したA区の南東部に隣接する。調査区は北から東にかけて古墳の輪郭を残しているとみられた赤線道，南に国道195号線，西にA区と境をなす不整形の土地で，当初廃土置き場として東側1/3を残していたが，周溝が東進していることもあり，所有者の御理解も得られたことから，別途廃土の仮置き場を構え，全面発掘を行うことができた。

調査の結果，周溝（ＳＤ－１）の続き，土坑２基（内１基は暗渠設置坑），中世墓13基などを検出することができた。なお，検出面はA区とほぼ同じ状況であった。埴輪の出土についてはA区のそれと異なり，１箇所で集中がみられた以外発散的で，その出土量はA区の10％に満たなかった。これは当然埴輪の樹立位置に関係したことであろう。

層序

Ｄ区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　表土層

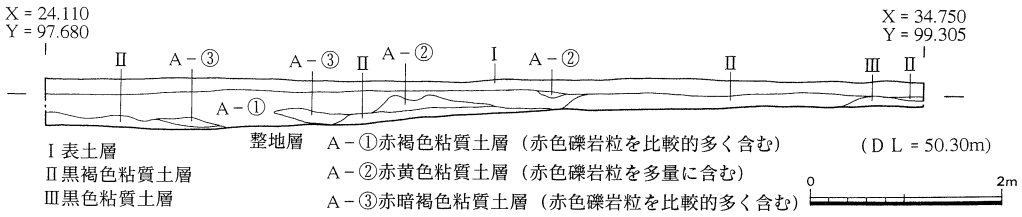


Fig. 15　Ｄ区セクション図（Ｓ＝１：80）

第Ⅱ層　黒褐色粘質土層

第Ⅲ層　黒色粘質土層

第Ⅳ層　褐色粘質土層

第Ⅴ層　黄褐色砂礫土層

層位中，遺構が検出されたのは，第Ⅳ層，第Ⅴ層上面であった。また，中央部から南側にかけては近世以降とみられる整地層が第Ⅰ層直下で認められた。本調査区ではこの整地層は３層に区分される。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測る。現状は畑地で畝状をなす。

第Ⅱ層は基本的に古墳時代の遺物包含層であるが，全般に削平され厚さは10cmに満たず，特に整地層が認められた部分では全く検出されない箇所もあった。遺物の包含量は他の調査区同様少なくかつほとんどが細片である。

第Ⅲ層は黒ボク層で，調査区北側，第Ⅳ層が検出された部分で認められた。削平のためか堆積は薄く，５cm前後である。

第Ⅳ層は自然堆積層で，周溝や土坑の検出面となっている。周溝の内側でのみ検出された。周溝の外側は，古墳築造の際削られたものと推測され，第Ⅲ層の下層は第Ⅴ層となっていた。

第Ⅴ層は地山の砂礫土層で，周溝外側の検出面となっている。周溝（ＳＤ－１）はこの層を0.8～1.0m掘削し設けられていた。また，南西部では意識的に削平されている部分もあった。

註

(1)　約6,300年前に鹿児島の沖にある鬼界カルデラの噴火によって降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）が風化，腐食し土壌変化した土層で，周辺で良くみかける堆積層である。なお，Ｃ区での遺構検出は，先の火山灰上面であった。

(2)　(1) 参照

第Ⅳ章　遺構

本章では，伏原大塚古墳に関連するとみられる遺構について，各調査区ごとに記述すると共に周溝（ＳＤ），土坑（ＳＫ），性格不明遺構（ＳＸ）の順に記載する。他の時代の遺構については第Ⅵ章その他の遺構と遺物において記している。また，Ａ区とＤ区については時代ごとに全体図を掲載した。この全体図では時代の異なる遺構は極力外したが，切り合いの関係上止むを得ず同一図面に載せたものについては，遺構番号を遺構ごとの通し番号としており重複は避けている。

Ａ区では周溝（ＳＤ－1・2），土坑墓（ＳＫ－1～3），土坑（ＳＫ－4），性格不明遺構（ＳＸ－1・2），Ｂ区では周溝（ＳＤ－1），Ｃ区では溝状遺構（ＳＤ－3），Ｄ区では周溝（ＳＤ－1），土坑（ＳＫ－4），暗渠設置坑（ＳＫ－5）をそれぞれ検出した。以下，調査区ごとに記述する。

1. Ａ区

(1) 周溝

ＳＤ－1（Fig. 17，付図）

調査区中央部から北部にかけて検出した伏原大塚古墳内側の周溝であり，古墳の周囲を方形に区画する。Ａ区では，調査区北東隅から南西隅に向って延び，南側1/4のところで南東方向へ直角に曲がる。南北の主軸方向はN－18°33′－Eで，東西方向はやや開きN－66°8′－W を測る。周溝の幅は1.6～2.4ｍで，2.0ｍ前後のところが最も多く，深さは検出面から0.88～0.97ｍで，基底面は標高49.127～49.262ｍを測り，10cm前後の比高差はあるが全体的にはほぼ平坦と言い得るものである。検出長は南北約33.6ｍ，東西約7.2ｍで，推定の南北幅は約38ｍである。断面形は上端がやや広がる箱形ないしは逆台形状を呈し，壁は底面より56°～73°ときつい傾斜角で上がる。平均の傾斜角は約65°である。埋土の堆積状況は場所によりいく分異なるが，基本的には黒色粘質土を主体とする埋土で，３～４層に分類される。東西側ではある程度の自然埋没の状況も看取できるが，大半は一時期に一気に埋没した状態を呈す。南北側も基本的には同じであるが，南斜面に沿って第Ⅳ層とほぼ同じ堆積がみられ，外堤状の盛土が周溝南沿いに存在していた可能性も考えられる。また，外側に周溝（ＳＤ－２）を伴う部分では検出の際ＳＤ－２と同一の溝として検出され，約15cm掘り下げた段階でＳＤ－２と区別できた。すなわち，ＳＤ－１とＳＤ－２とは検出面の標高が異なっている。これはＳＤ－１とＳＤ－2との間を１段下げた結果によるものとみられ，ＳＤ－１とＳＤ－２との間に中堤が存在した可能性も考えられる。遺物は円筒埴輪片を中心に約1,500点が出土した。これらのほとんどは破片で，原形を留めたものは僅かであり，底部から口縁部まですべて復元できたものは８点であった。これらの出土状況をみてみると，ある程度の散らばりはみられるもののそれぞ

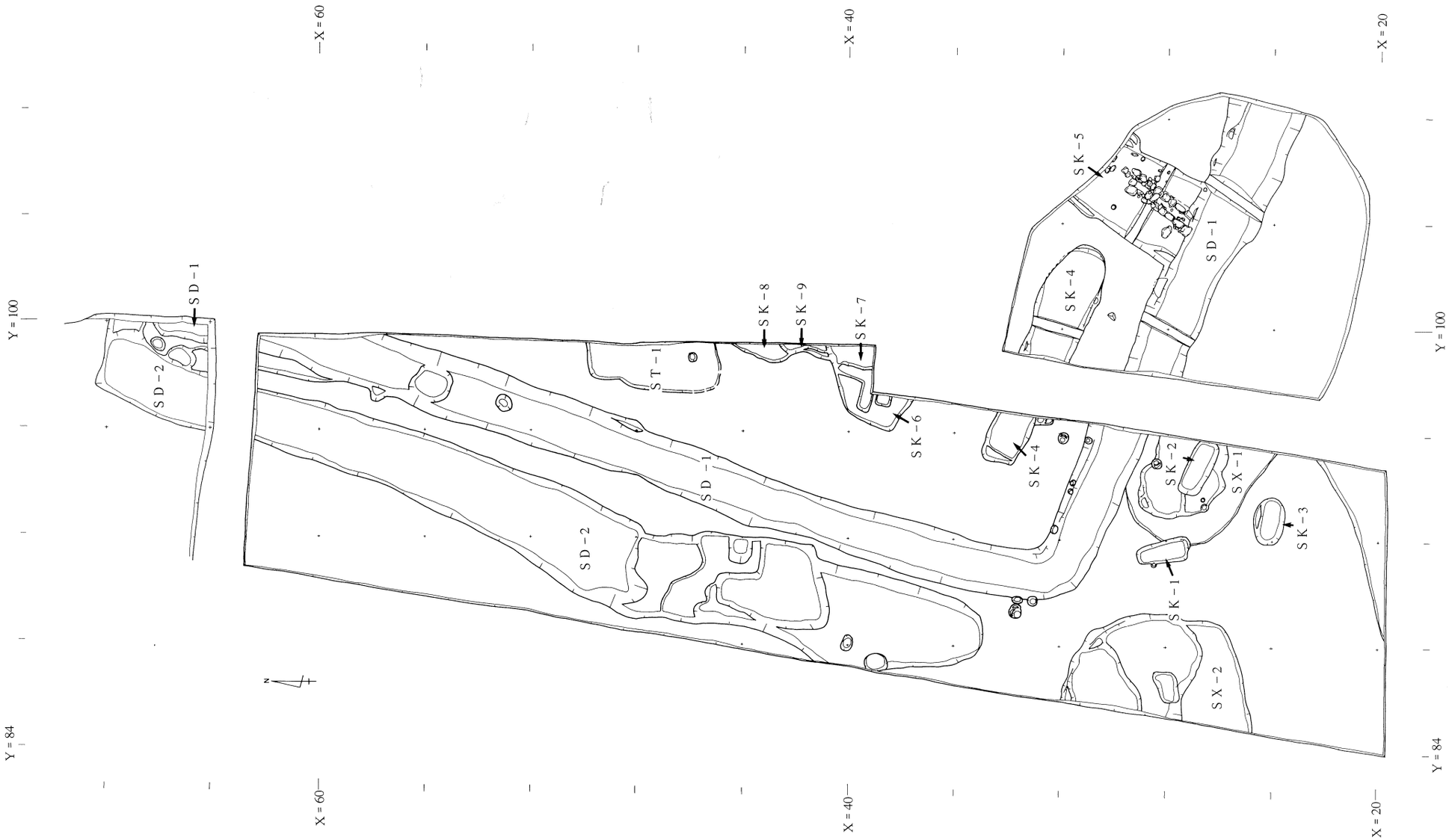


Fig.16　A・D区遺構平面図　－弥生・古墳－　（S＝1：200）

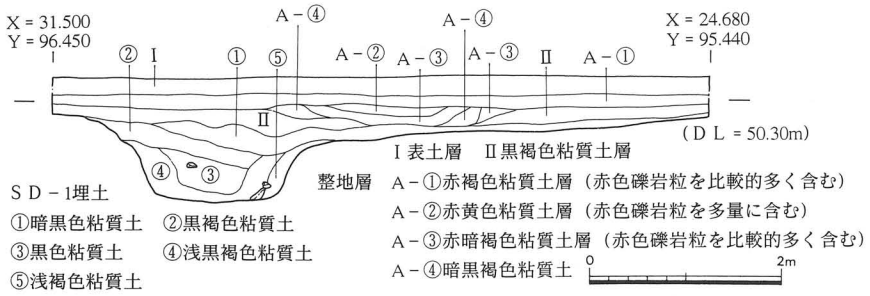


Fig. 17　ＳＤ－１セクション図（Ｓ＝１：80）

れまとまって出土している。出土層位は中層部を中心とし，下層部からの出土は少ない。一方，南西部コーナー部基底面からは土師器 (1) が半裁された状態で出土しており注目される。また，埴輪に混り土師質土器の出土もみられ，当該時期に作意的に埋められたと理解され，その際墳丘に樹立していた埴輪は投棄されたものと考えられる。

ＳＤ－2（Fig. 18）

調査区中央部から北部にかけて検出した伏原大塚古墳外側の周溝であり，古墳の西側においてのみ検出された。Ａ区では，調査区を北部から南西方向に向って延び，ＳＤ－１が東へ曲がる付近で終わる。平成２年度調査した大塚遺跡で検出したＳＴ－21[(1)]がこのＳＤ－２の北端部に該当するとみられる。主軸方向はＳＤ－１と同じＮ－18°33′－Ｅである。周溝の幅はＳＤ－１に比べ広く2.2～3.8ｍで，3.2ｍ前後が平均値である。深さは検出面から５～48cmで，基底面は標高49.400～49.863ｍを測り，中央部に向って南北にそれぞれから傾斜する。また，基底面はＳＤ－１のそれに比べ一段浅くなっている。検出長は約27.2ｍで，実際の南北長は34.4ｍと推測され，ＳＤ－１のそれより４ｍ足らず短い。断面形は高さに比べ上辺，下辺が長い逆台形状を呈し，壁は底面より30°～45°の傾斜角で上がる。概して外側の壁が緩やかである。埋土はＳＤ－１同様黒色粘質土を主体とするもので，３層に分層され，上層から暗黒色粘質土（黒ボクを主体とする），黒褐色粘質土，黒色粘質土の順に堆積していた。遺物はＳＤ－１に比べ極端に少なく，200点にも満たない。埴輪片も散発的で，墳丘から投棄された際飛び散った破片の一部がＳＤ－2まで及んだという状況であった。

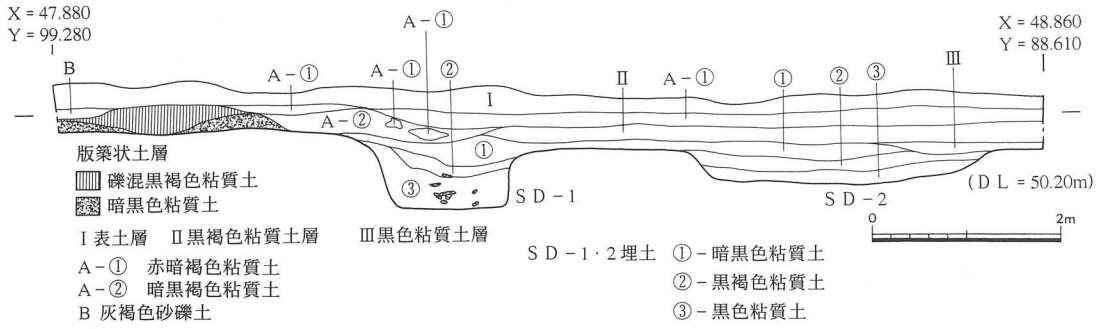


Fig. 18　ＳＤ－１・２セクション図（Ｓ＝１：80）

(2) 土坑

ＳＫ－1（Fig. 19）

調査区南部，周溝ＳＤ－１の南側で検出した土坑墓である。平面形は方形で北側の幅が狭くなっている。検出面での規模は長辺2.00m，短辺0.85mで，深さ0.65mを測り，底面では長辺1.65m，短辺0.35mである。長軸方向はＮ－11°19′－Ｗで，ＳＫ－２・３及びＳＤ－１・２との規格性はみられない。断面形は箱形で，壁は底面から60°～70°の傾斜角で立ち上がる。埋土は４層に分層され，その堆積状態からして木棺で埋葬したものと推測される。また，埋土中には拳大から人頭大の石及び四耳壺（10）の破片が多数含まれており，木棺の腐朽後埋没したものとみられる。遺物では先の四耳壺があり，土坑内に散在した状態で出土した。なお，４個の把手の内の1個は周溝（ＳＤ－１）基底面より出土している。

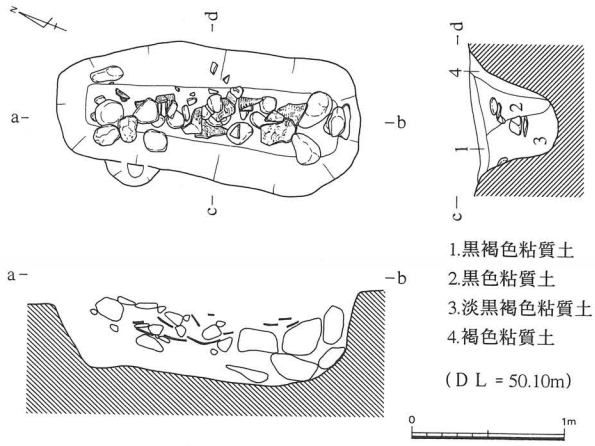


Fig. 19　ＳＫ－１

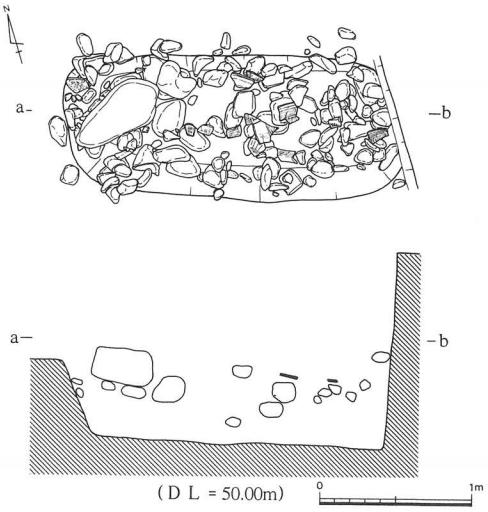


Fig. 20　ＳＫ－２

ＳＫ－2（Fig. 20）

調査区南部，周溝ＳＤ－１の南側で検出した土坑墓である。ＳＫ－１の東隣で，ＳＸ－１の埋土除去後確認した。平面形は方形で，長辺2.20m，短辺0.96m，深さ0.83mを測る。長軸方向はＮ－63°26′－Ｗで，周溝ＳＤ－１とほぼ平行する。断面形は箱形で，壁は底面から70°前後の傾斜角で立ち上がる。特に，北壁の傾斜がきつい。埋土は黒褐色粘質土単一層であり，埋土中，特に上層，中層にＳＫ－１同様の集石が認められ，木棺墓であったと考えられることもできよう。遺物では，集石に混じって埴輪片，須恵器片が出土している。中でも注目されるのは，Ｄ区ＳＫ－４から出土した須恵器の大甕（11）と同一個体の破片（口縁部）の出土で，意識的に割って埋納した可能性も考えられる。

ＳＫ－3（Fig. 21）

調査区南部，ＳＫ－１・２の南側で検出した土坑墓とみられる遺構である。遺構は第Ｖ層の砂礫土層を掘削していた。平面形は東西が長い楕円形で，長径1.80m，短径1.13m，深さ0.33mを測る。長軸方向はＮ－80°23′－Ｗである。断面形は舟底状を呈し，壁は底面から比較

的緩やかに上がる。埋土はＳＫ－２同様黒褐色粘質土単一層であった。埋土中にはＳＫ－１・２のような集石は認められなかったが，東西壁際にそれぞれ小さな集石を検出した。遺物は全く出土しなかった。

ＳＫ－4（Fig. 22）

調査区中央部やや南東寄り，周溝ＳＤ－１の内側で検出した土坑である。Ｄ区の調査によって，東西に細長い遺構であることが判明した。平面形は舟形状をなし，西壁は角く，東壁は丸い。長辺は9.04m，短辺1.92m，深さ0.37～0.55mを測る。長軸方向はＮ－66°48′－ＷでＳＤ－１の東西ラインにほぼ平行であり，ＳＤ－１に関連するものとみられる。断面形は，Ａ区では逆台形状を呈し，壁は底面から63°～77°の傾斜角で上がる。特に，北壁の傾斜角がきつい。埋土は，２層に分層されるが黒褐色粘質土が主体となっている。遺物は，Ａ区では須恵器片に弥生後期後半の土器片が混じって出土する程度で，復元可能なものはなかった。

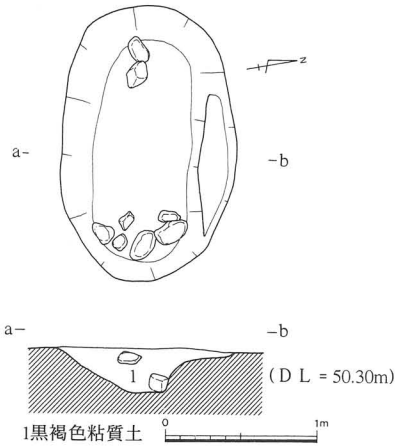


Fig. 21　ＳＫ－３

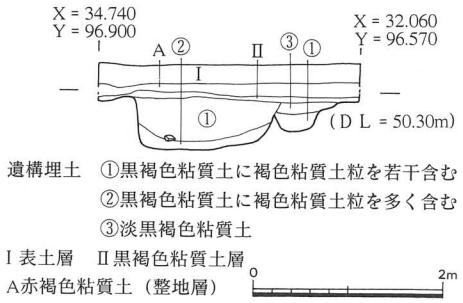


Fig. 22　ＳＫ－４セクション図

(3) 性格不明遺構

ＳＸ－1

調査区南部，周溝ＳＤ－１の南側に隣接した部分で検出した落ち込み状の遺構である。ＳＫ－１の南東部，ＳＫ－２は遺構底面で検出された。平面形は不整形で，Ｄ区の調査と考え合わすと，東への広がりもみられ，古墳前面を意識的に下げたものかもしれない。Ａ区での検出長は長辺4.50m，短辺4.20mを測り，底面は東に向かって緩やかに傾斜し最深部の深さは0.27mである。長軸方向はＮ－65°－Ｗで，ＳＤ－１にほぼ平行した形をなす。埋土は暗黒色粘質土単一層であった。遺物は埴輪片を中心に数十点出土し，中には出土の少ない馬具(2)もみられる。

ＳＸ－2（Fig. 23）

調査区南部，ＳＸ－１の西側で検出した大きな窪地状の遺構である。東壁には中世の土坑墓（ＳＫ－14）が掘り込み，さらにその上から近

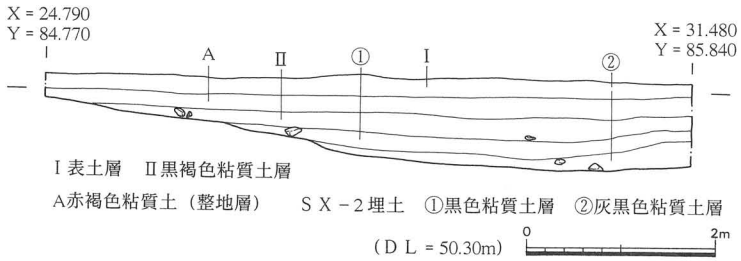


Fig. 23　ＳＸ－２セクション図（Ｓ＝１：80）

世以降の土坑（ＳＫ－40）が掘削されていた。半分以上が調査区外に延びており，全容は不明確であるが，平面形は不整円形を呈しているとみられる。検出長は，長径が6.90ｍ，短径が3.80ｍを測り，底面は北に向って傾斜し，北壁際が最も深く深さ0.33ｍを測る。長軸方向はＮ－8°－Ｗ前後である。埋土は黒色粘質土（黒ボクを含む）と灰黒色粘質土に分層される。遺物は北側を中心に埴輪片，須恵器片が比較的多く出土している。

2. Ｂ区

周溝

ＳＤ－1（Fig. 25）

調査区北西部に設定したトレンチ（ＴＲＢ－１・２）それぞれからＡ区で検出したＳＤ－１の続きを確認した。ＴＲＢ－１からはＳＤ－１の北東コーナー部，ＴＲＢ－２からはＳＤ－１の一部が検出された。東西，南北の主軸方向は，概ねＡ区での値と同じである。周溝の幅は，東西部分で最大3.6ｍ，平均2.16ｍを測り，南北部分は推定2.40ｍである。深さは検出面から0.84～0.94ｍで，基底面の標高は49.469～49.612ｍを測り，コーナー部で一段と高くなって平場を有す。この部分で埴輪が比較的まとまって検出された。検出長はトレンチ調査のため短く，東西約2.0ｍ，南北約6.4ｍであったが，座標計算でＳＤ－２を含む北側東西幅は42.7ｍ，ＳＤ－１の北側東西幅は38.2ｍであることが判明した。断面形は上端がやや広がる箱形ないし逆台形状を呈し，壁は底面から51°～74°の傾斜角で上がり，内側の傾斜角がきつい。埋土は４層に分層され，上層から暗黒色粘質土，褐色粘質土，黒色粘質土，黒色粘質土粒を含む褐色粘質土の順に堆積し，上層３層には拳大から人頭大の石が混入していた。この堆積状況からして，最下層以外は人為的堆積とみることができる。遺物は，埴輪片を中心に130点

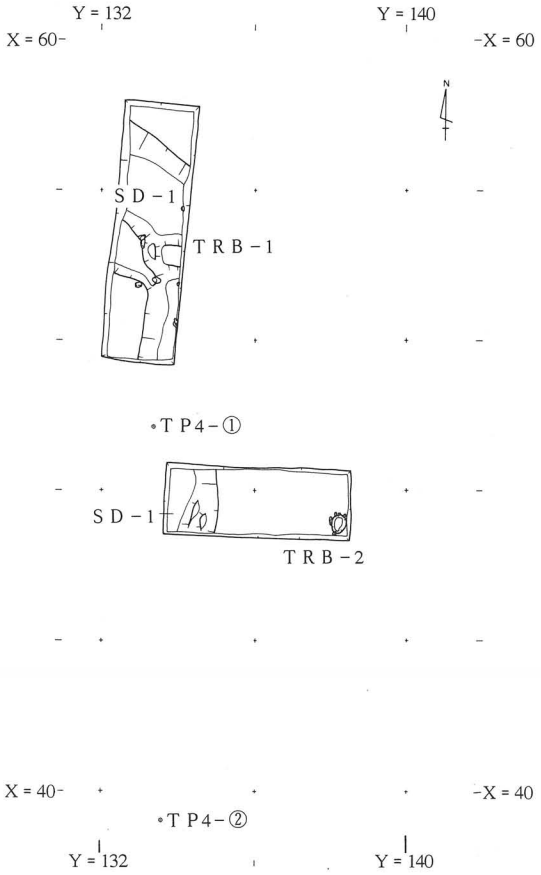


Fig. 24　Ｂ区遺構平面図（Ｓ＝１：200）

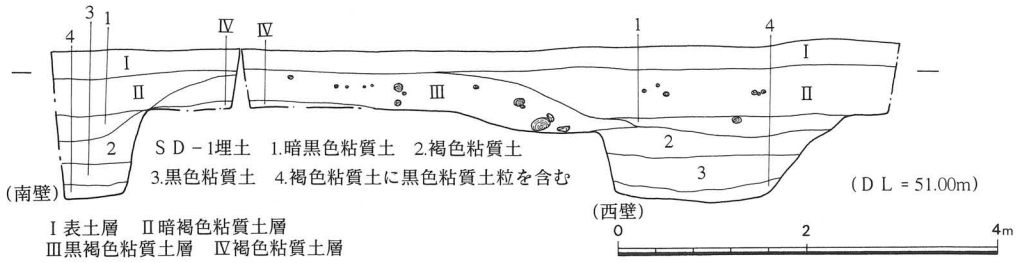


Fig. 25　ＴＲＢ－１セクション図（Ｓ＝１：80）

ほど出土したが，Ａ区のＳＤ－１からの出土量と比較すると極端に少ないものであった。なお，ＴＲＢ－２の東南端でピット状の遺構を検出したが，どのような性格のものか周辺の関連が掴めないため不明確である。

3.　Ｃ区

溝状遺構

ＳＤ－3（Fig. 26）

調査区北西端部に設定したＴＲＣ－１西寄りで検出した南北に延びる溝跡である。検出時点ではその幅と位置関係からみて，前方部を区画する周溝の一部ではないかと考えられた

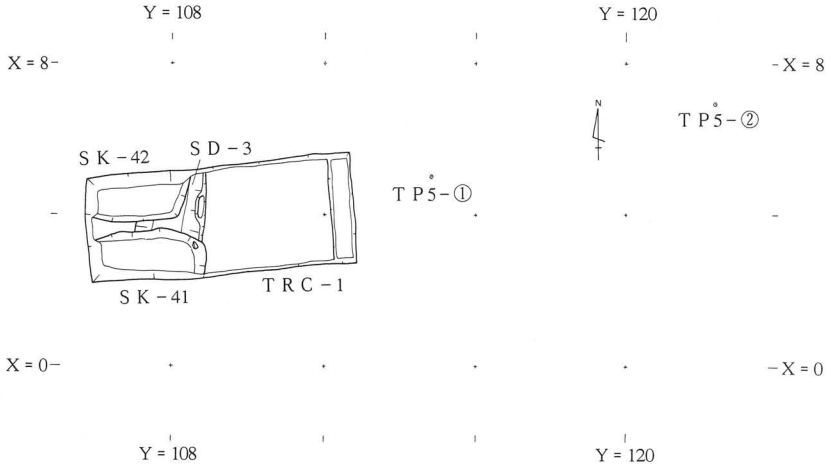


Fig. 26　Ｃ区遺構平面図（Ｓ＝１：200）

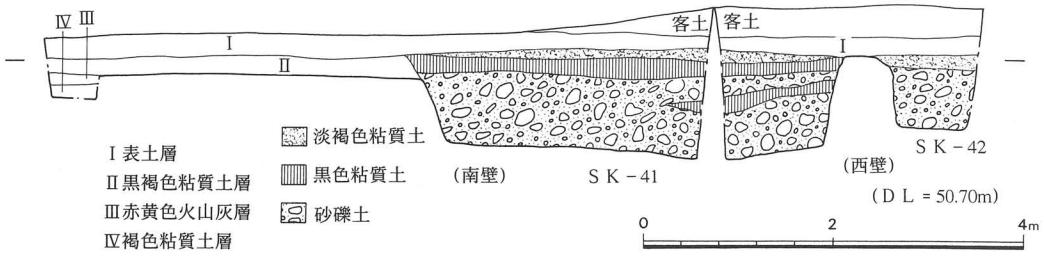


Fig. 27　ＴＲＣ－１セクション図（Ｓ＝１：80）

が，深さがＳＤ－１・２に比べ極端に浅くこの段階では決定できずＤ区の調査を待たなければならなかった。また，遺構は近世以降の土坑ＳＫ－42・43に掘り込まれている。溝は，幅1.76m，深さ0.25m，検出長1.8mを測る。主軸方向はＮ－8°48′－Ｅである。断面形は舟底形を呈し，壁は基底面から緩やかに上がる。また，底面は北へ向って僅かではあるが傾斜する。埋土は黒色粘質土単一層で，他の古墳時代の遺構と同じ埋土である。遺物は，残部が少ないこともあり皆無であった。

4. Ｄ区

(1) 周溝

ＳＤ－1 (Fig. 28)

調査区中央部でＡ区で検出した周溝 ＳＤ－１の東西ラインの東側の続きを検出した。周溝は北西から南東に向かって延び，その主軸方向は同じＮ－66°8′－Ｗを示す。また，ほぼ中央部北壁上端から暗渠（ＳＫ－５）が設置されていた。周溝の幅は2.08～2.80mで，平均2.30mを測り，深さは検出面から0.99～1.13mで基底面の標高は49.091～49.204mを測り，約10cm前後の比高差はあるが，全体的にはほぼ平坦である。検出長は11.2mであった。断面形は上端がやや広い箱形ないし逆台形状を呈し，壁は底面から61°～75°の傾斜角で上がる。埋土は大きく４層に分層され，上層から黒色粘質土，暗褐色粘質土（拳大の石を多量に含む），褐色粘質土，黒褐色粘質土（礫を若干含む）の堆積が認められる。この内，褐色粘質土は最下層の上で南壁に沿って検出され，Ａ区でも認められた様に外堤状の盛土が周溝南側に存在していた可能性も考えられる。遺物は埴輪を中心に須恵器，土師器が約100点など出土したが，ほとんどが散在した状態で，まとまりが認められたのは西側基底面近くで出土した埴輪５点と土師器（甕）であった。この内後者の土師器はＡ区コーナー部基底面出土の土師器と同一個体であることが判明した。

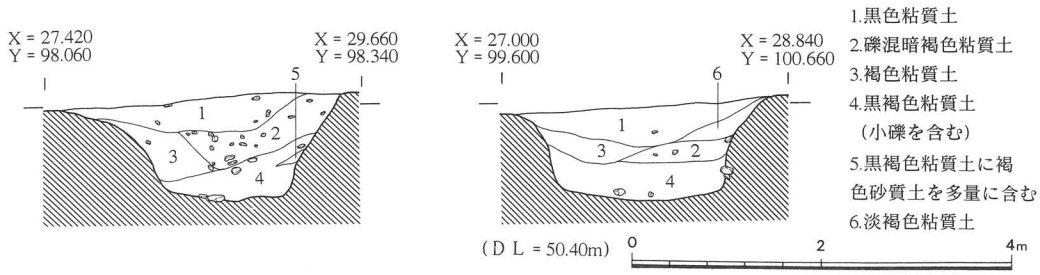


Fig. 28　ＳＤ－１セクション図（Ｓ＝１：80）

(2) 土坑

ＳＫ－4 (Fig. 29)

調査区北西部，周溝 ＳＤ－１の内側で検出した土坑で，前述のとおり，Ａ区ＳＫ－４と同一遺構とみられ，全長9.04mにも及ぶ細長い遺構となる。Ｄ区での断面形では箱形ないし逆台形

状をなし，壁はほぼ平坦な底面から47°～77°の傾斜角で上がり，北西部の壁では袋状をなす部分もある。埋土は大きく４層に分層され，上層から第１層黒褐色粘質土，第２層灰暗褐色粘質土，第３層灰暗褐色粘質土（礫を多量に含む），第４層褐色粘質土の小ブロックを含む黒色粘質土の順に堆積する。東側を中心に第１・２層中には人頭大の石を主体とした集石，第３層中には多量の礫を主体とした集石が検出され，前者からは須恵器の大甕（11）が出土し，後者からは第４層との境で薄い炭化物層が検出された。また，先の大甕の破片は前述のＳＫ－２からも出土している。遺物では前述のもの以外目立ったものの出土はなかった。

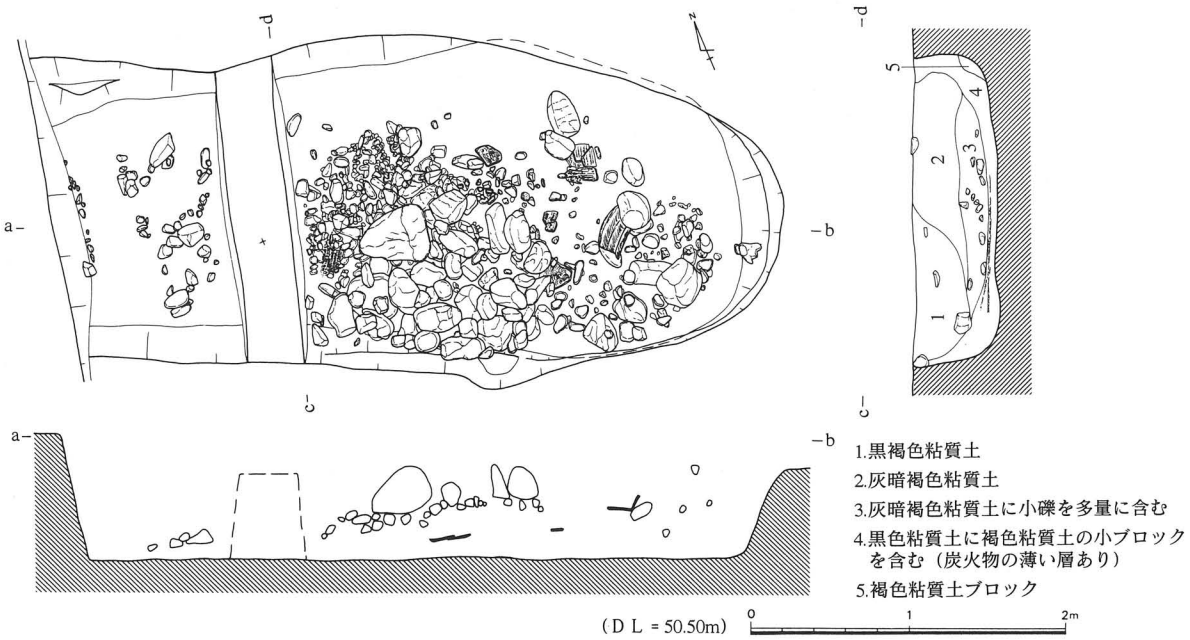


Fig. 29　ＳＫ－４

ＳＫ－5（Fig. 30）

調査区中央北側，周溝ＳＤ－１に接する形で検出した土坑で，調査の結果，主体部の排水のための暗渠と暗渠設置坑であることが判明した。また底面からは小さいが柱穴（径15～20cm，深さ約10cm）が暗渠を挟んで検出されていること，暗渠設置のためのみの土坑としては掘り方が広いことから主体部構築の際にも使用されたのではないかと推察される。検出された平面形は方形で，幅2.80～3.44ｍを測り北に向いてやや幅が狭まるようである。深さは検出面から約30cmで，基底面の標高は50.032ｍ前後を測る。暗渠設置坑のほぼ中央部に幅約0.90ｍ，深さ約２～14cmでさらに掘削され，暗渠は両側に川原石を据えた後大きく平たい川原石を置いて蓋としている。主軸方向はＮ－35°2′－Ｅで，周溝ＳＤ－１には直交せず，さらに11°10′東に振る。また，暗渠は傾斜角2°52′で主体部に向って上がり，周溝ＳＤ－１から2.50ｍの所で土坑底面と同じ高さとなり平たい石を敷く。それ以北は撹乱坑により壊されているが，四方を石

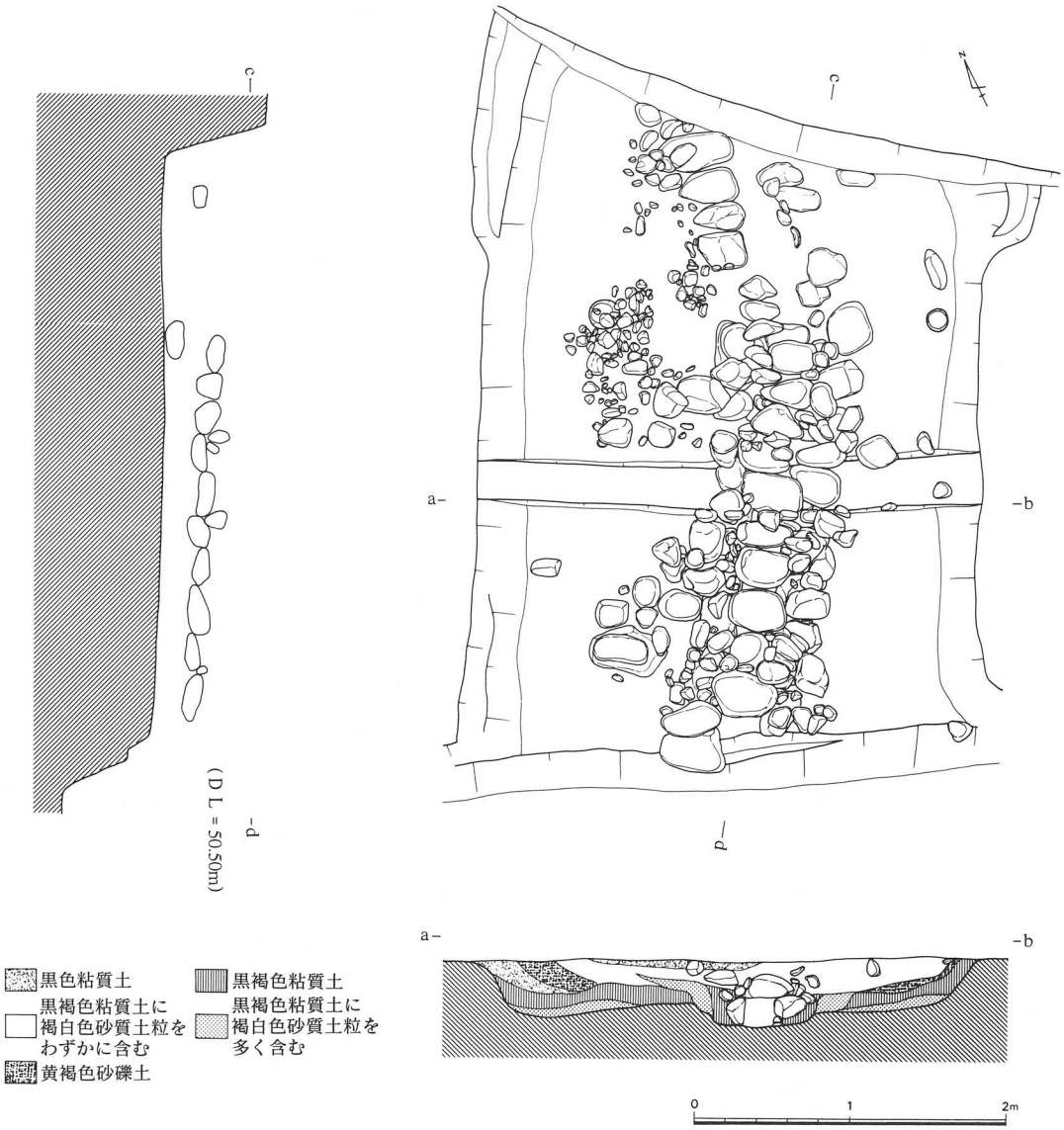


Fig. 30　ＳＫ－５

組した形で暗渠を設置していったのではないかと推測される。埋土は版築状を呈し，黒色粘質土，黒褐色粘質土（褐白色砂質土をわずかに含む），黄褐色砂礫土，黒褐色粘質土（褐白色砂質土粒を多く含む）が交互に堆積していた。また，暗渠は多数の川原石で覆われていた。遺物はその性格上ほとんど出土しなかった。

註

(1) 土佐山田町教育委員会『大塚遺跡発掘調査報告書』1991年３月

第Ⅴ章　遺物

本章では，伏原大塚古墳に関連するとみられる遺物について，須恵器，埴輪，土師器，装身具，馬具の順に記述する。なお，出土遺構，層位についてはその都度記した。

今回の調査で出土した遺物の総点数は約2,500点で，その大半が埴輪片で2,000点を越し，次に須恵器，土師質土器（第Ⅵ章）順に出土した。

1. 須恵器

図示できたのは15点であり，15以外はすべて遺構出土で，ＳＤ－１からの出土が最も多い。今回は，出土数が少ないため形態分類は行わず，器形ごとに形態の特徴，手法を記述する。なお，高杯，瓶，壺，甕，器台，鉢の順に記した。

高杯（Fig. 31－1～7）

すべて有蓋高杯である。１・２は杯部の破片で立ち上がりはそれぞれ内傾してのび，端部は１が丸く，２が細く仕上げられる。立ち上がり高は，１が1.1cm，２が0.7cmである。受部はそれぞれ斜め外上方へのび，端部は丸い。底部は丸味を有し，外面約2/3には右方向の回転ヘラ削り調整を施す。１には透しの痕がある。２は残部が少なく，高杯であると断定できないが，今まで[(1)]杯身単独の出土はなく，今回も高杯として扱った。１はＳＫ－５，２はＳＤ－１から出土した。３～７は脚台部で，７がＳＫ－４から出土した以外はＳＤ－１からの出土である。３は杯部と脚部の接合部分の破片であるが，器面は摩耗が著しいため調整は不明である。４は上部の破片で内面にしぼり目が残る。他は回転ナデ調整である。５は裾部を欠損するが，２条の

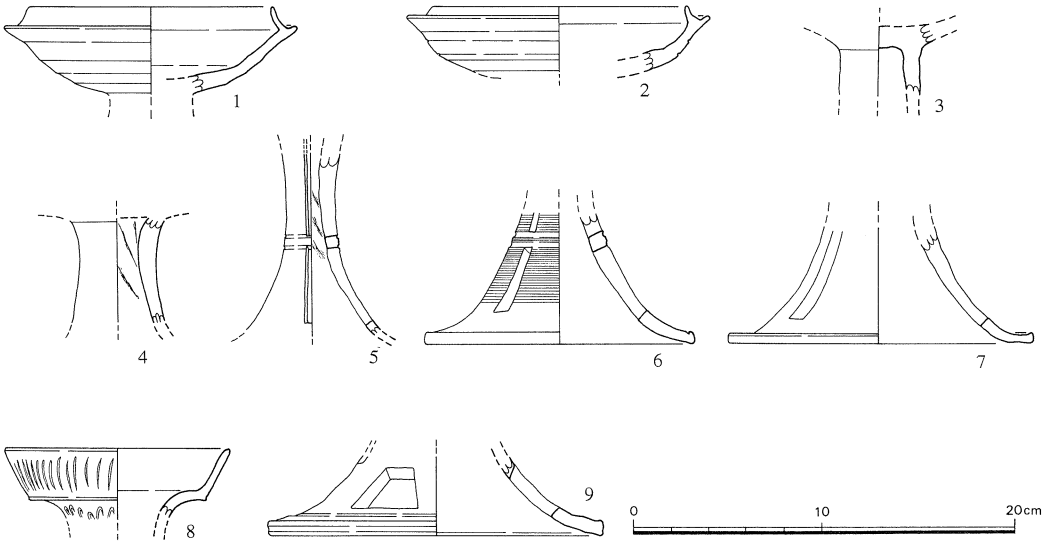


Fig. 31　須恵器実測図１

凹線を境に長方形の透しを２段２方向に穿っている。内面上部にはしぼり目が残り，他は回転ナデ調整を施す。６・７は中位から裾部の破片で，６には２条の凹線を境に長方形の透しを２段３方向に穿ち，外面透し部分には回転カキ目調整を加える。他は回転ナデ調整である。７は残部がすくなく透しは１段３方向のみを確認した。器面は回転ナデ調整を施す。

甕（Fig. 31－8）

頸部上位と口縁部の破片で，大きく外反した頸部から口縁部は内湾気味に外上方へのび，端部は丸く仕上げられる。器面は回転ナデ調整の後に口縁部外面にはヘラ状工具によるタテ方向の刻目，頸部外面にはヘラ状工具による鉤状の刻目が施される。B区ＳＤ－１からの出土である。

壺（Fig. 31・32－9・10）

９は台付広口壺の脚台部で，高杯のそれに似るが底径が17.4cmと広い。大きくラッパ状に広く裾部には台形の透しが２段３方に穿たれる。器面には回転ナデ調整を施す。B区ＳＤ－１からの出土である。10は底部の一部を欠失するが，ほぼ完形に復元された四耳壺である。大半はＳＫ－１から出土したが，ＳＤ－１の基底部からも破片が出土している。底部は丸く，胴部は外上方にやや丸味を持って上がり，上胴部からは大きく内湾してのびる。口頸部はやや開き気味に短く直立し，端部は丸味を有す。肩部外面には環状の把手が４個付くが，１個は欠失する。文様は，口頸部外面の一部に６本単位の波状文が１条施される。胴部外面には平行の叩きを施した上に２～３条一組で凹線を巡らす。胴部内面には同心円文の叩きを施し，その上を若干擦り消している。

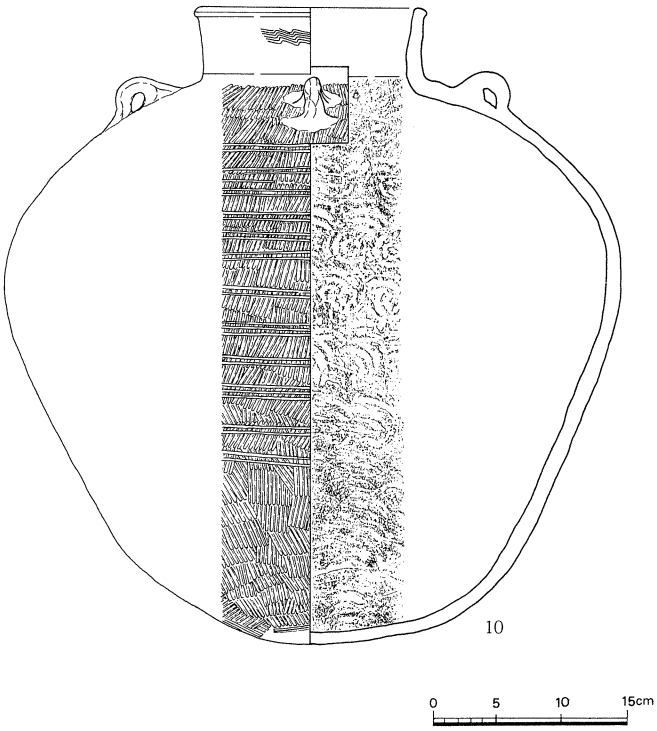


Fig. 32　須恵器実測図２

甕（Fig. 33・34－11～13）

11は大型甕で，県下最大級のものである。ＳＫ－４からまとまって出土したが，ＳＫ－２・５及びＳＤ－１からも破片が出土する。底部は欠損するが，丸味のあるものとみられる。胴部は外上方へ上がり，中胴部から緩やかに内湾してのびる。胴部最大径は65.1cmを計る。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部で大きく外反し，端部は内傾する凸面をなす。また，口縁端部を上下に拡張する。口径は

47.3cmを計る。口頸部外面には凹線によって区画された部分にヘラ状工具による斜めの刻目を巡らす。埴輪口縁外面に施されたハケ状工具による刺突文と手法的には全く同じといえよう。外面肩部から中胴部にかけては格子目の叩き，下胴部には平行の叩き，胴部内面には同心円文

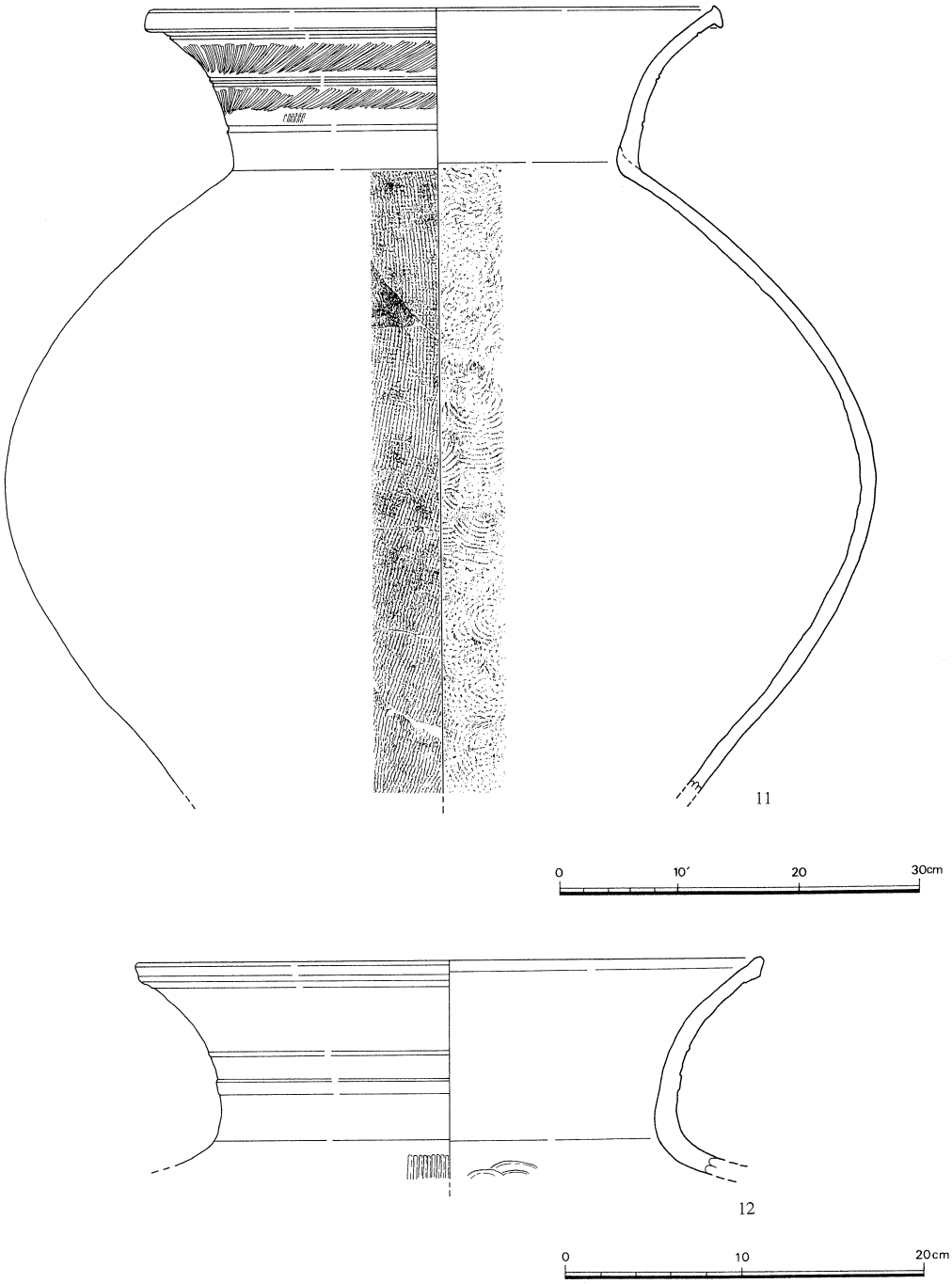


Fig. 33　須恵器実測図３

の叩きをそれぞれ施す。口頸部内外面は回転ナデ調整で，内面にはハダ荒れがみられる。12も大形甕の範疇にはいるが，11より一回り小さい。ＳＤ－２及びＳＤ－１から出土する。頸部は外傾して立ち上がり，口縁部で大きく外反し，端部は外傾する浅い凹面をなす。また，口縁端部を若干肥厚する。口頸部外面には成形時の起伏は残るが文様といえるものは施されていない。胴部外面には平行の叩き目，内面には同心円文の叩き目がそれぞれ残存するが，その大半は欠失する。13は小形甕で，口径22.0cmを計る。内傾して上がって来た胴部から口頸部は大きく外反し，端部は丸く仕上げられる。口縁部内面には１状の凹線が巡る。胴部外面には平行の叩きの後に回転カキ目調整を加える。胴部内面には荒い同心円文の叩き目が残る。

器台（Fig. 34－14）

口縁部の破片で，昭和52年度の調査の際同一文様の個体が出土している。今回はＳＫ－５から出土した。口縁部は外反気味に上がり，端部付近でやや内湾し，外側を大きく肥厚する。端部は内傾する平面をなす。外面には２条の凹線に区画された部分にヘラ状工具によるタテの刻目を施す。

鉢（Fig. 34－15）

大形の鉢とみられる個体で，類例に乏しく器形については検討の余地がある。体部は外上方へほぼ真直ぐ上がり，口縁部で内湾し，肥厚された端部は外傾する浅い凹面をなす。口縁部と体部の境の外面にはハケ状工具による刺突文を施し，２条の凹線で区画する。それ以下には回転カキ目調整を施す。また，口唇部から内面にかけては回転ナデ調整を行う。

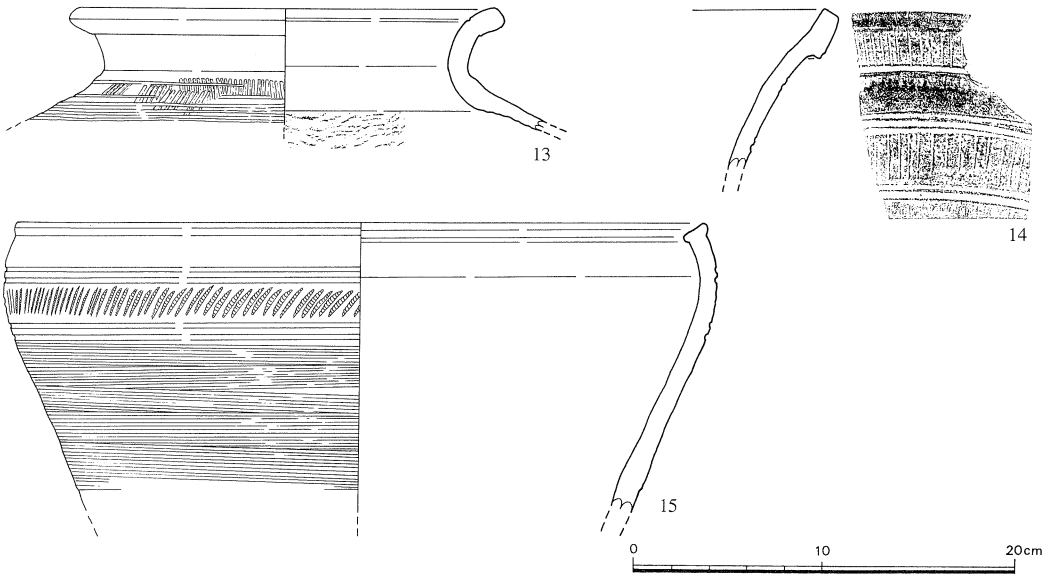


Fig. 34　須恵器実測図４

2. 埴輪

今回の調査では2,000点を越える量の円筒埴輪片が出土した。その大半は周溝ＳＤ－１からの出土で，特にＡ区，古墳西側の周溝（ＳＤ－１）からまとまって出土した。これらの内原形に復することができたのは８点であった。これら出土した埴輪は，手法，焼成からみて正に須恵器そのものといえるもので，須恵質と表現するより須恵器系と呼称した方が適切と考えられる。また，横断面が楕円形を呈し，楕円形埴輪といった方が良いものもふくまれるが，概して胴部以下にそれが顕著で，口縁部では円形を指向しているものが大半である。これらのことから伏原大塚古墳の埴輪は須恵器系円筒埴輪と総称することができるのではなかろうか。ただし，22のような楕円形埴輪が存在することも事実である。また，タガは２状で，透孔が全くないのも当埴輪の大きな特徴である。

これら須恵器系円筒埴輪は，形態及び手法によって分類することができる。以下，まず，分類を行い，その上で各形態ごとに記述していく。なお，残部が少なく分類できないものは，各個体ごとに記した。

まず，口縁部の形態により２種類に分類できる。

Ａ類　口縁部が開くもので，今回出土した埴輪のほとんどがこれに属す。

Ｂ類　口縁部が直立するもので，今回は２個体を確認した。

この２種類の内Ａ類はさらに２類に分類される。

Ａ－Ⅰ類　口縁部のみにＣ種ヨコハケ[2]が施されるもの。

Ａ－Ⅱ類　口縁部のみでなく胴部にもＣ種ヨコハケを施すもの。

この各類は口縁部の開き具合によってそれぞれａ類，ｂ類に細分される。

ａ類　口縁部が外反するもので，内面には稜はできない。

ｂ類　口縁部が外傾するもので，内面には稜ができる。

以上の分類をまとめると次の５類となる。

Ａ－Ⅰ－ａ類　口縁部が外反し，口縁部外面にＣ種ヨコハケを施すもの。

Ａ－Ⅰ－ｂ類　口縁部が外傾し，口縁部外面にＣ種ヨコハケを施すもの。

Ａ－Ⅱ－ａ類　口縁部が外反し，口縁部と胴部外面にＣ種ヨコハケを施すもの。

Ａ－Ⅱ－ｂ類　口縁部が外傾し，口縁部と胴部外面にＣ種ヨコハケを施すもの。

Ｂ類　口縁部が直立するもの。

また，Ａ類の口縁部には工具の個体差は認められるが，すべてハケ状工具による刺突文を施している。このハケ状工具は，Ｃ種ヨコハケを施す際に使用した工具と同じものとみることができよう。一方Ｂ類の口縁部にはヘラ状工具によるタテの沈線を施している。

以下，この分類に則って記述していく。

Ａ－Ⅰ－ａ類（Fig. 35～38－1～10）

１・２は原形に復することができ，３もほぼ復元することできた。１は口径34.6～35.3cm,

器高64.2cm，胴径26.0～29.4cm，底径22.0～25.9cmを計り，胴部以下の横断面が楕円形を呈す。底部はやや開き気味に直立し，そのまま口縁部に至り，口縁部上位1/3のところから外反し，端部は内傾する凹面をなす。端部直下にはやや鈍い断面三角形の凸帯を巡らす。口縁部外面上半分にC種ヨコハケが施され，その上からハケ状工具による刺突文を施す。また，口縁部外面下半分にヘラ状工具によるタテの沈線もみられる。調整は，外面がナデ調整を主体とし，タガの上下にはヨコナデ調整，底部にはヘラナデ調整及び一部にヘラ削り調整で，内面が指ナデ調整，ナデ調整を主に，底部には一部にハケ調整も行う。そして，口唇付近には回転ナデ調

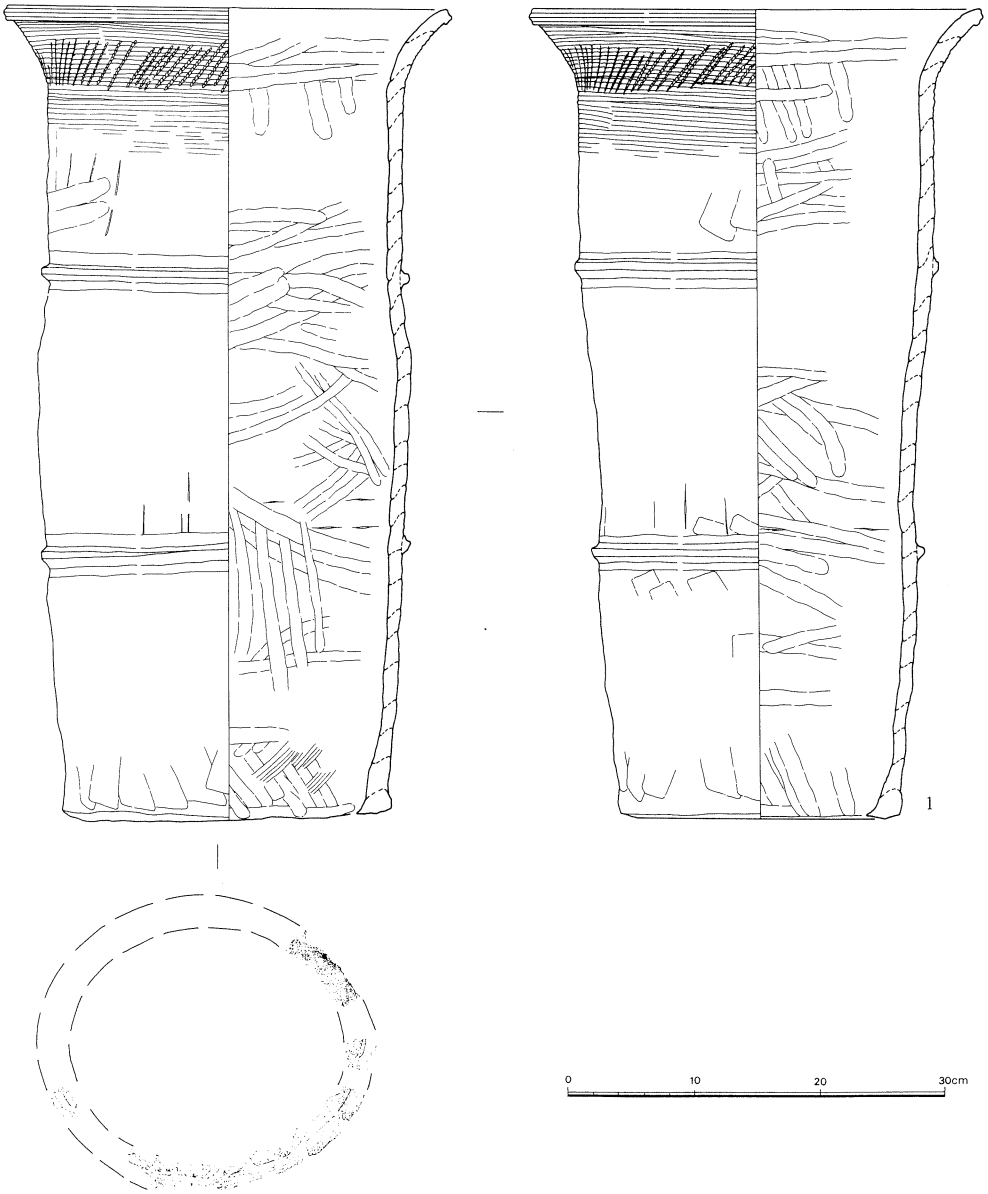


Fig. 35　円筒埴輪実測図 1

整を行う。全般に調整は雑で，内面には粘土紐の接合痕がのこる。色調は内外面とも青灰色を呈し，焼成も良好である。2も1と形態，手法はほぼ同じで口径35.0～35.3cm，器高67.5cm，胴径24.0～30.0cm，底径20.5～27.3cmを計り，胴部以下の横断面が楕円形を呈す。タガは1同様断面台形状を呈し，比較的しっかりしたもので，この時期瀬戸内海を囲む地域に分布する最下段タガに断続ナデ技法を施した[3]ものは全くみられない。ＳＤ－１以外にＳＫ－２からも破片が出土する。3も形態，手法はほぼ同じで，口径34.2～38.4cm，器高59.6cm，胴径26.0～30.4cmを計る。底部は欠失するが，器高は68cm前後と推定される。Ｃ種ヨコハケが施され

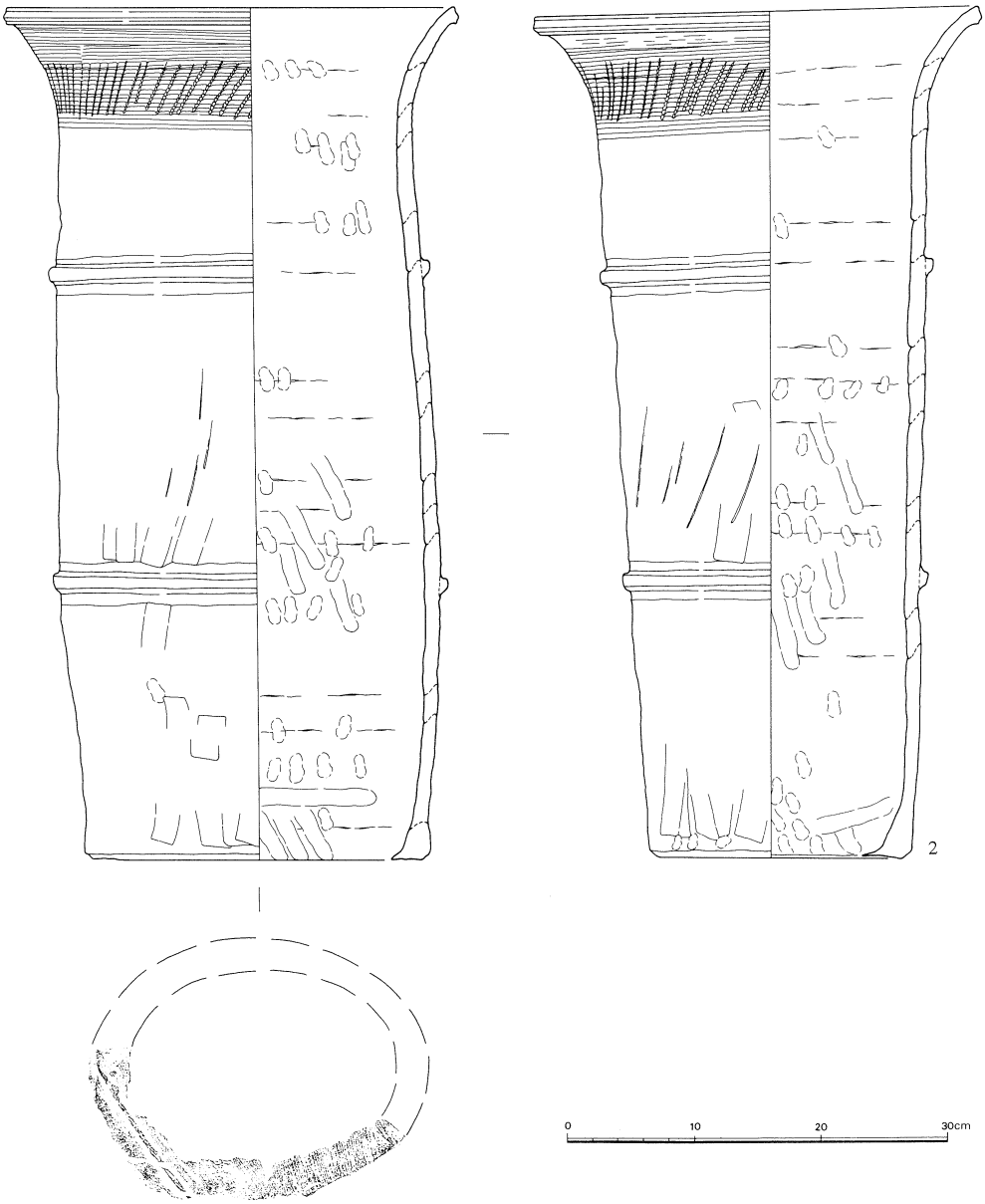


Fig. 36　円筒埴輪実測図2

る範囲は１と全く同じで，２よりやや広い。焼成は１・２に比べ悪く，内外面とも灰色を呈する。４は第１段タガ以下が欠失する。口径は36.0cmで口縁部外面のＣ種ヨコハケが施された範囲は口縁部上半分で，１・３と全く同じである。胴部外面には2条の凹線が巡る。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈す。５も第１段タガ以下が欠失する。口径は35.0cmでＣ種ヨコハケは４同様，口縁部外面上半分に施される。また，胴部外面には２条の凹線が巡る。焼成はやや不良で，内外面とも灰色を呈す。６は胴部以下が欠損する。口径は35.0cmで，Ｃ種ヨコハケは，口縁部外面上半分よりやや広い範囲に施される。第２段タガは断面三角形状をなし，口縁部は外上方にやや膨らんだ後内傾してから外反し，端部は内傾する平面をなす。焼成は不良で，内外面とも灰色を呈する。７は口縁部のみ残存し，口径37.0cmを計る。Ｃ種ヨコハケは口縁部外面上半分に施される。口縁端部は内傾する凹面をなす。焼成は良好で内外面とも青灰色を呈する。８も口縁部のみ残存し，口径35.0cmを計る。Ｃ種ヨコハケは口縁部外面上半分よりやや広く施される。焼成は良好で内外面とも青灰色を呈す。９・10とも口縁部下半分が欠損する。口径は，９が35.0cm，10が36.0cmを計る。Ｃ種ヨコハケは８同様口縁部外面上半分に施される。双方とも焼成は良好で内外面とも青灰色を呈す。これらは特に記していない限りＳＤ－１からの出土である。

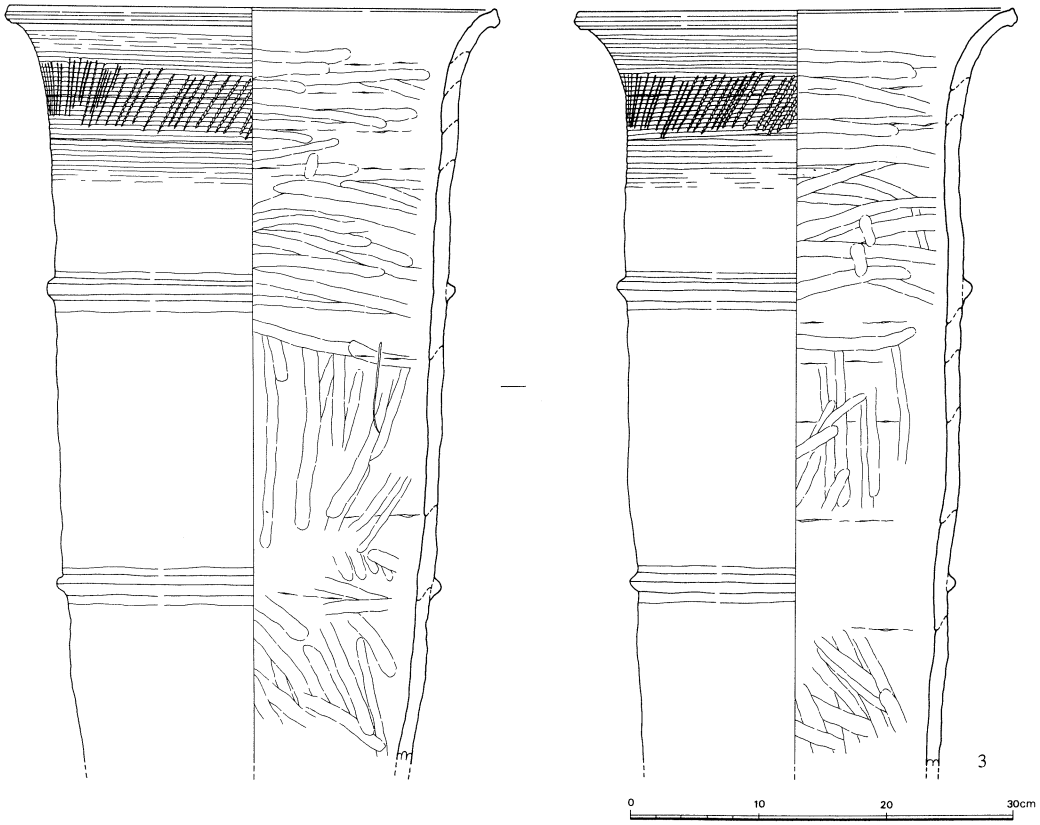


Fig. 37　円筒埴輪実測図３

A－Ⅰ－b 類（Fig. 39～42－11～15）

11～13は原形に復することができた。11は口径33.4cm，器高63.0cm，胴径32.0cm，底径31.0cmを計り，ほぼ円筒形をなす。底部は直立し，胴部からやや内傾して上がり，口縁部中位で屈曲し外傾してのびる。端部は内傾する浅い凹面をなし，直下に断面丸味のある三角形をなす凸帯を巡らす。口縁部外面上半分にC種ヨコハケを施し，その上からハケ状工具による刺突文を加える。胴部外面には2条の凹線が巡る。底部外面下端はヘラ削りを施し，外底面には板状の圧痕が残る。内面は主に指ナデ調整，外面はナデ調整，口縁上部内外面は回転ナデ調

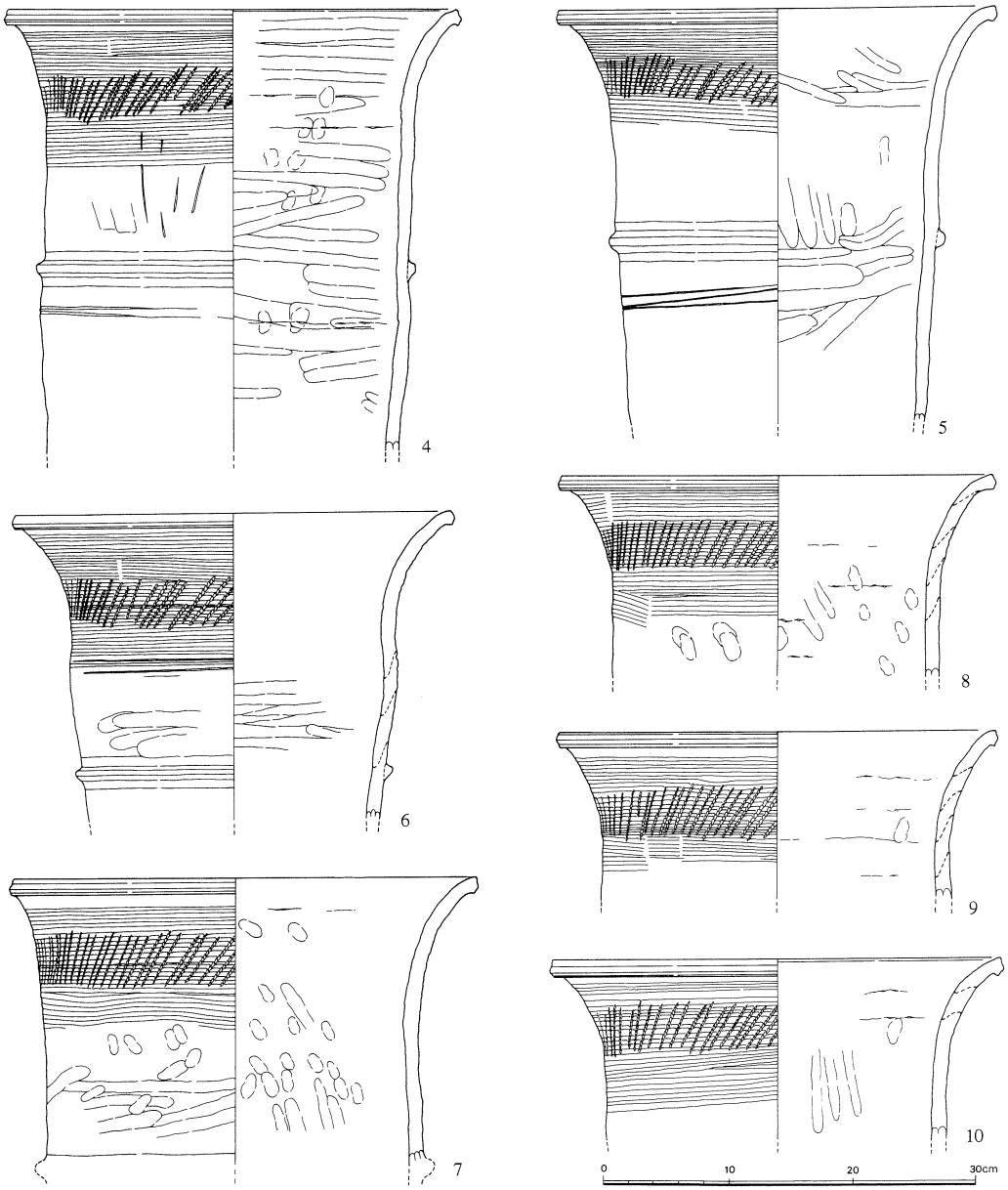


Fig. 38　円筒埴輪実測図4

整をそれぞれ施す。タガは第１・２段とも断面三角形をなし，上下にヨコナデ調整を加える。焼成は不良で内外面とも灰色を呈する。12は口径35.4～35.6cm，器高63.4cm，胴径31.6～33.7cm，底径24.2～30.0cmを計り，胴部以下の横断面が楕円形を呈す。口縁部は中位で小さく屈曲し，外傾してのび，端部は内傾する浅い凹面をなす。口縁部外面上半分に施されたＣ種ヨコハケの上には他同様のハケ状工具による刺突文を加えるが他のそれに比べ幅が細い。底部外面下端には１条の沈線が巡る。タガは第１・２段とも断面三角形を呈す。焼成は不良で，内外面とも灰色を呈す。13は口径34.0cm，器高68.5cm，胴径29.7～35.9cm，底径19.5～35.9cmを計り，胴部以下の横断面が楕円形を呈す。口縁部は上位1/3のところを境に外傾し，端部は内傾する凹面をなす。Ｃ種ヨコハケは口縁部外面上位1/3に施され，その上からハケ状工具による幅の細い刺突文を加える。12のそれと同じである。タガは第１・２段とも断面三角形をなす。焼成は比較的良く，淡青灰色を呈す。14は胴部以下が欠損する。口径は36.0cmを計る。胴部から口縁部中位にかけて内湾気味に上がり，そこを境に口縁部は外傾し，端部は内傾する平面をなす。Ｃ種ヨコハケは口縁部外面上半分に施され，その上からハケ状工具による幅の細い刺突文を加える。第２段タガは断面三角形をなす。焼成は不良で内外面とも灰色を呈す。15は口縁部のみが残存し，口径35.0cmを計る。口縁部は上位1/3のところを境に外傾し，端部は内傾する凹面をなす。口縁部外面上位1/3に施されたＣ種ヨコハケの上からハケ状工具による幅の細い刺突文を加える。内面には粘土紐の接合痕が部分的に残る。焼成は極めて悪く，内外面とも灰白色を呈す。これらはすべてＳＤ－１からの出土である。

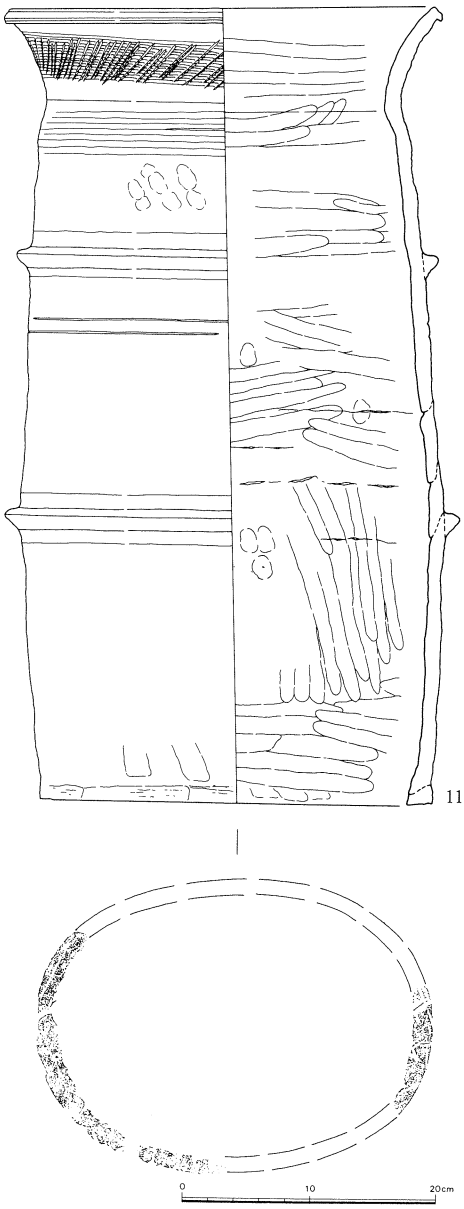


Fig. 39　円筒埴輪実測図５

Ａ－Ⅱ－ａ類（Fig. 43－16・17）

16のみ原形に復することができた。口径38.0cm，器高69.1cm，胴径29.5cm，底径22.6cmを計り，ほぼ円筒形を呈す。底部はやや内傾する外底面から斜め外上方へ立ち上が

り，胴部から垂直になり，口縁部でやや内傾したのち外反し，端部は内傾する凹面をなす。端部直下には断面三角形のやや丸味のある凸帯が付く。C種ヨコハケは口縁部と胴部外面全面に施され，口縁部外面上位1/3にハケ状工具による刺突文を加える。タガは断面三角形をなすが，やや丸味がある。内外面の調整は他の類と全く同じである。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈する。SD－1以外にSD－2からも破片が出土している。17は胴部以下が欠損する。口径は36.8cmを計り，口縁端部は凸面をなし，内側をやや肥厚する。C種ヨコハケは口縁部，胴部外面に施される。第2段タガは断面三角形を呈し，上面に1状の凹面を巡らす。焼成は不

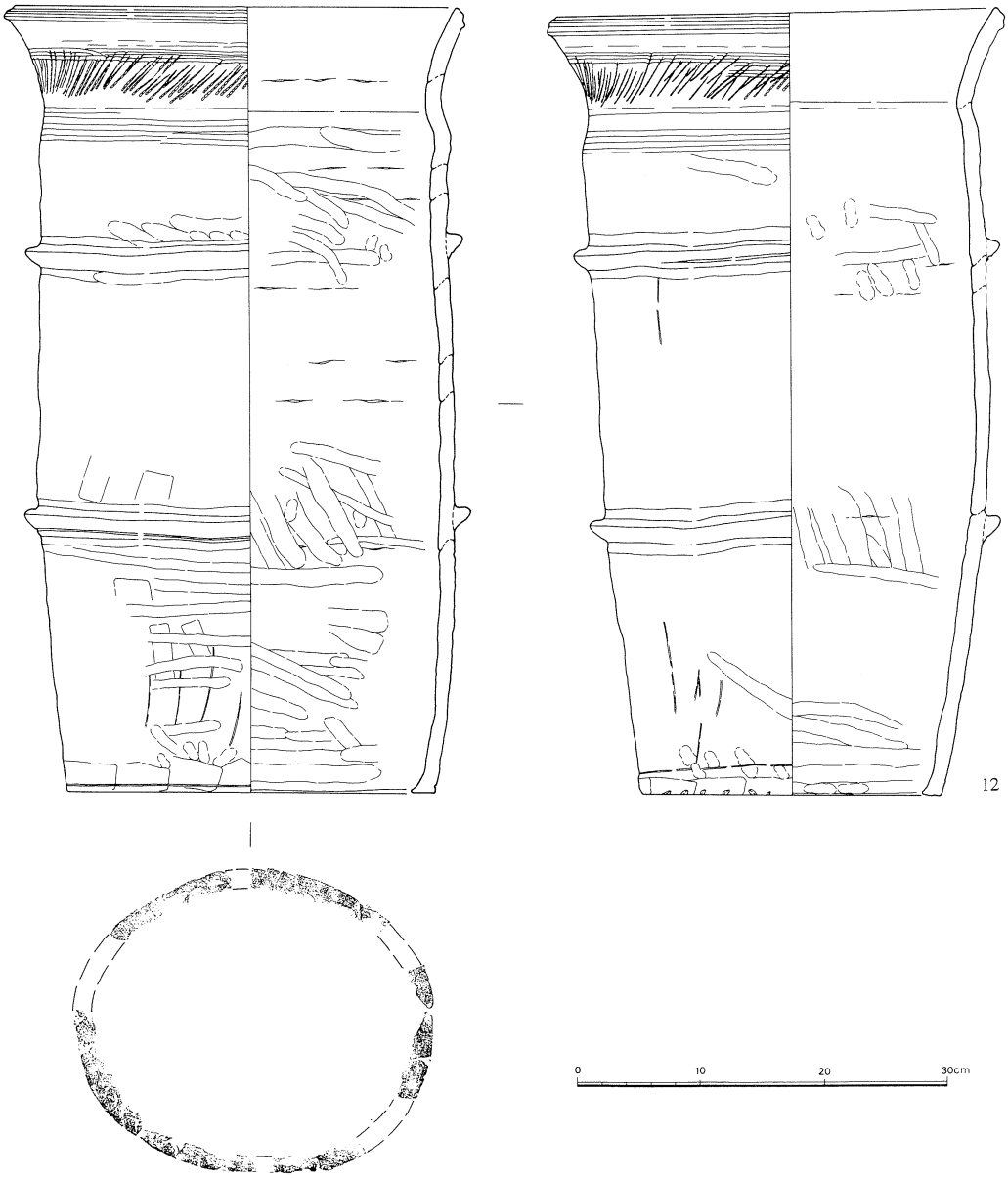


Fig. 40　円筒埴輪実測図6

良で，内外面とも白灰色を呈す。ＳＤ－１からの出土である。

Ａ－Ⅱ－ｂ類（Fig. 43・45－18～21）

18は底部が欠失する。口径35.0cm，胴径33.4cmで，推定器高は62.0cmとみられる。底部から口縁部中位やや上まで内湾気味に直立し，胴部中位に胴部最大径を有す。口縁部はそこを境に外傾する。口縁部と胴部外面全面にはＣ種ヨコハケを施し，口縁部外面にはさらにハケ状工具による刺突文及びヘラ状工具による螺施状の文様を施す。この螺施状の文様はこの個体のみで確認された。タガは他同様比較的高く，丸味のある断面三角形をなす。焼成は不良で，内

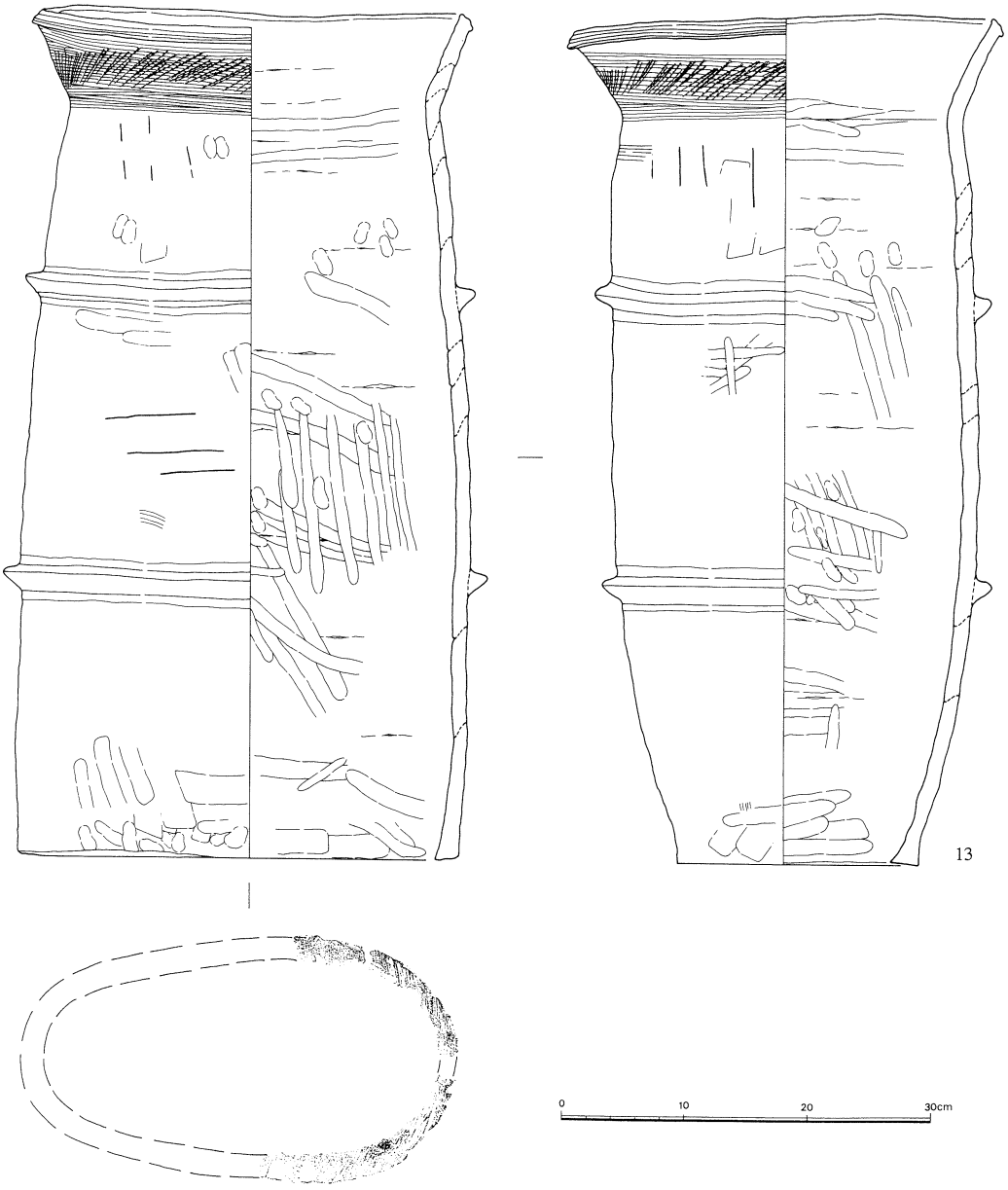


Fig. 41　円筒埴輪実測図７

外面とも灰色を呈す。19は胴部下半以下が欠損する。口径35.0cm，胴径31.1cmを計る。口縁端部は内傾する平面をなす。第２段タガは断面三角形をなす。焼成は比較的良く，内外面とも灰黄色を呈する。20は口縁上部と胴部中位以下が欠損する。推定口径は約36cmである。第２段タガは断面台形状をなす。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈す。21は口縁部と底部が欠失するため Ａ－Ⅱ－ａ類の可能性もある。胴径は29.0cmを計る。底部上位から口縁部にかけて内湾気味に直立し，胴部最大径は下位に求めることができる。タガは第１・２段とも断面三角形をなす。Ｃ種ヨコハケは胴部以上に施される。焼成は不良で，内外面とも灰色を呈す。これら４点はすべてＳＤ－１からの出土である。

Ｂ類（Fig. 44・45－22・23）

確認できたのはこの２点のみで，胴部以下の破片にこの類が存在する可能性は十分ある。22は原形に復元でき，口径26.1～36.3cm，器高60.4cm，胴径24.0～35.6cm，底径19.6～33.2cmを計り，横断面は楕円形をなす。底部は平らな外底面から直立して立ち上がりそのまま口縁部に至る。口縁上部で若干外傾し，端部は上方を向く平面をなす。タガは第１・２段とも断面三角形をなす。口縁部外面にはヘラ状工具によるタテの沈線文が施される。調整は，口縁上部内外面が回転ナデ調整，外面がナデ調整を主としタガ部分のみヨコナデ調整，内面が指ナデ調整を主とする。また，底部外面下端には１条の凹線が巡る。焼成は極めて良く，内外面は青灰色を基調に片面にはオリーブ灰色の自然釉が一面にかかり，一見芸術品の趣さえ感じられる。ＳＤ－１からの出土である。23はＳＸ－３出土で後世の遺構に混入したものとみられる。個体は口縁部のみが存在し，口径36.8cmを計る。口縁部はやや内傾気味に直立し，上部でやや外傾してのび，端部は細く仕上げられる。外面はヘラ状工具によるタテの沈線文が施される。焼成はやや不良で，内外面とも灰白色を呈す。なお，双方ともＣ種ヨコハケはみられない。

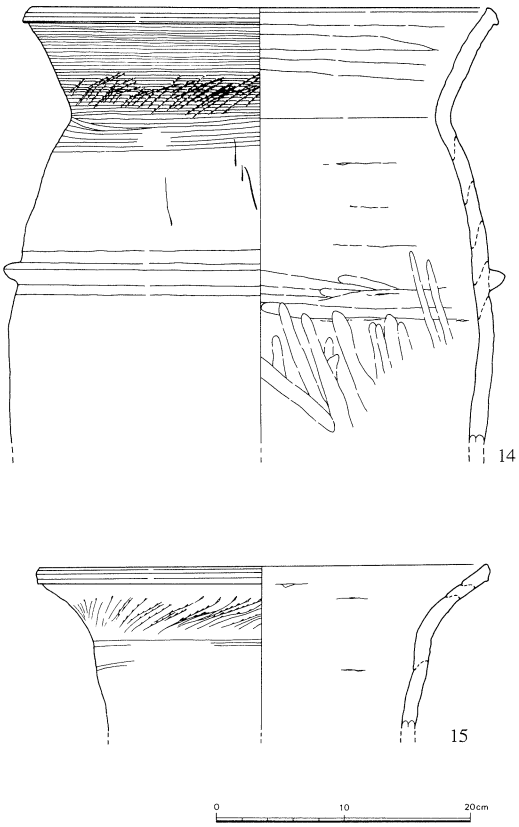


Fig. 42　円筒埴輪実測図８

その他の個体（Fig. 45・46－24～44）

24～32は底部の破片で，すべてＳＤ－１からの出土である。外底面はほぼ平坦で，板状の圧痕が残存する。個体によりその圧痕に差異がみられることから，成

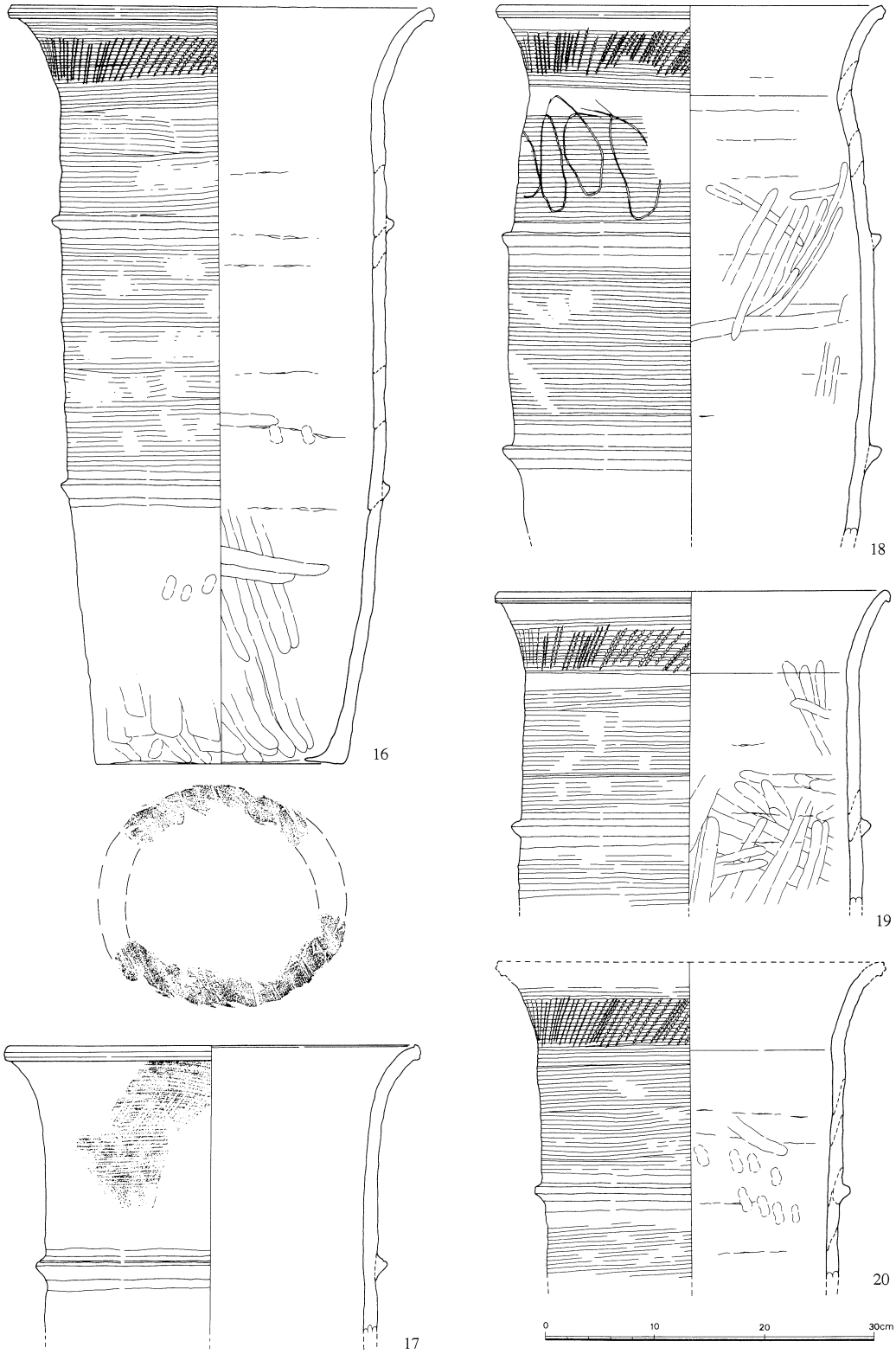


Fig. 43　円筒埴輪実測図 9

形時の作業台の違いと考えられ，工人差を認めることも可能であろう。これらの底部は直立ないしやや外傾して立ち上がる。調整は，外面が下部でタテ方向のヘラナデ調整後ヨコ方向のヘラ削りを行うものと単にヘラナデ調整のみのものとがあり，内面は指ナデ調整を主体とし，下端をヨコ方向に行った後タテ方向ないし斜め方向に施す。中位以上は外面がナデ調整，内面がヨコ方向とタテ方向を主とする指ナデ調整となる。底径は，24が20.2cm，25が24.5cm，26が26.0cm，27～29が27.0cm，30が27.2cm，31が27.3cm，32が26.0cmである。26と32には第１段タガが残り，26が断面三角形，27が断面台形をなす。また，28の外面には２条の沈線が巡る。焼成は比較的良く，内外面は灰色ないし青灰色を呈す。

33～38は胴部を中心とした第１段タガまたは第２段タガを含む部分である。33はＳＤ－１

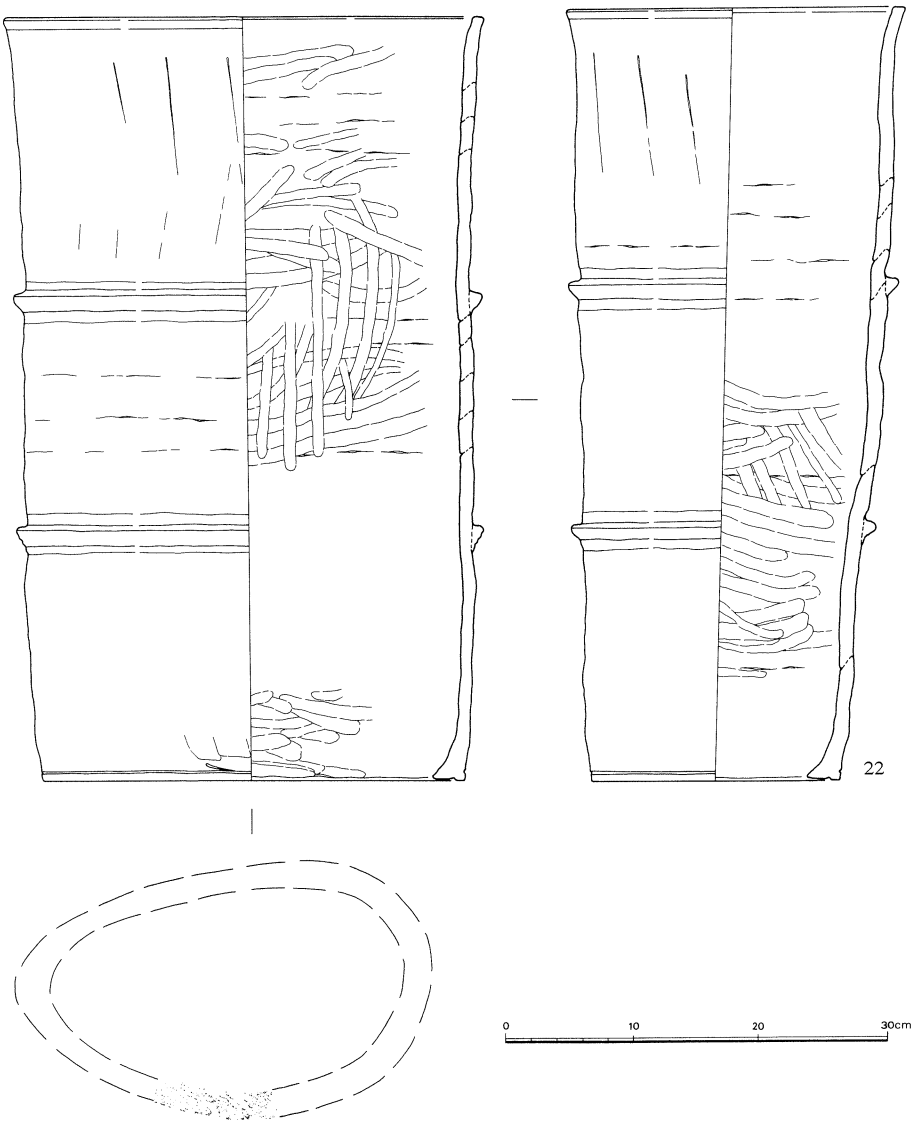


Fig. 44　円筒埴輪実測図10

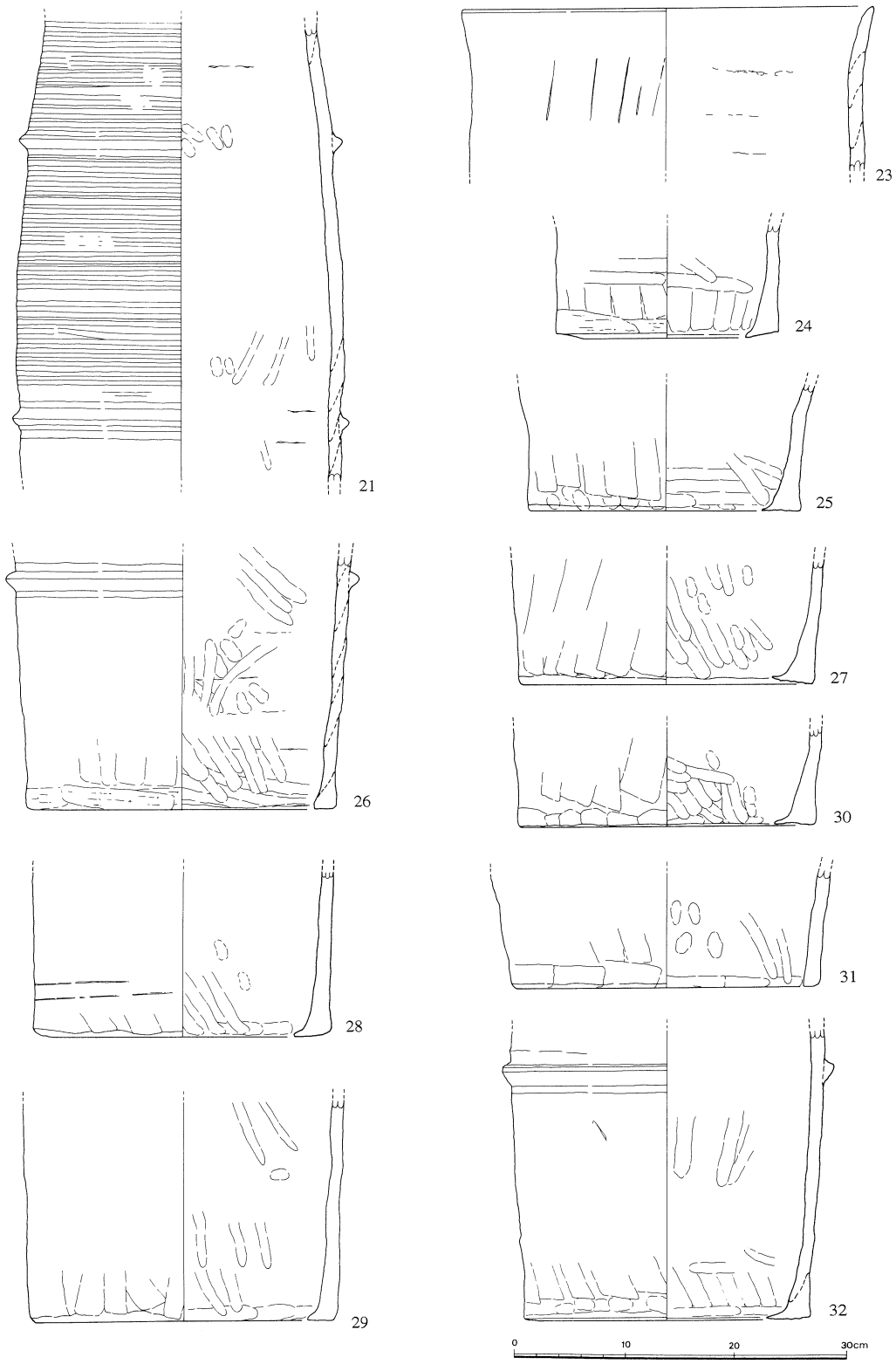


Fig. 45　円筒埴輪実測図11

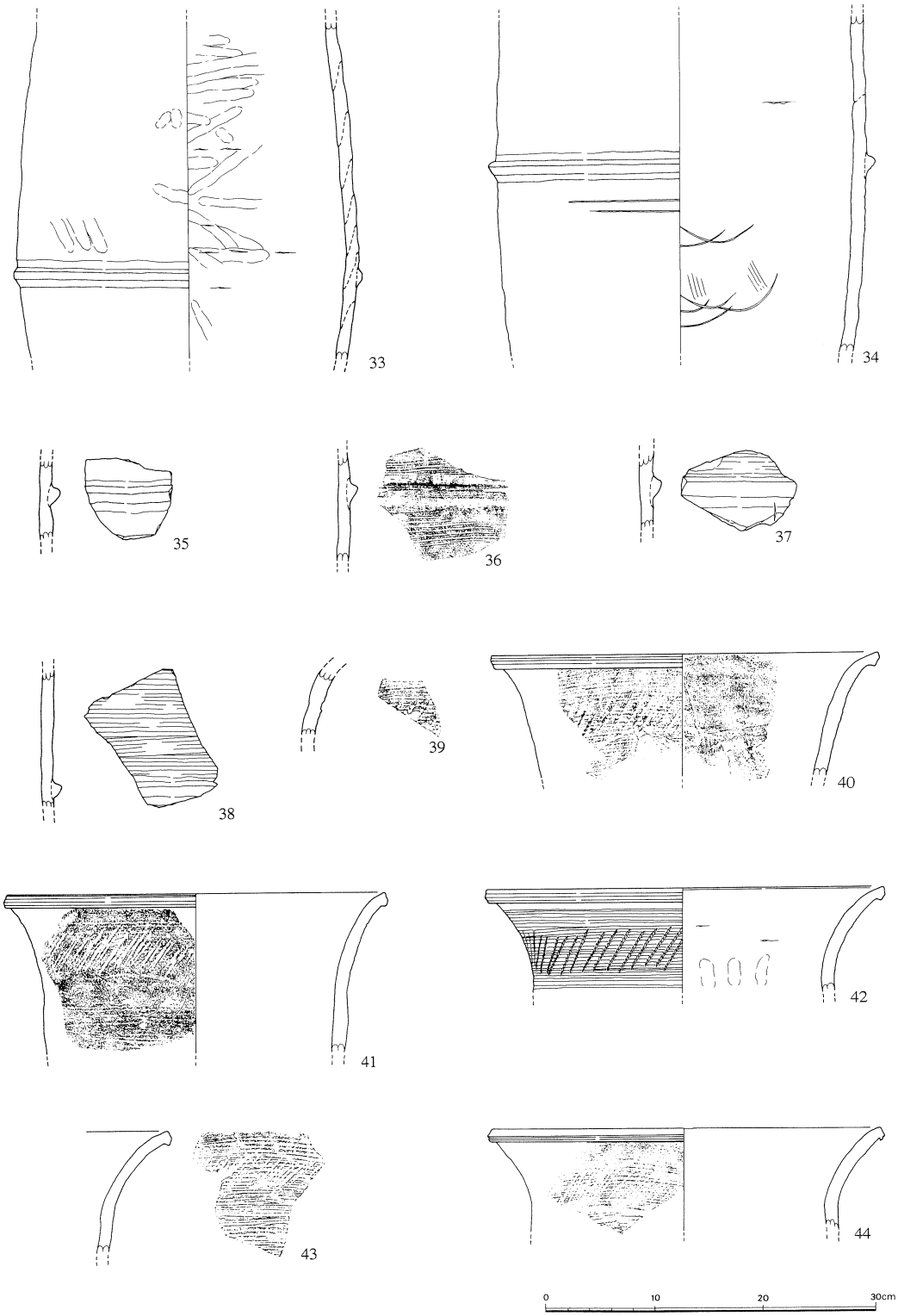


Fig.46　円筒埴輪実測図12

を中心にＳＫ－１・２，ＳＸ－２からも破片が出土する。タガは断面台形をなす。焼成は良く，内外面とも青灰色を呈す。34はＳＤ－１からの出土で，タガは断面丸味のある三角形をなす。外面には2条の凹線，内面にはヘラ条工具によるとみられる円弧条の沈線が残る。また，内面には指ナデ調整以外にハケ調整も施される。焼成は不良で灰白色を呈す。35はＳＤ－１出土で，断面三角形の丸味のあるタガが付く。焼成は良好で，青灰色を呈す。36はＳＫ－５出土で，タガは断面三角形をなす。タガは上下にはＣ種ヨコハケが施されており，残存は第２段タガで，Ａ－Ⅱ類に属するとみられる。焼成は良好で，青灰色を呈す。37は表土層出土の破片である。タガは断面丸味のある三角形をなす。Ｃ種ヨコハケはタガ直上から施されており，Ａ－Ⅰ類で口縁部全体に施した例がないことから，残部は第１段タガ部分とみられ，Ａ－Ⅱ類に属する。焼成は良好で，青灰色を呈す。38はＳＫ－５出土で，形態的には37と全く同じである。39～44は口縁部の破片で，41が表土層から出土以外はすべてＳＤ－１からの出土である。39は丁度外反する部分の破片で，ハケ状工具による刺突文が残る。ただ，この刺突文は他と比べて太く短いものである。焼成は良好な青灰色を呈す。40～43はＡ－Ⅰ－ａ類と推定される破片である。40はＳＤ－１出土で，口径35.0cmを計る。41は表土層出土で，口径35.0cmを計る。42はＳＤ－１出土で，口径が36.0cmを計る。43もＳＤ－１出土である。これらはすべて焼成が良く，青灰色を呈す。44はＡ－Ⅰ－ｂ類と推定される破片で，ＳＤ－１出土である。口縁部は途中より外傾し，端部は内傾する平面をなす。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈す。

3. 土師器

須恵器，埴輪に比べその出土は極端に少なく，土師器と認められるものはここに載せた１点のみであった。前述のとおり，ＳＤ－１南西コーナー部基底面から半裁された状態で出土し，Ｄ区ＳＤ－１基底面からも底部の破片が検出された。

甕（Fig. 47－1）

口径15.5cm，器高17.2cm，胴径15.0cmを計り，底部は丸く，内湾気味に上がり，胴部最大径は中位より上にある。口頸部は胴部から大きく外反し，端部は丸く仕上げる。調整は，口縁部内外面ヨコナデ，外面はタテ方向のハケ調整，内面は底部がナデ調整で，胴部がヘラ削りとなっている。焼成は比較的良く，内外面ともにぶい橙色を呈し，肩部から口縁部にかけて煤の付着がみられる。

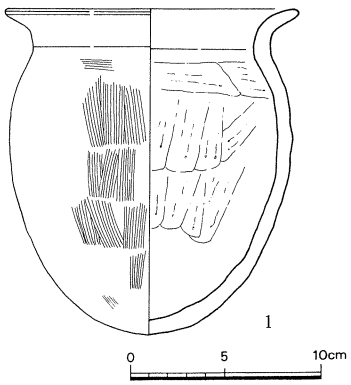


Fig. 47　土師器実測図

4. 装身具

Ｄ区Ⅱ層上面より出土したもので，主体部が削平された際に混入したものとみられる。

金環（Fig. 48－1）

完形で，一部に錆化がみられるが比較的良く残っている。胴芯金張りで，外環径3.0cm，内環径1.6cm，棒銅部径0.75cmを計る。

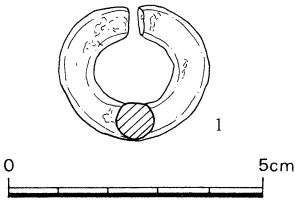


Fig. 48　金環実測図

5. 馬　具

今回の調査では３点が確認された。１はＳＤ－１の基底面直上，２はＳＸ－１，３はＳＤ－１からそれぞれ出土した。

鞍金具（Fig. 49－1）

鞍ではないかとみられるもので，円形の座金具に１本の鋲脚が付き，先端を曲げている。座金具には遊輪が付く輪形となる。

鐙（Fig. 49－2・3）

２は鉸具と兵庫鎖である。鉸具は鉄棒の一端を丸く曲げ，他方を直角に曲げていたとみられる。兵庫鎖は鉄棒を２重に折り曲げ，両端を直角に曲げる。鉸具は残存長９cm，兵庫鎖は10cmを計る。３は釣手とみられるもので，Ｕ字状に開き，下部を平端とする。釘は残存していなかった。

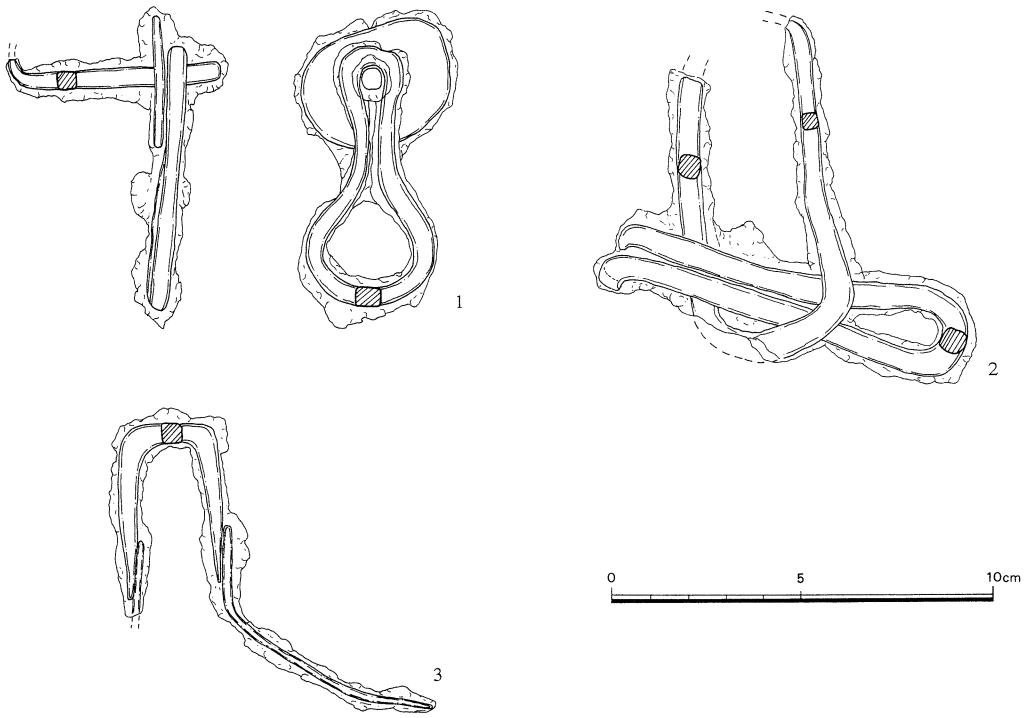


Fig. 49　馬具実測図

註

(1) 昭和52年度の調査の際も，有蓋高杯は比較的多く出土したが，杯身単独の出土は確認されていない。なお，第Ⅶ章において昭和52年度の調査で出土した遺物を再実測し，掲載している。

(2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　1987年にいうC種ヨコハケで，今回のものは須恵器の手法の一つである回転カキ目調整そのものである。

(3) (2) 及び坂靖「埴輪編年と技法伝播の問題」『同志社大学考古学シリーズⅡ　考古学と移住・移動』1985年，藤川智之「高知県の埴輪に関する一，二の問題」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.2　1990年度

参考文献

『平群・三里古墳』奈良県立橿原考古学研究所　1977年

『ロミノヲ谷古墳』日本道路公団・高知県教育委員会　1984年

第Ⅵ章　その他の遺構と遺物

本章では，伏原大塚古墳に直接関連しない遺構と遺物について時代別に記述していく。古墳築造以前ではひびのき遺跡と同時期である弥生時代後期後半の集落の一部，古代では当古墳北側にあるひびのきサウジ遺跡に関連するであろう土坑，中世では戦国期頃を中心とする土坑墓や集石墓，近世では比較的新しい時期の土坑などがそれぞれ検出されている。以下，弥生時代から順に記していく。

1．弥生時代

周溝ＳＤ－１の内側，古墳盛土の下で検出された。遺構は全般に削平され，残存状況は悪く，出土遺物は皆無に等しかった。検出された遺構は，竪穴状遺構１基，土坑４基であった。

(1) 遺構

ＳＴ－1

Ａ区東部，第Ⅳ層上面で検出した竪穴状遺構である。東側半分以上が調査区外に延び，全容は不明である。平面形はほぼ方形とみられ，長辺4.96m，短辺1.84m以上，深さ５cmを測る。長軸方向はＮ－2°－Ｗである。断面形は逆台形状で，壁は短く立ち上がる。底面では径0.30～0.35m，深さ８cmのピット１個を検出した。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無に等しく，図示できるものはなかった。

ＳＫ－6

Ａ区東部で検出した土坑で，ＳＫ－７に切られていた。平面形は不整方形で，長辺3.20m，短辺1.44m以上，深さ17cmを測る。長軸方向はＮ－21°－Ｅである。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面から比較的緩やかに立ち上がる。底面には方形状の落ち込みが認められる。埋土は黒褐色粘質土を主体とし上下２層に分層される。遺物は叩き目のある弥生土器片が数点あるのみで図示できるものはなかった。

ＳＫ－7～9

Ａ区東部，第Ⅳ層上面で検出した土坑であるが，その大半は調査区外にあり，平面形など詳細は不明といわざるを得ない。検出段階では３基の区分はできず，土層断面によって識別した。先後関係は，ＳＫ－９がＳＫ－７・８を切った形となっており，埋土は，ＳＫ－７が黒色と褐色粘質土粒を多量に含む黒褐色粘質土，ＳＫ－８が黒ボクの小ブロックと褐色粘質土粒を含む黒褐色粘質土，ＳＫ－９が黒褐色粘質土となっていた。遺物はほとんどなく，叩き目のみられる弥生土器片が若干出土した程度で図示できるものはなかった。

(2) 遺物

前述のとおり，残存状況が悪いこともあって図示し得る遺物はなかったが，叩き目のある弥

生土器片が何点か出土していることを明記しておきたい。なお，他の遺構においても混入しており，当古墳築造以前にはこの期の集落の一部であったものとみることができる。

2. 古　代

この時代のものは少なく，遺構としては土坑１基，遺物は２点確認できた。

(1) 遺構

ＳＫ－10

Ａ区北端部，第Ｖ層上面で検出した染み状の遺構である。平面形は不整方形で，長辺2.40m，短辺1.44m以上，深さ10cmを測る。長軸方向はＮ－69°－Ｗである。断面形は逆台形状で，壁は底面より短く上がる。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。遺物は完形の須恵器（杯）が出土した。

(2) 遺物

須恵器（Fig. 50－1・2）

１はＳＫ－10出土の杯で，口径12.4cm，器高4.1cmを計る。底部は平らで外端部に短くハの字形に開く高台が付く。体部は外上方へ上がり口縁部に至る。端部は丸く仕上げられる。底部外面は回転ヘラ切り底となる。器面は回転ナデ調整で，内底面はナデ調整を加える。２は第Ⅱ層から出土した台付広口壺で，口縁部は欠失する。底部は平らで，外端部にハの字形に開くしっかりした高台が付く。胴部は外上方へ真直ぐのび，上胴部で内側に大きく屈曲する。口縁部は外湾気味に開く。胴部外面下端には右方向の回転ヘラ削りを施す。それ以外は回転ナデ調整である。

3. 中世

この時代に属するものは比較的多く，土坑墓を中心に検出した。これら土坑墓はほとんど集

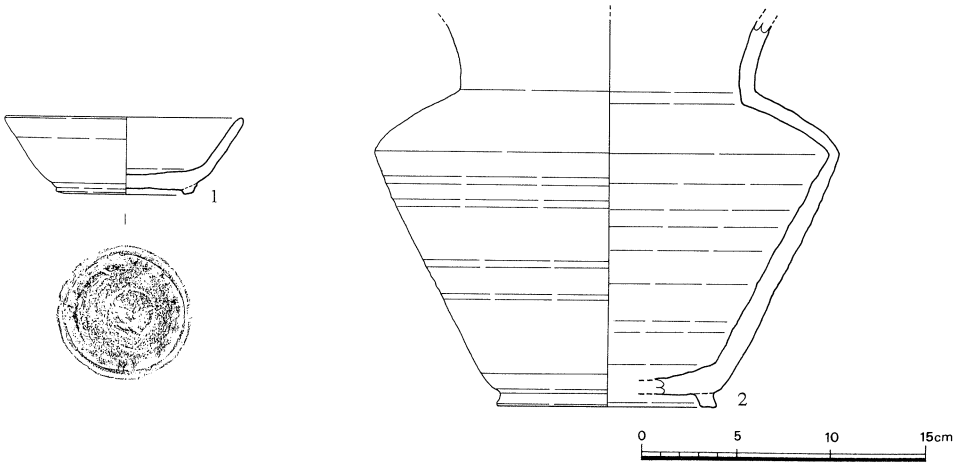


Fig. 50　須恵器実測図５

Fig.51　A・D区遺構平面図　－古代・中世－　（S＝1：200）

石を伴い，１～２点の土師質土器（杯，皿）を副葬している。また，これらはＡ区とＤ区において検出され，古墳周辺にはまだ数多く存在するものとみられる。

(1) 遺構

ＳＫ－11（Fig. 52）

Ａ区中央南寄り，周溝ＳＤ－１の検出面で検出した集石土坑墓である。拳大から人頭大の川原石を方形状に配石したもので，平面的には掘り方を検出できなかったが，断面観察において確認された。長辺1.10m，短辺0.75m，深さ1.40mを測り，長軸方向はＮ－1°16′－Ｅである。埋土は淡黒褐色粘質土で炭化物及び骨片を含んでいた。遺物は土師質土器の細片及び集石の間に須恵器の甕片の混入がみられた程度で復元できるものはなかった。

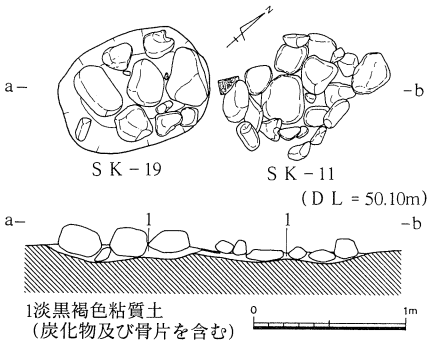


Fig. 52　ＳＫ－11・19

ＳＫ－12（Fig. 53）

Ａ区ＳＫ－11の東隣りで検出した集石墓である。人頭大の川原石３個を置いたもので，断面観察においても明確な掘り方は確認できなかった。石は東西0.55m，南北0.75mの間に設置されていた。遺物は皆無であった。

ＳＫ－13（Fig. 53）

Ａ区中央部，ＳＫ－12の北側で検出した集石墓である。拳大から人頭大の川原石を北東部をもとにコの字形に配石していた。集石の規模は長辺1.11m，短辺0.72mで，長軸方向はＮ－34°1′－Ｅを測る。掘り方は確認されなかった。遺物は集石に混って埴輪片が１点検出されたのみで，他にはみられなかった。

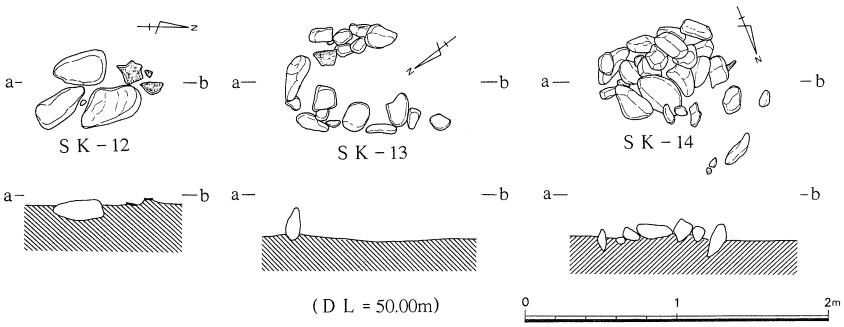


Fig. 53　ＳＫ－12～14

ＳＫ－14（Fig. 53）

Ａ区中央部，ＳＫ－13の北隣で検出した集石墓である。拳大から人頭大の川原石を方形状に配石したもので，ＳＫ－13同様掘り方は確認されなかった。集石の規模は長辺0.92m，短辺0.70mで，長軸方向はＮ－73°26′－Ｗを測る。遺物は土師質土器の細片と混入した須恵器があった。

ＳＫ－15（Fig. 53）

Ａ区北部で検出した集石墓である。拳大から人頭大の川原石を方形状に配石したもので，ＳＫ－13同様掘り方は確認されなかった。集石の規模は長辺0.85m，短辺0.70mで，長軸方向はＮ－7°24′－Ｅを測る。遺物は土師質土器の細片が数点認められた程度であった。

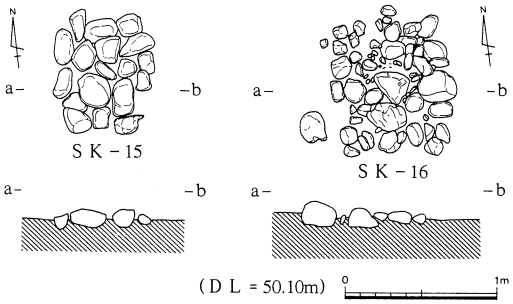


Fig. 54　ＳＫ－15・16

ＳＫ－16（Fig. 54）

Ａ区北部，ＳＫ－15の北約3.5mの所で検出した集石墓である。小石から人頭大の川原石を方形状に配石したもので，ＳＫ－13同様掘り方は確認されなかった。集石の規模は長辺0.98m，短辺0.85mで，長軸方向はＮ－7°42′－Ｅを測る。遺物は集石の間から土師質土器の細片及び骨片が出土している。

ＳＫ－17（Fig. 55）

Ａ区南部で検出した集石土坑墓である。平面形は隅丸方形を呈し，長辺0.64m，短辺1.15m，深さ11cmを測り，長軸方向はＮ－3°49′－Ｗである。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から短く立ち上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は骨片，炭化物に混じって，土師質土器の小杯（10・11）２点が出土している。

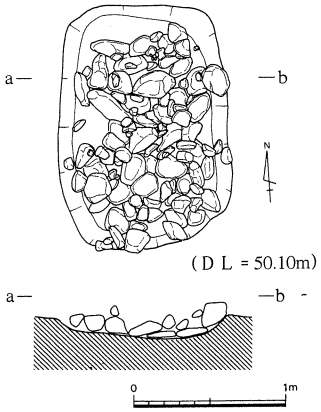


Fig. 55　ＳＫ－17

ＳＫ－18

Ａ区南部で検出した土坑墓である。遺構はＳＸ－２を掘り込み，ＳＫ－41に切られていた。平面形は隅丸方形を呈し，長辺1.04m，短辺0.68m，深さ0.26mを測り，長軸方向はほぼ磁北を向く。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面より垂直に近い角度で上がる。埋土は２層に分層され，上層が褐色砂質土粒を含む淡黒褐色粘質土，下層が淡黒褐色粘質土であった。遺物は土師質土器の杯（2）１点が副葬された形で出土した。

ＳＫ－19（Fig. 52）

Ａ区中央部南寄り，ＳＫ－11の南隣りで検出した集石土坑墓である。平面形は隅丸方形を呈し，長辺1.00m，短辺0.75m，深さ12cmを測り，長軸方向はＮ－18°39′－Ｅである。集石は北寄りに拳大から人頭大の川原石11個で構成されており，石には煤の付着がみられた。断面形は掘り方が浅いため不明確であるが，セクションでは舟底状を呈す。埋土は淡黒褐色粘質土単一層で，炭化物と骨片が含まれる。遺物は検出されなかった。

ＳＫ－20

Ａ区中央部東寄り，第Ⅳ層上面で検出した土坑墓である。平面形は隅丸方形を呈し，長辺

1.00m，短辺0.72m，深さ10cmで，長軸方向はN－82°52′－Wを測る。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から短く上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層で，７個の川原石が検出された。遺物は認められなかった。

ＳＫ－21

Ａ区中央部，ＳＫ－20の西側で検出した土坑墓とみられる遺構である。平面形は不整楕円形を呈し，長径0.98m，短径0.67m，深さ14cmで，長軸方向はN－70°16′－W を測る。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から短く上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は土師質土器の細片が数点検出された程度であった。

ＳＫ－22

Ａ区中央部，ＳＫ－21の北側で検出した土坑墓とみられる遺構である。平面形は不整楕円形を呈し，長径1.08m，短径0.68m，深さ0.38mで，長軸方向はN－76°14′－Wを測る。断面形は概ね逆台形状を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物はＳＫ－22同様土師質土器片が数点検出された。

ＳＫ－23（Fig. 56）

Ａ区中央部西寄りで検出した集石土坑墓である。平面形は不整楕円形を呈し，径0.64～0.71m，深さ15cmを測る。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面より短く立ち上がる。集石は一辺が27～45cmの川原石を中心に5個の石で構成され，中心となる川原石の下から土師質土器の皿（19）が出土した。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は前述の皿１点のみであった。

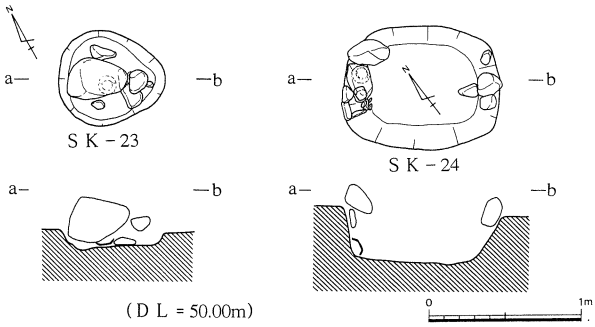


Fig. 56　ＳＫ－23・24

ＳＫ－24（Fig. 56）

Ａ区中央部西寄り，ＳＫ－23の南隣で検出した土坑墓である。平面形は隅丸方形を呈し，長辺1.05m，短辺0.81m，深さ0.35mで，長軸方向はN－55°10′－Wを測る。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から51°～77°の傾斜角で上がる。東壁と西壁で集石を検出し，西壁の集石直下から土師質土器の皿（16・17）が出土した。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は前述のもの以外は細片で復元できるものはなかった。

ＳＫ－25

Ａ区中央部北寄りで検出した土坑である。平面形は南北に長い隅丸方形を呈し，長辺2.85m，短辺0.96m，深さ15cmで，長軸方向はN－21°32′－Ｅを測る。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面から短く立ち上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無に等しかった。

ＳＫ－26

Ａ区北部，第Ｖ層上面で検出した土坑である。平面形は方形を呈し，長辺1.10m，短辺0.61m，深さ22cmで，長軸方向はＮ－1°0′－Ｗを測る。断面形は箱形を呈し，壁は底面から垂直に近い角度で上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は全く出土しなかった。

ＳＫ－27（Fig. 57）

Ｄ区中央部西寄りで検出した集石土坑墓である。平面形は楕円形を呈し，長径0.88m，短径0.64m，深さ20cmで，長軸方向はＮ－39°48′－Ｅを測る。集石は北寄りに集中し，拳大から人頭大の川原石約30個で構成されていた。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は淡黒褐色粘質土を主体とし，炭化物，骨片を含む。遺物は土師質土器の細片がわずかに出土したのみであった。

ＳＫ－28（Fig. 57）

Ｄ区中央部，ＳＫ－27の北側で検出した集石土坑墓である。平面形は不整方向を呈し，長辺1.18m，短辺0.08m，深さ0.30mで，長軸方向はＮ－6°47′－Ｅを測る。集石は北側を中心に拳大から人頭大の川原石で構成され，底面から土師質土器の杯（3・4），皿（18）が骨片と共に出土した。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は淡黄褐色粘質土粒を含む淡黒褐色粘質土であった。遺物は前述の３点が出土したのみであった。

ＳＫ－29（Fig. 57）

Ｄ区中央部南より，ＳＫ－39を切った形で検出した集石土坑墓である。平面形はほぼ隅丸方形を呈し，長辺1.00m，短辺0.64m，深さ0.44mで，長軸方向はＮ－16°23′－Ｅを測る。集石は北側と南側にまとまっており，北側集石直下から土師質土器の杯（5）が出土した。また，南側底部から骨片が検出された。断面形は箱形を呈し，壁は底面から垂直に近い角度で立ち上がる。埋土は褐色粘質土粒をわずかに含む灰黒褐色粘質土であった。遺物は前述の杯1点であった。

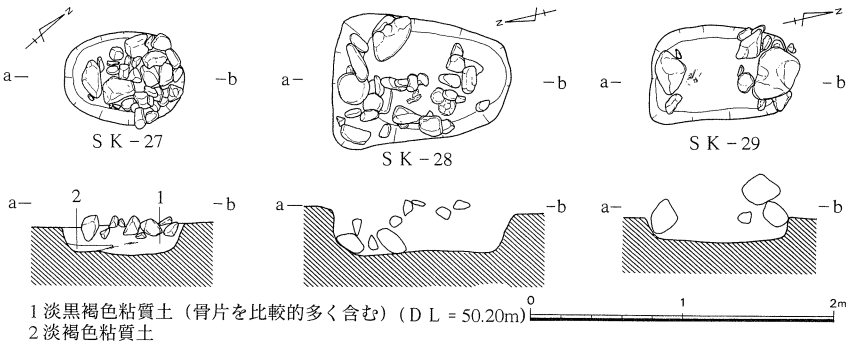


Fig. 57　ＳＫ－27～29

ＳＫ－30～32

Ｄ区南西部，ＳＫ－39を切った形で検出した集石土坑墓２基と土坑墓１基である。ＳＫ－30はＳＫ－31・32を切っており，平面形はほぼ方形を呈し，長軸方向はＮ－57°59′－Ｅを測る。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から急角度で上がる。ＳＫ－31は，平面形が不整円形を

呈し，径1.05m，深さ0.56mを測る。ＳＫ－32は，平面形が円形ないし楕円形を呈していたとみられ，径1.10m，深さ28cmを測る。埋土はいずれも灰黒色粘質土を主体とし，ＳＫ－30は他の２基に比べ褐色粘質土粒を多く含んでいた。遺物はＳＫ－30から土師質土器の杯（6）１点が出土した。

ＳＫ－33

Ｄ区中央部，ＳＫ－29の東側で検出した土坑墓である。平面形は円形を呈し，径0.55m，深さ８cmを測る。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は全く出土しなかったが，人骨を検出した。ただし，残存部が少なく，部位は不明である。

ＳＫ－34（Fig. 58）

Ｄ区中央部，ＳＫ－33の北側で検出した土坑墓である。平面形は方形を呈し，長辺0.98m，短辺0.54m，深さ0.34mで，長軸方向はＮ－89°2′－Ｅを測る。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は炭化物を挟んで上下２層に分層され，上層は褐白色砂質土粒を若干含む黒褐色粘質土，下層は褐白色砂質土粒を多く含む黒褐色粘質土であった。遺物は土師質土器の細片が僅かに出土したのみであった。

ＳＫ－35

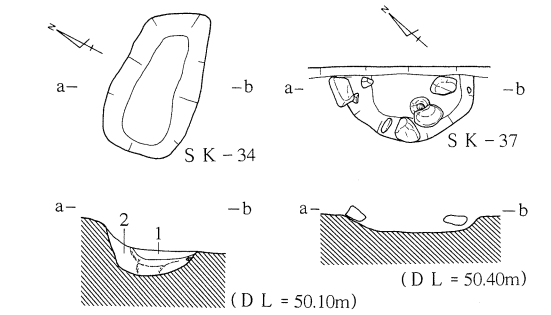
Ｄ区東部，ＳＫ－34の東側で検出した土坑墓である。平面形は隅丸方形を呈し，長辺0.96m，短辺0.52m，深さ26cmで，長軸方向はＮ－21°2′－Ｅを測る。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無に等しかった。

ＳＫ－36

Ｄ区東部，ＳＫ－35の東側に隣接して検出した土坑墓である。平面形は楕円形を呈し，長辺0.98m，短辺0.72m，深さ16cmで，長軸方向はＮ－53°8′－Ｅを測る。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面から短く立ち上がる。底面では３個の石を検出した。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は土師質土器の細片が僅かに出土した程度であった。

ＳＫ－37（Fig. 58）

Ｄ区東端部，ＳＫ－36の東側で検出した集石土坑墓である。半分は調査区外にあたり平面形は明確ではないが，楕円形を呈していたとみられ，長径0.96m，短径0.45m以上，深さ19cmを測り，長軸方向はＮ－28°24′－Ｗである。集石は壁に沿って検出された。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から短く立ち上がる。埋土は淡黒褐色粘質



1 黒褐色粘質土で褐白色砂質土粒を若干含む
2 黒褐色粘質土で褐白色砂質土粒を多く含む

Fig. 58　ＳＫ－34・37

土単一層であった。遺物は土師質土器１点 (7) が出土した。

ＳＫ－38（Fig. 59）

Ｄ区東部で検出した集石墓である。拳大の川原石を中心に不整楕円形状に配石しており，その規模は長辺1.30m，短辺0.55mで，長軸方向はＮ－44°4′－Ｅを測る。掘り方は確認できなかったが，褐白色砂質土粒を比較的多く含む灰黒色粘質土の上に集石は載っていた。遺物は皆無に等しかった。

ＳＫ－39（Fig. 59）

Ｄ区南西部，周溝ＳＤ－1を切った形で検出した土坑である。ＳＫ－29～32に掘り込まれていた。平面形は不整円形で，径3.45～3.70mを測る。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から急角度で立ち上がる。埋土は灰黒褐色粘質土を主体とし，褐白色砂質土粒の含有量により上下２層に分層される。遺物は土師質土器片が僅かに出土しただけで，図示できるものはなかった。

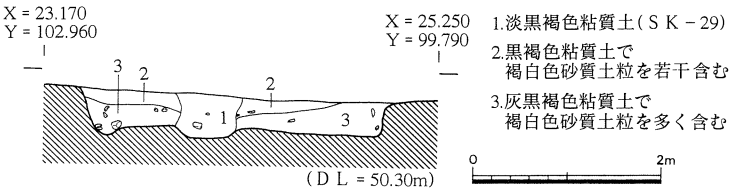


Fig. 59　ＳＫ－39 セクション図（Ｓ＝１：80）

ＳＤ－4

Ａ区中央部で検出した東西に延びる溝跡で，西側の調査区外へさらに伸びる。また，溝は周溝ＳＤ－１・２を切っている。溝は，検出長8.80m，幅1.27m，深さ5～19cmを測り，基底面の標高は49.715～50.047mで，約２°の傾斜角を持って西へ傾斜する。断面形はＵ字形をなし，壁は底面から緩やかに上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物はほとんどが細片で，図示できたのは土師質土器の皿（21）１点であった。

ＳＤ－5

Ａ区北部で検出した北東から南西に向かって延びる溝跡で，南西方向はさらに調査区外へ延びる。また，溝は周溝ＳＤ－２を切っている。溝は，検出長10.4m，幅0.58～0.64m，深さ10～47cmを測り，基底面の標高は49.612～49.676mで，南西方向へやや傾斜する。断面形は概ねＵ字形を呈し，壁は底面から緩やかに上がる。埋土は淡黒褐色粘質土で赤褐色砂質土粒を比較的多く含むものであった。遺物は皆無に等しかった。

ＳＤ－6

Ｄ区東部で検出した南北に延びる溝跡で，ＳＫ－37・38に掘り込まれていた。溝は，検出長8.10m，幅0.3～0.5m，深さ５～12cmを測り，基底面の標高は49.940～50.228mで，約３°の傾斜角を持って南へ傾斜する。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から短く立ち上がる。埋土は淡黒褐色粘質土単一層であった。遺物は全く出土しなかった。

ＳＸ－3

Ａ区中央部東寄りで検出した性格不明の遺構である。平面形は不整形で，長辺3.52m，短辺

2.88m，深さ25～44cmを測り，底面は起伏に富む。埋土は黄色砂礫土から黒褐色粘質土までバラエティーに富み５層に分層される。遺物では混入したとみられる埴輪片が比較的多く出土した。

(2) 遺　物

土師質土器（Fig. 60－1～21）

器種には杯（1～9），小杯（10・11），皿（12～21）がある。杯はすべてロクロ成形で，外底面はすべて回転糸切り底となっている。これらは体部から口縁部の形態及び手法によって大きく２類に分類可能である。なお，１は他の８点（器高指数35前後）に比べ器高指数が22と低く，皿に近い形態である。

杯Ａ　体部から口縁部にかけて直線的に上がるもので，内面を中心に回転ナデ調整が施され，器面にはロクロ目がほとんど残らないものである。さらに，口縁端部を丸く仕上げるもの（1～4）と細く仕上げるもの（5～7）に細分される。２の内面には煤が付着し，４の体部外面には「道性」の墨書が施される。

杯Ｂ　体部から口縁部にかけて内湾気味に上がるもので，内面にはロクロ目が明瞭に残る。また，口縁端部は丸く比較的太く仕上げられる。（8・9）

これら杯は，１がＳＤ－１，２がＳＫ－18，３・４がＳＫ－28，5がＳＫ－29，６がＳＫ－30，７・９がＳＫ－37，８がＳＫ－22からそれぞれ出土している。

10・11の小杯はＳＫ－17から出土した。10は口径5.6cm，器高1.6cm，底径3.5cmを計り，外底面は回転糸切り底である。体部は斜め上方へ短く上がり，口縁端部は丸い。11は口径8.3cm，器高2.3cm，底径5.4cmを計り，外底面は回転糸切り底である。体部は斜め上方へ上がり，端部は細く仕上げられる。

12～21の皿はすべて手づくね成形で，口縁部の手法並びに形態により大きく２類に分類できる。

皿Ａ　口縁部に強いヨコナデ調整を加えたもので，口唇部は概して短く外傾する。ヨコナデ調整の度合によって，口唇部の外傾度が異なる。（12～19）器面は一般にナデ調整とヨコナデ調整を施し，成形時の指頭圧痕が良く残っている。16の内面にはヘラナデ調整が施され，外底面には板状圧痕が残存する。18は他の７点（器高指数20前後）に比べ器高指数が26と高くなっている。19は器形の歪みが著しい。また底面には径1.5mmの円孔が２ヵ所に焼成後穿たれている。

皿Ｂ　体部下端を摘み細くし，体部で一旦太くした後再び口縁部をヨコナデ調整により細くしたもので，口縁部は内湾気味となる。（20・21）調整は皿Ａとほぼ同じで，器面には指頭圧痕が残る。

これら皿は，12～15・20がＳＤ－1，16・17がＳＫ－24，18がＳＫ－28，19がＳＫ－23，21がＳＤ－４からそれぞれ出土している。

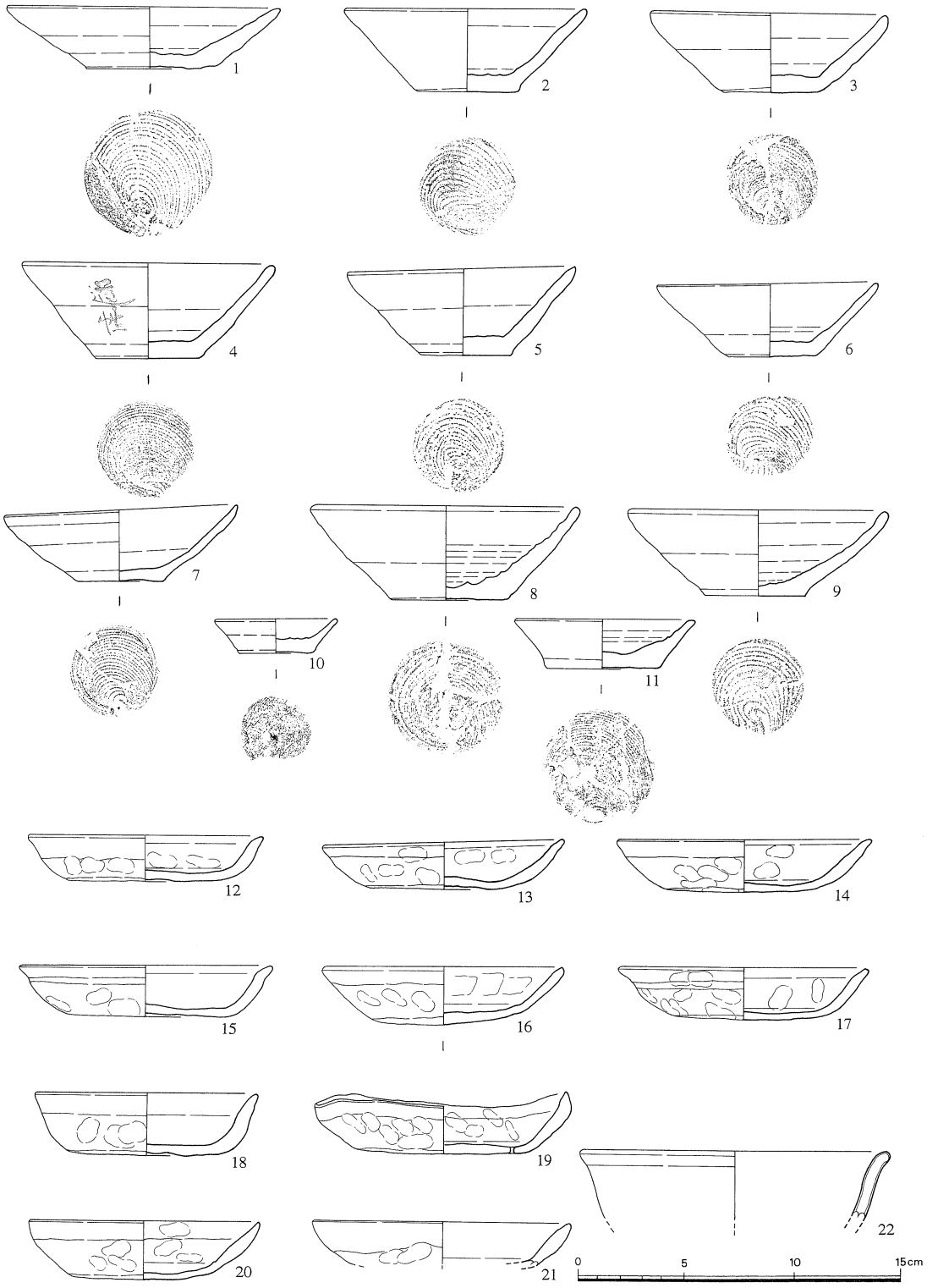


Fig. 60　土師質土器・青磁実測図

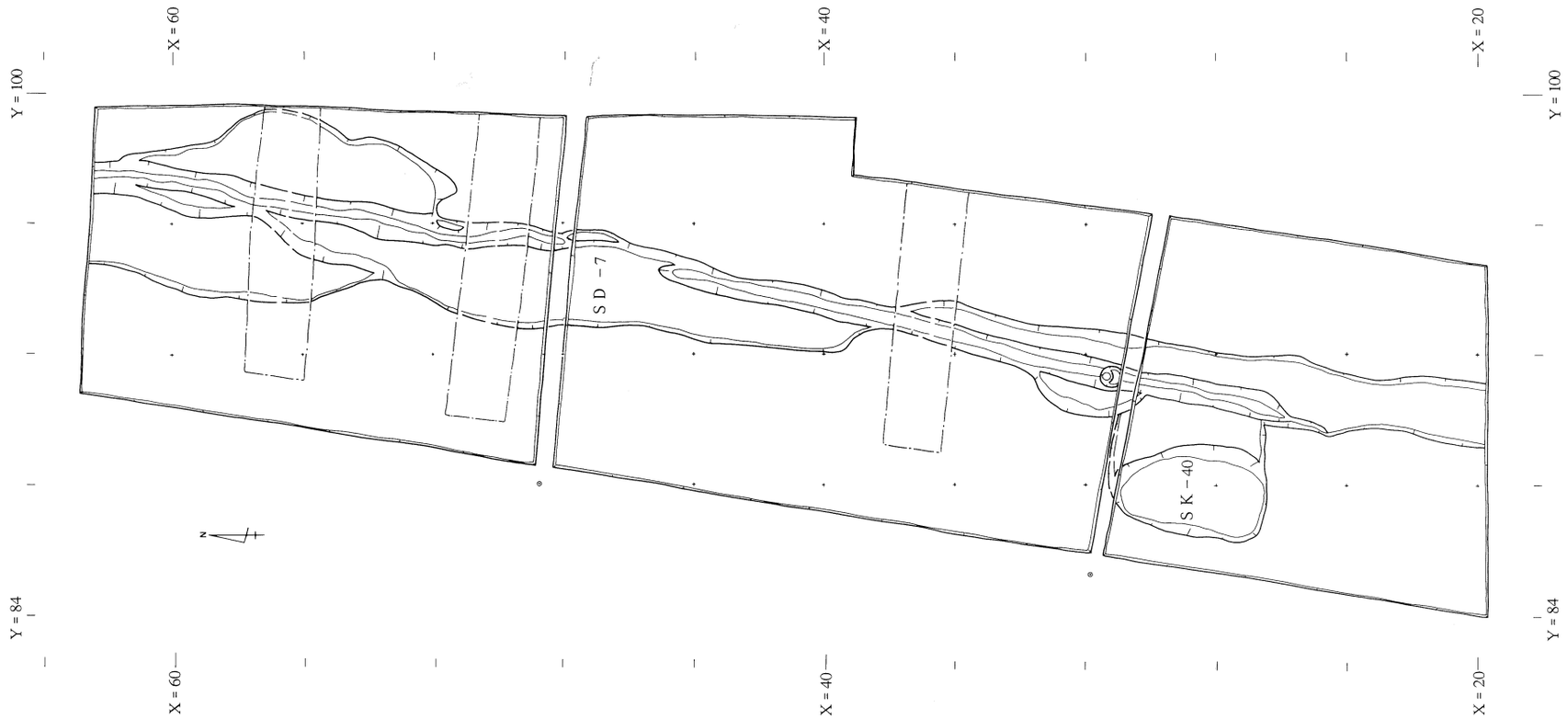


Fig.64　A区遺構平面図　－近世－　（S＝1：200）

青磁（Fig. 60－22）

碗の破片で，第Ⅱ層上面から出土した。底部は欠失し，体部は内湾気味に上がり，口縁部で短く外反し，端部を丸く仕上げる。

青銅製品（Fig. 61－1）

柄付香炉とみられるもので，周溝ＳＤ－１中位から埴輪片に混じり土師質土器（20）と伴出した。周溝の埋没時期の決め手となる遺物である。底部は中凹みになり，細い支脚が３ヵ所に付いていたとみられるが欠失し，２ヵ所は径４mmの円孔，１ヵ所は支脚接合部が残存するのみである。体部はやや外傾して直立し，内側に受け口を構え，口縁部は内湾気味に短く上がり，端部は外側を丸く肥厚する。口縁部の１ヵ所が欠失しており，そこに柄が付いていたものと推測される。また，出土時点では内面に比較的多くの灰が付着した状態であった。

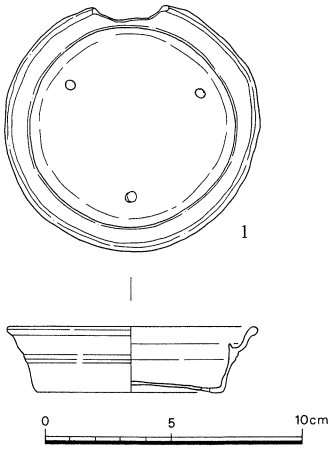


Fig. 61　青銅製品実測図

4. 近世

Ｂ区以外で近世以降とみられる遺構を検出した。確認された遺構は土坑４基（ＳＫ－40～44），溝状遺構１条（ＳＤ－７）であった。

(1) 遺構

ＳＫ－40（Fig. 62）

Ａ区南西部で検出した土坑で，ＳＤ－７に切られていた。平面形は不整形を呈し，長辺4.80m，短辺4.56m，深さ15～48cmで，底面は西側に傾斜し，西側は１段下がった平場となっている。断面形は逆台形を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は褐色粘質土を主体とするが，拳大から人頭大の石を多量に含んでおり，石捨て坑とみることができる。遺物には近世陶磁器並びに混入したとみられる埴輪片があり，図示できたのは２点（１・２）であった。

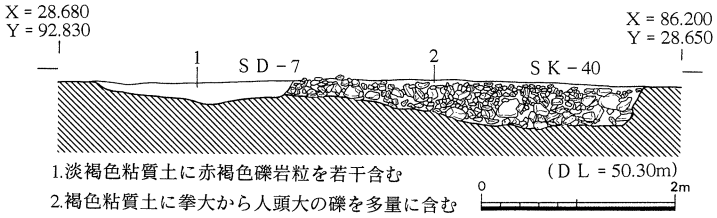


Fig. 62　ＳＫ－40，ＳＤ－７セクション図（Ｓ＝１：80）

ＳＫ－41・42

Ｃ区で検出した土坑で，ＳＫ－40同様埋土の大半は拳大から人頭大の石であり，石捨て坑とみることができる。平面形はいずれも方形とみられ，規模は，ＳＫ－41が長辺3.00m以上，短辺1.10m以上，深さ1.00m，ＳＫ－42が長辺2.50m以上，短辺1.10m以上，深さ0.88mであ

る。埋土はほぼ同じで黄褐色砂礫土と黒色粘質土であった。遺物は近世陶磁器片に混り埴輪片も出土した。復元できたのは，ＳＫ－41が３点（２～５），ＳＫ－42が２点（６・７）であった。

ＳＫ－43

Ｄ区南部で検出した土坑で，ＳＫ－39を切っていた。平面形は長楕円形で，長辺1.20m，短辺0.53m，深さ0.58mを測る。断面形は逆台形状を呈し，壁は底面から急角度で上がる。埋土は灰褐色砂礫土で，ＳＫ－40と同じ性格のものとみられる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ－7（Fig. 62）

Ａ区で検出した南北に延びる染み状の溝で，ＳＫ－40を掘り込んでいた。溝の検出長は42.6mで，幅1.4～5.4m，深さ9～22cmを測る。基底面の標高は49.988～50.150mで，やや北に向って傾斜する傾向がある。埋土は淡褐色粘質土に赤褐色礫岩粒を多く含むものである。整地層の土と似ていることから，その時期の所産とみることができよう。遺物は埴輪片が数点混入する程度であった。

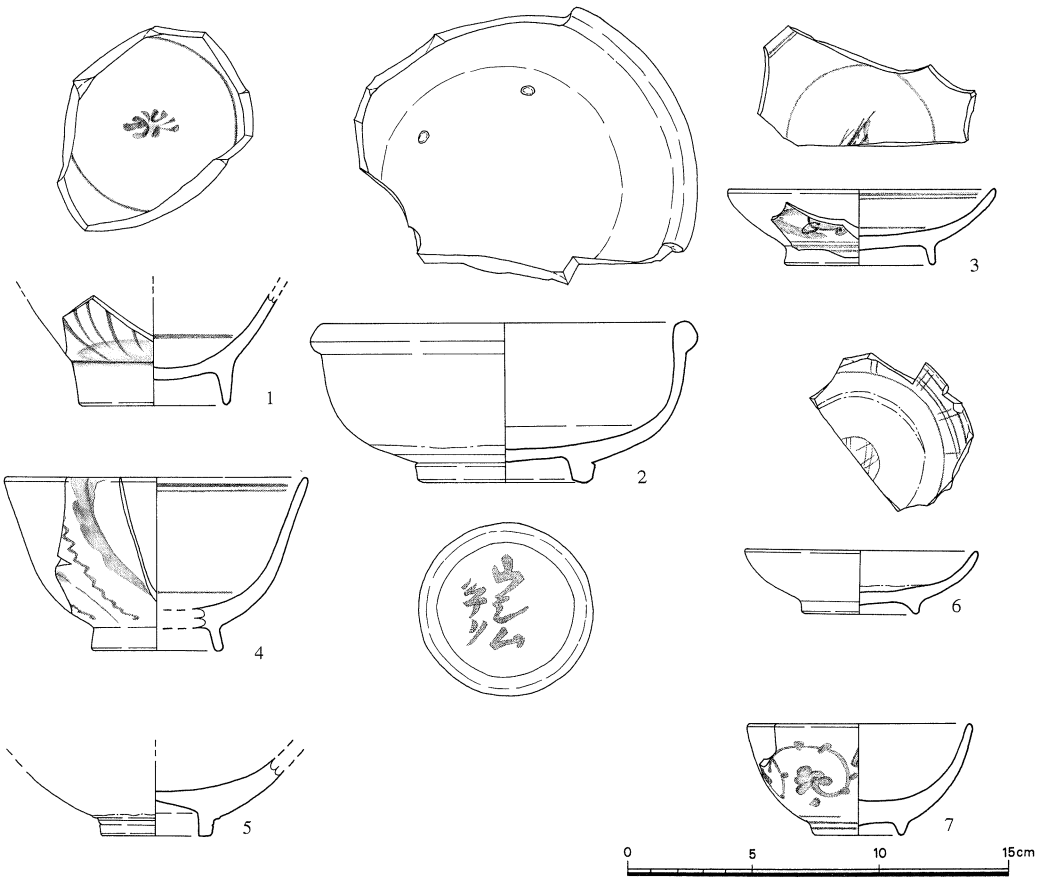


Fig. 63　近世陶磁器実測図

(2) 遺物

近世陶磁器（Fig. 63）

1・2はＳＫ－40出土である。1は磁器で広東茶碗の底部である。丸味のある底部外端面にはやや開く比較的高い削り出し高台が付く。体部は内湾気味に上がる。見込みには1条の界線と形不明の文様，外面には1条の界線の上に絵柄不詳の文様が描かれる。2は陶器の碗で，平らな底部にはしっかりした削り出し高台が付く。体部は内湾して上がり，口縁部で直立し，端部は外側を玉縁状に肥厚する。見込には胎土目が2ヵ所に残り，外底面にはカタカナで「ウシム□チリ」の墨書が書かれる。また，体部外面下端は回転ヘラ削り調整が施され，その上方から内面にかけて白色釉が施釉される。3～5はＳＫ－41出土で，3・4は磁器，5は陶器である。3は皿で，底部から内湾気味に上がり口縁部に至る。高台は削り出し高台である。内面には2条と1条の界線を巡らし，見込に島の絵を描く。外面には蝶と花を描き，その下に3条の界線を巡らす。4は広東茶碗で，体部は内湾し，口縁部は外上方を真直ぐ向く。底部はハの字形に開く削り出し高台となる。内面には2条と1条の界線，外面には羊歯文が描かれる。5も碗で，体部は内湾気味に上がる。高台は削り出し高台で，下方を向く。体部外面から内面にオリーブ灰色の釉を施釉する。6・7はＳＫ－42出土で，いずれも磁器で，7は肥前形Ⅳ期とみられる。6は皿で，底部から内湾して上がり口縁部に至る。高台は短い削り出し高台となる。内面は蛇ノ目状に釉ハギが行われ，そこを境に見込と体部内面それぞれに連子格子文を描く。7は小杯で，底部は平らで，体部から内湾して上がり口縁部に至る。高台は削り出し高台で，断面逆三角形を呈す。外面には唐草文を描き，その下に3条の界線を巡らす。

第Ⅶ章　昭和52年度の調査

本章では昭和52年度に実施された調査で出土した遺物について記述する。大半は須恵器で，円筒埴輪，馬具，鉄器，装飾品も出土し，かつては勾玉，管玉の出土の記載[1]もある。今回掲載したのは確認できた須恵器55点とガラス小玉２点であり，すべて再実測した。これらの内14点の須恵器は以前紹介されたもの[2]であるが，それ以外の遺物は今回が初めての報告となる。

これら個々の詳細な出土状態については不明確であるが，すべて主体部床面から出土したものであるとの記載があり，今回もそれに準じた。また，主体部は中世の土坑墓によって掘り込まれた箇所があったらしいが，今回点検した遺物の中には古墳時代以外のものは見当たらなかった。なお，調査は５日間実施され，６本の試掘トレンチを設定し行われている。

1. 須恵器

器種はバラエティーに富み，杯蓋，杯身，有蓋高杯，無蓋高杯，台付椀，甑，台付長頸壺，台付広口壺，器台，子持広口壺，子持器台がみられる。以下，器種ごとに記述していく。

杯蓋（Fig. 65－1～5）

５個体を復元できた。それぞれ形態的に差異が認められ，３～４期区分することも可能である。しかし，絶対数が少ないため，ここでは個々の特徴のみを述べることとする。１は，天井部が欠失しており，つまみの有無については明確でないが，ここでは杯蓋として扱った。天井部は丸く緩やかに下がり，稜は小さな段をなし，口縁部はハの字形に開き端部を細く仕上げる。天井部外面ほぼ全面に回転カキ目調整を加える。他は回転ナデ調整である。口縁部高は1.8cmである。２は口径13.8cm，口縁部高2.3cmで，天井部は丸く緩やかに下り，稜は上に幅広の凹線を巡らすことによって判別できる程度で，口縁部は外下方へ大きく開き端部は細く仕上げられる。天井部外面はほぼ全面に回転ヘラ削り調整を行う。天井部内面にナデ調整が行える以外は回転ナデ調整である。３は天井部1/2が欠失しており，つまみの有無は不明である。天井部は平らで，内湾して下り，口縁部は下方を向く。稜は消失している。天井部外面は回転ヘラ切り未調整で，他は回転ナデ調整である。４は３以上に扁平な杯蓋で，天井部は歪むがほぼ平らで，大きく内湾して下り，口縁部は下方を向き，端部は細く仕上げられる。天井部外面ほぼ全面に回転ヘラ削り調整，同内面はナデ調整，他は回転ナデ調整である。５は口径10.7cmと矮小化する。天井部はやや丸味を有し，内湾気味に下がり口縁部に至る。口縁端部は細い。天井部外面は一部に回転ヘラ削りが認められるも基本的には回転ヘラ切り未調整で，他は回転ナデ調整である。

杯身（Fig. 65－6）

確認できたのは１点のみであった。５同様矮小化した器形で，５と同時期とみることができ

る。口径9.8cm，たち上がり高0.6cmで，たち上がりは短く内湾気味に内傾し端部は細い。受部は外上方へ短くのびる。底部は丸味を有し，比較的深い。底部外面は回転ヘラ切り未調整，同内面はナデ調整，他は回転ナデ調整である。

有蓋高杯蓋（Fig. 65－7）

確認できたのは１点で，天井部は平らで，中央に径2.1cmの扁平なつまみが付く。稜は段をなす。口縁部は欠損する。天井部外面には回転ヘラ削り調整を行うが後に回転ナデ調整を加えており，その単位は不明。同内面はナデ調整。他は回転ナデ調整を施す。

有蓋高杯（Fig. 65・66－8～33）

８～11は原形を復することができたが，12～23は杯部，24～33は脚台部である。中には同一個体も含まれると思われるが，確認できなかった。８は口径12.7cm，器高17.9cm，底径14.5cmである。たち上がりは内傾してのび端部は細く仕上げる。たち上がり高は1.2cmである。脚は高さ13.3cmでラッパ状に開き裾部でさらに開く。２条の凹線を境に長方形の透しを２段３方向に刻む。脚内面上部にはしぼり目が残る。９は口径15.4cm，器高19.8cm，底径16.6cmである。たち上がりは内湾気味に内傾し，端部は丸く，その高さは1.1cmである。底部は丸味を有し，外面2/3に回転ヘラ削り調整を施す。脚は高さ15.7cmでラッパ状に開き裾部に至る。端部は外傾する浅い凹面をなす。透しは２条の凹線を境に長方形のものが２段２方向に刻まれる。脚内面上部にはしぼり目が残る。10は口径12.7cm，器高17.5cm，底径14.6cmである。たち上がりは内傾し，端部は細く上方を向き，その高さは0.9cmである。底部は丸く，外面3/4に回転ヘラ削り調整を施す。脚は高さ13.0cmでラッパ状に開き，裾部で屈曲し水平を向き端部は外傾する凹面をなす。透しは２条の凹線を境に長方形のものが２段２方向に刻まれる。脚内面上半分にはしぼり目が残る。11は口径12.2cm，器高14.8cm，底径11.6cmである。たち上がりは短く内傾し，端部は細い。受部も短く水平を向く。底部は丸く，外面2/3に回転ヘラ削りを施す。脚は高さ10.2cmでラッパ状に開き裾部に至る。端部は外傾する凹面をなす。透しは２条の凹線の下に長方形のものが１段２方向に刻まれる。12は口径12.0cmでたち上がりは内傾し細い端部で上方を向く。底部は丸味を有し，外面2/3に回転ヘラ削り調整を施す。脚台部は欠失するが，長方形の透しが３方向に刻まれる。13は口径14.4cmで，たち上がりは内傾し端部は丸い。底部は丸味を有し，外面3/4に回転ヘラ削り調整を行い，その上にも回転ナデ調整を加える。他は欠損する。14は口径12.9cmでたち上がりは内傾し細く，端部で上方を向く。受部は太く水平を向く。底部は丸く，外面2/3に回転ヘラ削り調整が施される。脚台部は欠失するが，長方形の透しが２方向に刻まれている。15は口径14.8cmで，たち上がりは内傾し端部は細い。底部は丸味を有し，外面の大半に回転ヘラ削り調整を施した上に回転ナデ調整を加える。16は口径13.1cmで，たち上がりは短く内傾し端部は細い。受部は太く水平を向く。底部は丸味を有し，外面1/2に回転ヘラ削り調整を施す。17は口径13.4cmで，たち上がりは短く内傾し端部は細い。底部は丸味を有し，外面2/3に回転

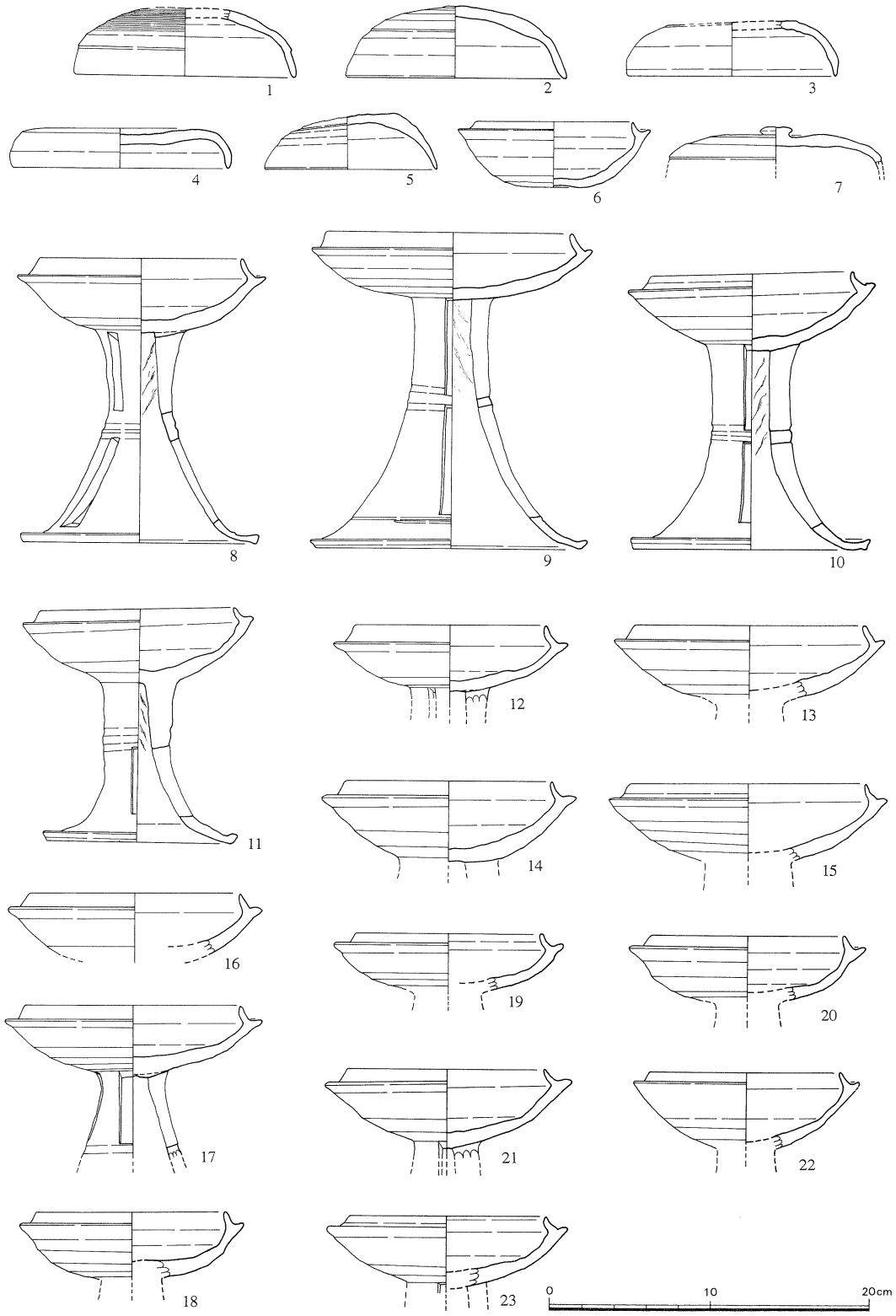


Fig. 65　須恵器実測図 6

ヘラ削り調整を施した上に回転ナデ調整を加える。脚は外下方へ下り，下半が欠失する。透しは長方形のものが３方向に刻まれる。ただ，完全に長方形のものは２方向で，１方向のものは切れ目という感のものである。器面は内底面のみナデ調整で，他は回転ナデ調整である。18は口径11.8cmで，たち上がりは短く内傾し端部は細い。底部は丸味を有し，外面2/3に回転ヘラ削り調整を施した上に回転ナデ調整を加える。19は口径11.8cmで，たち上がりは短く内傾し，やや丸みのある端部で上方を向く。底部は丸味を有し，外面2/3に回転ヘラ削り調整を施しその上に回転ナデ調整を加える。20は口径12.0cmで，たち上がりは短く内傾し端部は細い。底部は丸味を有し，外面3/4に回転ヘラ削り調整を施す。また，外面にはハダ荒れがみられる。21は口径12.4cmで，たち上がりは短く内傾し端部は細い。底部は丸味を有し，外面2/3に回転ヘラ削り調整を施す。脚台部のほとんどは欠失するが，長方形の透しが２方向に刻まれる。22は口径12.0cmで，たち上がりは短く内傾する。底部は丸味を有し，外面1/2に回転ヘラ削り調整を施しその上に回転ナデ調整を加える。23は口径12.3cmで，たち上がりは短く内傾し，端部は外傾する小さな凹面をなす。底部は丸味を有し，外面1/2に回転ヘラ削り調整を施す。脚台部は大半が欠失するが，長方形の透しが２方向に刻まれる。24は底径14.3cmで，脚台部はラッパ状に開き，裾部で屈曲し水平を向く。端部は真横を向く浅い凹面をなす。残部には透しはみられない。25は底径14.0cmで，脚台部はラッパ状に開き，裾端部を上方に肥厚する。透しは長方形のものが３方向に刻まれる。また，外面には回転カキ目調整が施される。26は底径14.7cmで，脚台部はラッパ状に開き裾部で屈曲し，端部は外傾する平面をなす。透しは１段分が残存するが，長方形の透しが２段３方向に刻まれていたとみられる。27は口径14.0cmで，脚台部下半からラッパ状に開き裾部で屈曲し端部は外傾する平面をなす。透しは長方形のものが３方向に刻まれる。また，外面には自然釉がかかり部分的にハダ荒れがみられる。28は高さ10.2cm，底径13.1cmの脚台部で，ラッパ状に開き裾部に至る。１条の凹線を境に２段２方向に長方形の透しを刻む。内面上部にしぼり目が残る。また，外面には自然釉がかかり部分的にハダ荒れがみられる。29は高さ10.4cm，底径14.2cmの脚台部で，ラッパ状に開き裾端部には外傾する浅い凹面をなす。２条の凹線を境に長方形の透しが２段２方向に刻まれる。内面上部にはしぼり目が残る。外面には自然釉がかかり部分的にハダ荒れがみられる。30は高さ14.6cm，底径15.3cmの脚台部で，ラッパ状に開き裾端部は外傾する浅い凹面をなす。３状の凹線を境に長方形の透しを２段２方向へ刻む。内面上部にはしぼり目が残る。外面には濃緑色の自然釉がかかり部分的にハダ荒れもみられる。31は底径16.3cmで，脚台部はラッパ状に開き裾端部は外傾する浅い凹面をなす。透しは長方形のものが２方向に刻まれる。32は高さ16.3cm以上の長い脚台部を有するもので，基部から裾部にかけてラッパ状に開く。２条の凹線を境に長方形のものが２段２方向に刻まれる。内面にはしぼり目は認められない。33は高さ14.9cm，底径18.0cmの脚台部で，ラッパ状に開き裾部で屈曲し水平を向く。２条の凹線を境に長方形の透しが２段２方向に刻まれる。内面上部にはしぼり目が残る。

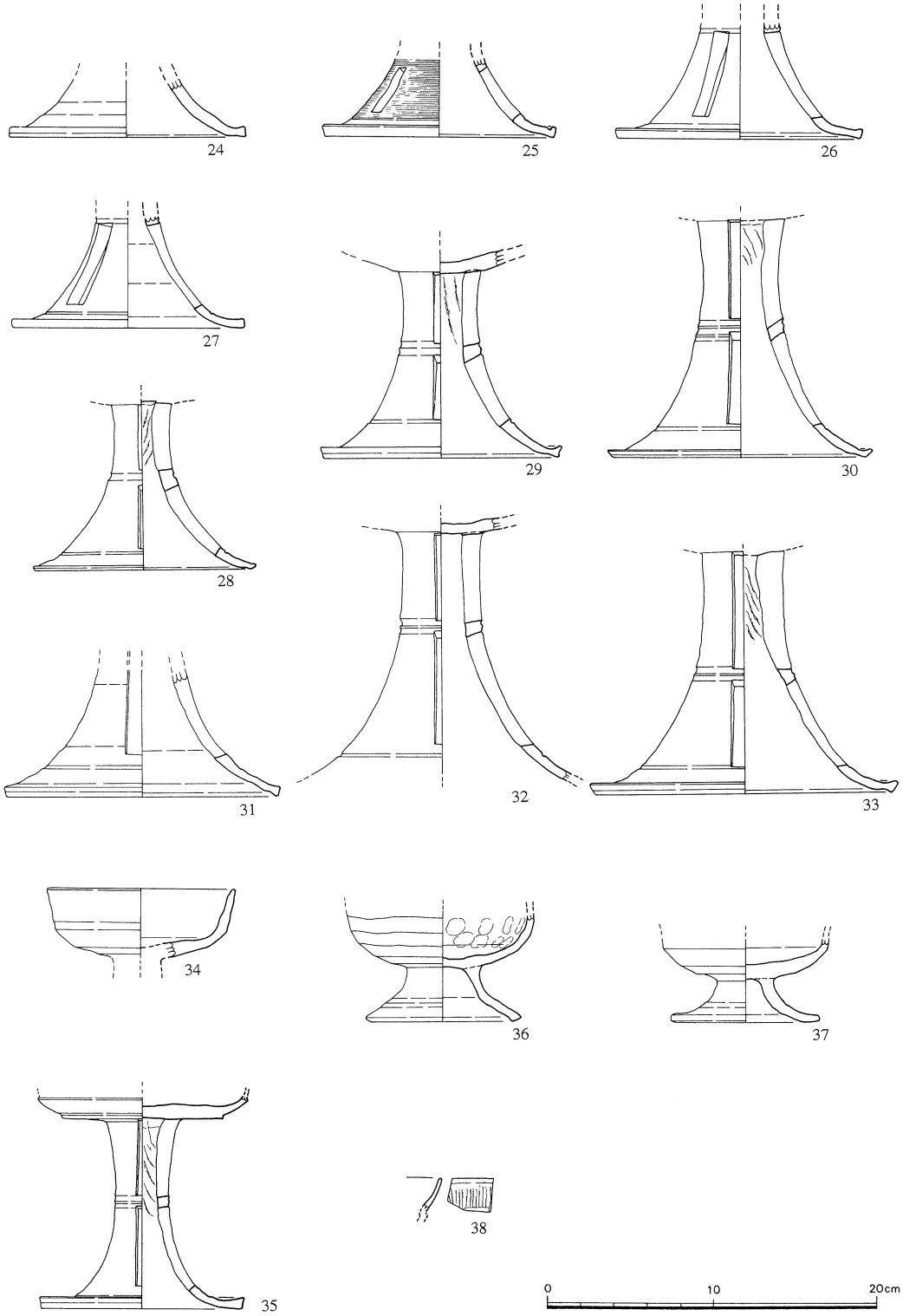


Fig. 66　須恵器実測図 7

無蓋高杯（Fig. 66－34・35）

34は杯部で，口径は11.3cmである。丸味のある底部から口縁部は屈曲して斜め上方にのび端部は丸く仕上げられる。外面口縁部下端には１条の凹線が巡り，底部外面には回転ヘラ削り調整を施した上に回転ナデ調整を加える。35は杯上部が欠損する。杯底部は平らで，外面には断面三角形の凸帯が巡る。脚台部は高さ11.6cm，底径12.1cmで，中位からラッパ状に開き裾端部は外傾する浅い凹面をなす。透しは長方形のものが２条の凹線を境に２段２方向に刻まれる。

台付椀（Fig. 66－36・37）

無蓋高杯の一種ともみられるが，杯部が深いこともあり台付椀として一項設けた。36は口縁部が欠失する。底部は丸味を有し比較的深く，内面には指頭圧痕が残り，外面には静止ヘラ削り調整と回転ヘラ削り調整が施される。脚台部は高さ3.3cm，底径9.6cmと短くしっかりしたもので，ハの字形に開いた後斜め下方に大きく開き端部は外傾する平面をなす。37も口縁部を欠失する。底部は丸味を有し，外面には回転ヘラ削り調整を施す。脚台部は高さ2.6cm，底径9.1cmで，ラッパ状に開き裾部で屈曲し水平を向き，端部は内傾する平面をなす。

甕（Fig. 66－38）

口縁部の破片で，内湾気味にのび端部は丸味を有す。外面にはクシ状工具によるとみられるタテ方向の刻目が施される。

台付長頸壺（Fig. 67－39～48）

39は蓋で，天井部は丸く，中央に径2.2cmの扁平なつまみが付く。口縁部は天井部から緩やかに下り，内側に下方を向くかえりが付く。天井部外面には回転ヘラ削り調整，内面にはナデ調整が施され，他は回転ナデ調整である。40はほぼ原形を復元できた大形の台付長頸壺で，口径12.0cm，器高35.6cm，胴径21.2cm，底径15.9cmである。壺部分は，ほぼ平らな底部から胴部は内湾して上がり，上胴部で内傾してのび，頸部はやや内傾してたち上がり口縁部から外傾し端部は細く仕上げる。上胴部外面には１条と２条の凹線に区画されたクシ状工具による刺突文が施される。外面中胴部以下には回転ヘラ削り調整が施される。脚台部は高さ8.0cmで，ラッパ状に開いた後屈曲し裾部ではハの字形に開き，端部は内傾する凹面をなす。脚台上半分には２条の凹線を境に長方形の透しが２段３方向に刻まれる。また，裾部との境にも１条の凹線が巡る。41は40を一回り小さくしたもので，口径8.7cm，器高27.0cm，胴径16.7cm，脚台部高6.4cm，底径13.6cmである。胴部が40に比べやや扁平な作りである以外形態，手法はほぼ同じである。42は口頸部が欠失し，器形の歪みが大きい。胴部は断面楕円形に近い球形をなし，その最大径を中位よりやや上に求めることができる。外面中位やや上には上下１条の凹線に区画された６本単位の波状文が施される。外面中胴部以下は回転ヘラ削り調整が行われる。脚台部は高さ7.5cmで，ハの字形に開いた後小さく屈曲し裾部で再びハの字形に開き端部は内傾する浅い凹面をなす。外面裾部との境は凹線を巡らすことによって段をなす。また，上半分には長方形の透しを２方に刻む。43は直口壺と呼称した方が適切な個体である。口径10.6cm，

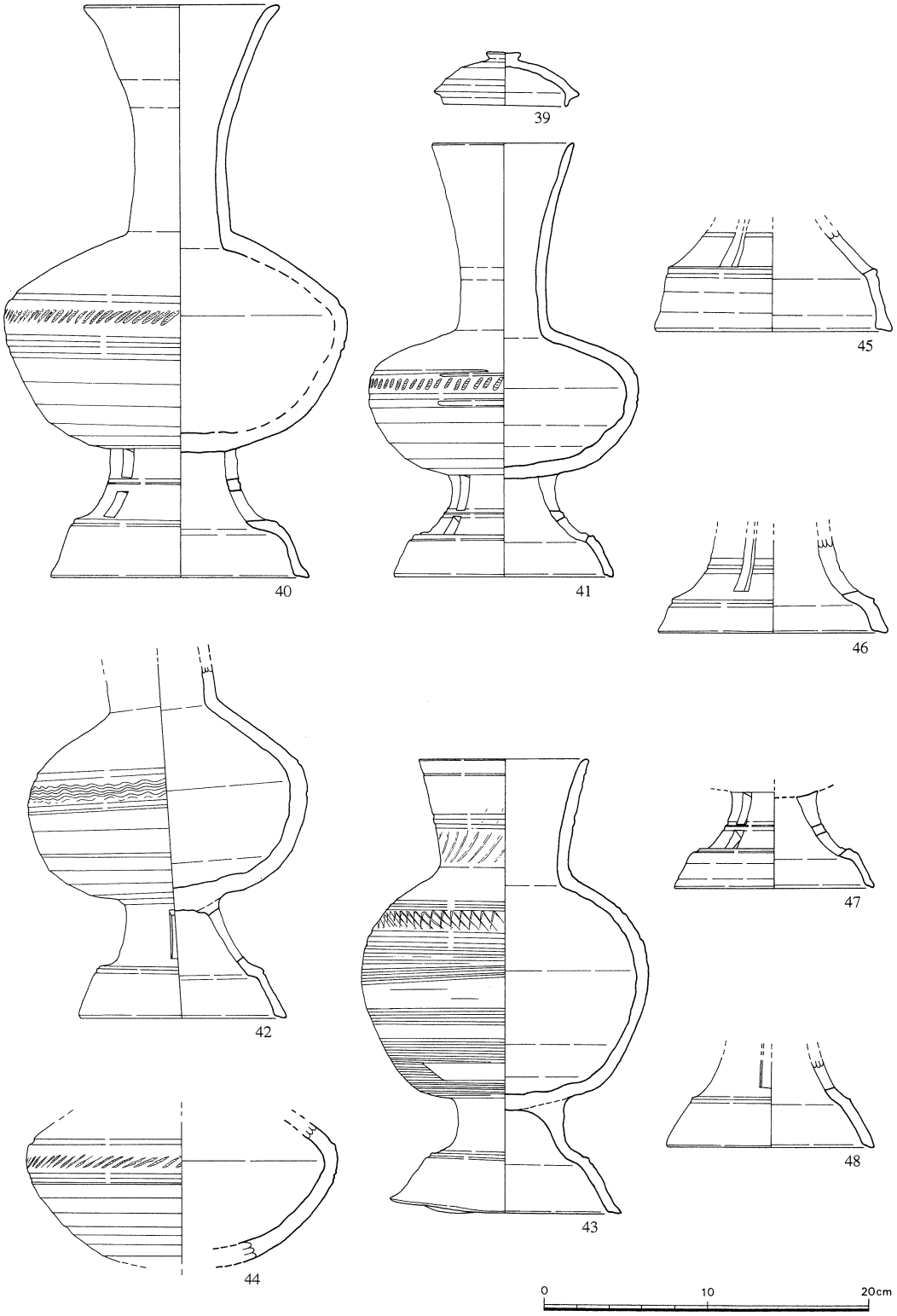


Fig. 67　須恵器実測図 8

器高28.3cm，胴径17.8cm，底径14.5cmで，脚台部に歪みがみられる。底部は平らであるが，胴部全体は球形に近く最大径は中位にある。口頸部は斜め上方へ外傾してのび端部は丸味を有す。口頸部外面中位に２条の凹線が巡り，その下にヘラ状工具による圧痕が残る。上胴部外面には上下各２条の凹線に区画されたヘラ状工具による鋸歯状の文様が施される。それ以下には回転カキ目調整が行われ，底部には回転ヘラ削り調整もみられる。脚台部は外反気味に外下方へ下り小さく屈曲した後裾部ではハの字形に開き端部は内傾する浅い凹面をなす。外面裾部との境には上下に凹線を巡らすことによって小さな断面三角形の凸帯を作り出す。44は胴部の破片で，胴部最大径は19.3cmを計り上位1/3にある。その外面には１条と２条の凹線に区画されたハケ状工具による刺突文が施され，それ以下には回転ヘラ削り調整が行われる。45～48は脚台部である。45は底径14.7cmと大きく，上半部が大きく開いた後屈曲して裾部はハの字形に開き端部は内傾する凹面をなす。外面裾部との境には下端に１条の凹線を巡らすことによるやや丸味のある断面三角形の凸帯を作り出す。透しは長方形のものが３方に刻まれる。46は底径14.2cmで，ラッパ状に開き裾部ではハの字形をなす。端部は内傾する浅い凹面をなす。透しは２条の凹線を切って長方形のものが３方向に刻まれる。47は高さ6.0cm，底径12.3cmで，形態的には46とほぼ同じである。裾部との境には２条の凹線で作り出された小さな断面三角形の凸帯が巡る。透しは２条の凹線を境に長方形のものが２段３方向に刻まれる。48は底径12.8cmで，ラッパ状に開いた後小さく屈曲し裾部ではハの字形をなす。端部は内傾する浅い凹面をなす。裾部との境は小さな稜となる。透しは長方形のものが２方向に刻まれる。

台付広口壺（Fig. 68－49～52）

49は口径16.8cm，胴径19.0cmで，口頸部は外反して上がり端部は内傾する凸面をなし，直下に断面三角形の凸帯を巡らす。外面には４本単位のクシ描波状文を３条施す。胴部はほぼ球形を呈し，最大径は中位にある。上胴部から中胴部外面にかけて回転カキ目調整を施した上に上下２ヵ所に刺突文を加える。外面下胴部以下に平行の叩き目，内面には同心円文の叩き目がそれぞれ施される。脚台部は欠失するが長方形の透しが２方向に刻まれている。50は口縁部の破片で，口径18.5cmを計る。口縁部は大きく外反し端部は外傾する凸面をなし，直下にやや丸味のある凸帯が巡る。外面には４本単位の波状文が１条施される。51・52は脚台部である。51は高さ7.2cm，底径17.3cmで，ラッパ状に開き端部は外傾する平面をなす。透しは台形のものが２方向に刻まれる。52は底径21.7cmで，ラッパ状に大きく開き端部は外傾する浅い凹面をなす。透しは台形のものが３方向に刻まれる。

器台（Fig. 68－53）

口縁部の破片で，外傾してのび端部を肥厚する。肥厚した部分の外面にはヘラ状工具によるタテ方向の刻目を施す。その下端には１条の凹線が巡る。ＳＫ－５出土のもの（Fig. 34－14）と同一個体の可能性がある。

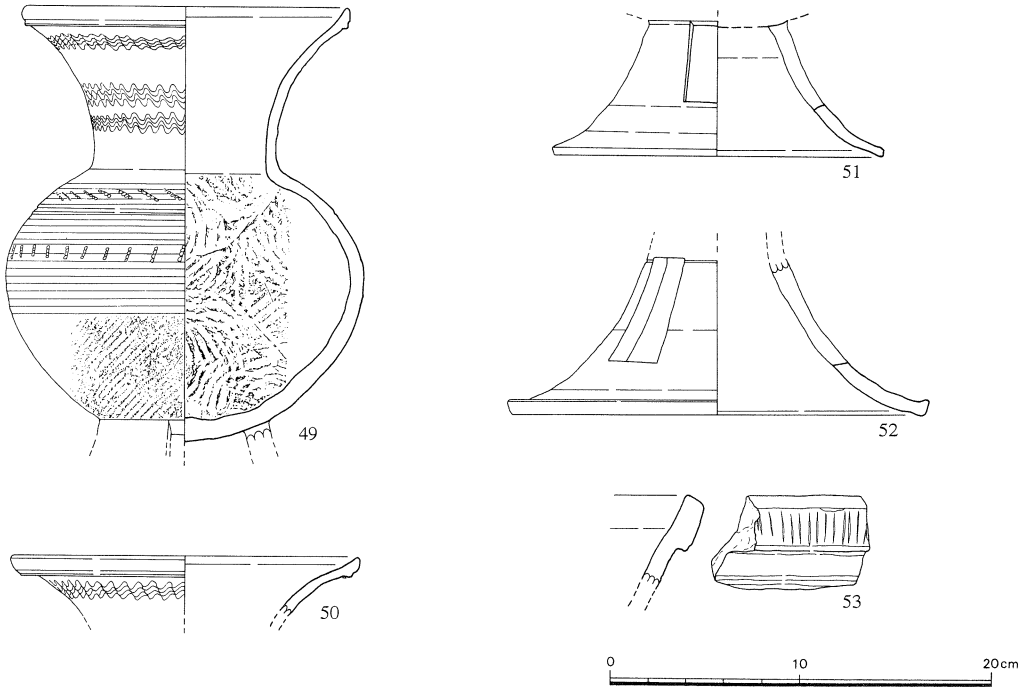


Fig. 68　須恵器実測図９

子持広口壺（Fig. 69－54）

10個の小壺を飾ったと推定される広口壺で，口径19.5cm，器高37.8cm，胴径22.2cm，脚台部高9.6cm，底径18.2cmを計る。底部から胴部にかけてはほぼ球形を呈し，中胴部やや上に断面三角形の大きな張り出しを設けそこに小壺を貼り付ける。小壺は球形の胴部に外傾する口頸部が付いたものである。口頸部は外反してのび口縁部上部を外側に肥厚する。口頸部外面にはそれぞれ１条の凹線に区切られた４段の文様帯がある。上端と下端はヘラ状工具によるタテ方向の刻目，中の２帯はヘラ状工具による鉤状の刻目である。胴部外面には回転カキ目調整が施され，その上にハケ状工具による刺突文が施される。同内面には同心円文の叩き目が残る。脚台部は外反気味に下った

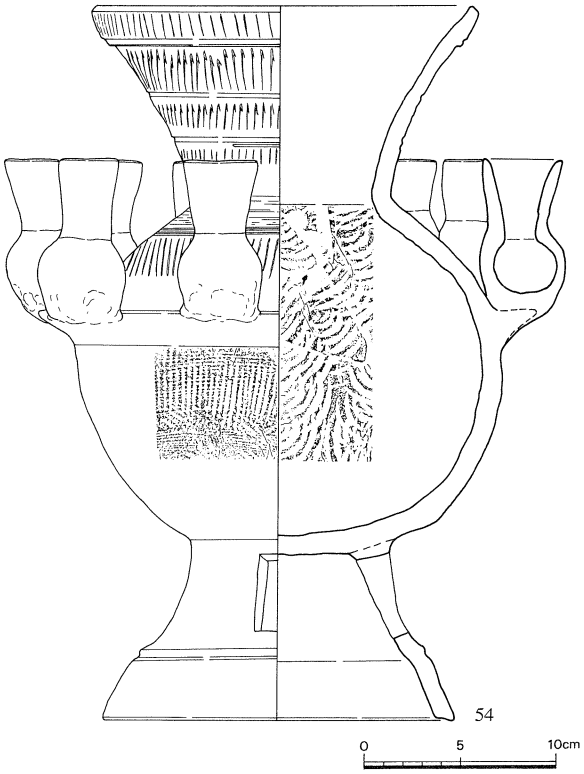


Fig. 69　須恵器実測図10

後小さく屈曲し裾部はハの字形を呈す。端部は内傾する凹面をなす。裾部との境には１条の凹線が巡る。透しは長方形のものが2方向に刻まれる。

子持器台（Fig. 70－55）

器台の中には短頸壺，口縁部に５個の無蓋高杯を配した特殊器台である。口径27.5cm，器高42.0cm，脚台高22.4cm，底径19.5cmであり，脚台部を中心に歪みがみられる。杯部は底部から内湾気味に上がり，口縁部で外傾し端部は内傾する平面をなす。この口縁部には５個の無蓋高杯が付く。脚台部は中空で，杯部は丸味のある底部から屈曲し外上方を向く口縁部となり，端部は細く仕上げられる。器台杯部内面には同心円文の叩き目，外面には平行の叩き目が残る。器台杯部に載る短頸壺は，ほぼ球形に近い胴部に短く若干外傾する口縁部が付くもので，端部は内側に若干肥厚され，外傾する平面をなす。胴部中位やや上にはヘラ状工具による刻み目が施され，その上には１条の凹線が巡る。脚台部は内湾気味に下方へ下った後外反気味にさらに下だり，裾部で大きく開き端部は外傾する浅い凹面をなす。外面はそれぞれ１状の凹線により７列に区画され，内３列に千鳥状に長方形の透しが刻まれる。透かしは上から４方向，５方向，４方向に穿たれている。

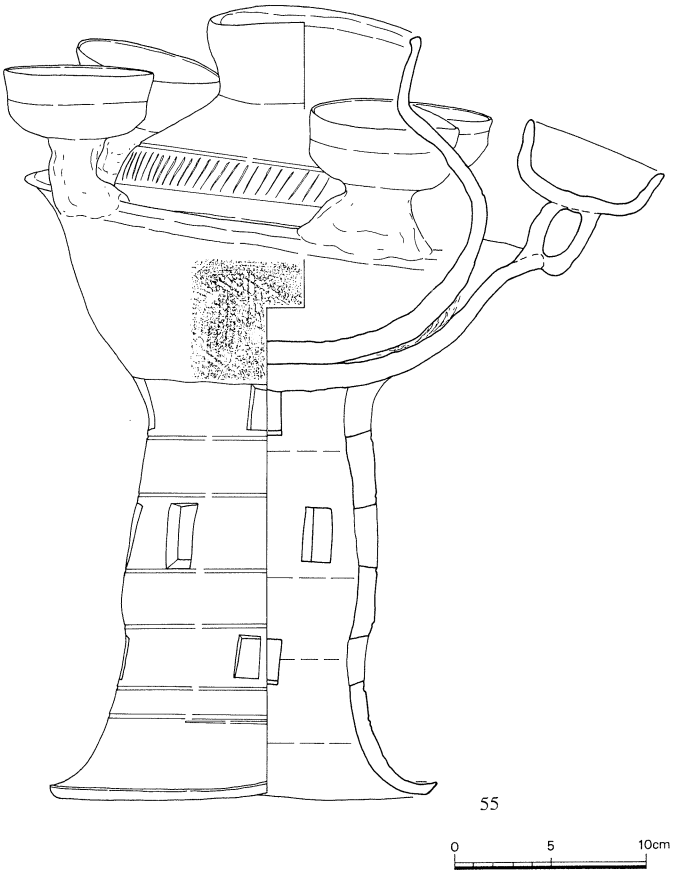


Fig. 70　須恵器実測図11

2. 装飾品

ガラス小玉（Fig. 71－1・2）

２点とも色調がコバルトブルーを呈するもので，１は直径0.95cm，長さ0.60cm，孔径0.20cm，重さ0.64g，２は直径0.95cm，長さ0.70cm，孔径0.20cm，重さ0.70gをそれぞれ計る。

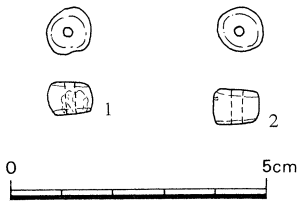


Fig. 71　ガラス小玉実測図

註

(1) 安岡源一『高知県縄文式弥生式古墳文化遺跡地名表』

(2) 廣田典夫「古墳時代の山田」『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会　1979年や廣田典夫「土佐山田町大塚古墳」『古代学研究』103号　1984年等に紹介されている。

第Ⅷ章　考察

本章では，伏原大塚古墳の築造時期及びその性格を今回の調査成果並びに昭和52年度の調査結果をもとに考え，その意義についても考察を加えていきたい。また，全国的にみても非常に希な円筒埴輪が確認され，第Ⅴ章で須恵器系円筒埴輪と位置付けその形態について記述した。そこでここではこの円筒埴輪の特徴並びにその意義について考えてみたい。そして，最後に伏原大塚古墳を含む周辺遺跡の消長を時代別に概述しまとめとする。

1. 伏原大塚古墳の築造時期とその意義

伏原大塚古墳は今回の発掘調査によって一辺34mの大形方墳で，周囲には幅約２mの周溝が巡り，西側ではさらに外側に幅約３m の周溝が設置され，周溝を含めた規模は南北38m，東西43mに及ぶことが判明した。また，外堤の存在も推測される。ただ，今回の調査は発掘区が周溝部分に限られていたため，出土遺物もその大半が円筒埴輪片で築造時期の目安とはなったがその変遷を追う資料とは言い難く，昭和52年度の調査で主体部の床面から出土した遺物（副葬品）が古墳築造時期およびその変遷を考える上で欠くことのできない資料であり，第Ⅶ章に再掲載した。ここでは特に，後者の資料を中心にまず古墳の築造時期を考えてみたい。

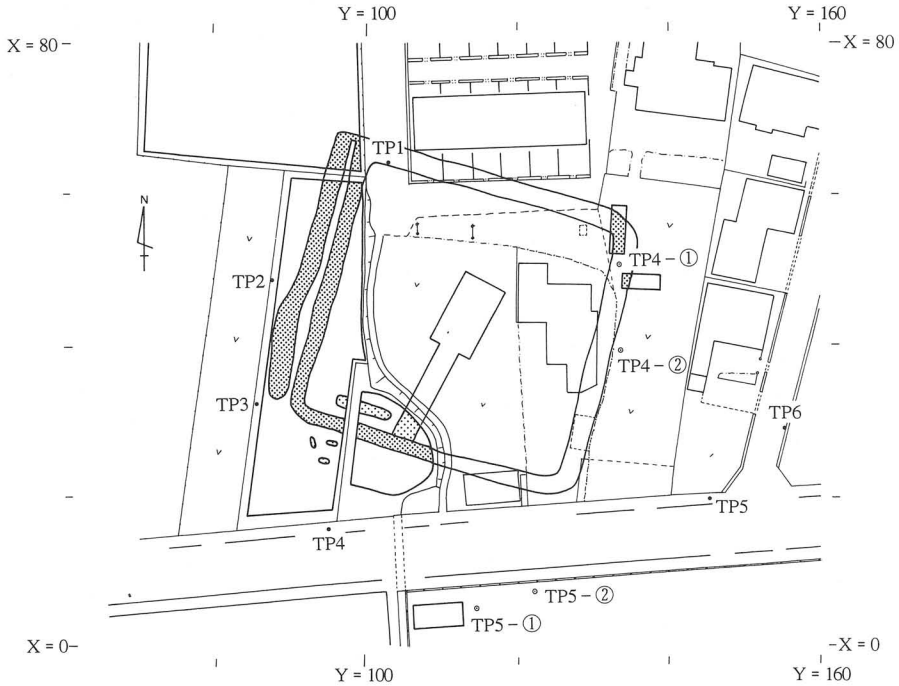


Fig. 72　伏原大塚古墳全体図（Ｓ＝１：1,000）

昭和52年度の調査の正式な報告書は刊行されていないが，土佐山田町史編纂事業の一環として実施された発掘調査であり町史の中にその概要が記載されている。また，『古代学研究』第103号等にも紹介されている。それらによると出土した須恵器から築造時期は5世紀末～6世紀初頭に位置付けられている。土佐と言う地域性を考慮した位置付けとは思われるが，近年高知県の南西部に位置する中村市具同中山遺跡群・古津賀遺跡[1]や大方町早咲遺跡[2]から古式須恵器が比較的まとまって出土しており，特に初期須恵器は陶邑等からの搬入品とみられ，それらの一般的な位置付けから以後の製品の変遷を考えると当古墳の築造時期をもう少し下げなければならないようである。筆者が行った中村市具同中山遺跡群での須恵器編年[3]に当てはめるとV期より遡るとは考えられず，換言すれば陶邑[4]のI型式の範疇には属さないものである。先のV期は時期的に6世紀前半と考えており，伏原大塚古墳から出土する最も古いタイプの須恵器（Fig. 65－1・7）もほぼその時期に該当さすことが可能で，よってその築造時期も6世紀前半と考えた方が妥当ではなかろうか。ただし，型式的にはやや新しい要素も看取できることから6世紀前半でも中葉に近い時期（第2四半期後半）とみることができよう。

また，主体部から出土した須恵器は前章で述べたように3～4期に区分することも可能なほど型式差がみられ，追葬されたことが想定される。そこで次に出土量の多かった蓋と高杯の型式分類を行った上で追葬時期を考えてみたい。

蓋は天井部を欠くため杯の蓋なのか高杯の蓋なのか定かではないものを含め6点（Fig. 65－1～5・7）出土している。これらは形態的に以下の4類に分類することが可能である。

A類　口縁部高は低く，器高の2/5以下であり，口縁部は開き気味である。稜は小さく段をなす。天井部は丸く外面約2/3に回転ヘラ削り調整が施される。(Fig. 65－1・7)

B類　口縁部高は低く，口縁部は開き気味で，端部を丸く仕上げる。稜は凹線を巡らすことによって表現している程度である。天井部の形態はA類とほぼ同じである。(Fig. 65－2)

C類　口縁部はなだらかなカーブを描いて下り，端部は丸くまたは細く仕上げられる。稜は全くなくなり口縁部と天井部の境が不明瞭となる。天井部はやや偏平になり，外面回転ヘラ切り未調整のものもみられる。(Fig. 65－3・4)

D類　器形が矮小化するもので，全体に丸みを有し，天井部から口縁部にかけて緩やかに下る。天井部外面には回転ヘラ削り調整も施されるが，回転ヘラ切り未調整のものも多くなるとみられる。なお，Fig. 65－6の杯身はこれに対応したものとみられる。(Fig. 65－5)

高杯は図示できたもので27点（Fig. 65・66－7～33）を数える。この内，杯部が残存した有蓋のものは17点である。これらはその形態によって，以下の3類に分類することが可能である。

A類　たち上がりは内傾し，その高さは器高の1/3以下と低くなり，端部はほぼ丸く仕上げるものか細く仕上げるものに限られてくる。受部は細く斜め上外方を向く。口径は比較的大きく，底部は丸味を有す。脚台は長脚で2段に2～3方向の透しを刻む。(Fig. 65－8・9)

B類　たち上がりは内傾し，その高さは1cm前後とさらに低くなり，端部は丸く仕上げる

ものと細く仕上げるものに限られてくる。口径はA類同様大きく，底部は丸味を有する。底部外面2/3には回転ヘラ削り調整が施される。脚台はA類とほぼ同じである。(Fig. 65・66－10・12～17)

C類　たち上がりは内傾し，その高さは低く1cmに満たず，端部はほぼ丸く仕上げられるものと細く仕上げられるものに限られる。口径はA・B類に比べやや小さくなるが，底部は丸味を有す。底部外面約1/2には回転ヘラ削り調整が施される。脚台は短くなる。(Fig. 65・66－11・18～23)

このように主体部出土の須恵器は3～4類に分類でき，それらは追葬の所産と考えることが可能である。なお，蓋D類は前述のとおり1セット（杯蓋，杯身）のみで，追葬によるものなのか断定するには資料不足の感も残るが，主体部の床面出土ということでここでは一応追葬の所産とみておく。これらは前述のとおり形態的に1型式づつの変化と捉えることができ，それぞれ対応させることが可能で，時期的にはA類が6世紀中葉でやや前半より，B類が6世紀後半，C類が6世紀末～7世紀前半，D類が7世紀後半にほぼ該当させることができるのではないかと推考される。特にC・D類の存続時期に幅を持たせたのは土佐の地域性を考慮したためである。他地域の状況からすると違和感を感じられようが，土佐では陶邑でいう所謂3型式の須恵器が2型式の後半の須恵器と伴出し，また，今のところその出土量も僅かで一時期を画していたとは考えにくいことから前述のような時期判断を考えた。よって，本古墳は少なくとも2回の追葬が行われたことになり，場合によっては3回の追葬が行われた可能性もあろう。このようにみてみると昭和52度の調査で竪穴式石室と判断しているが横穴式石室であったとみた方が状況に即しているようである。また，主体部に向かって排水施設のための暗渠が設けられていることからも横穴式石室であったとみた方がよさそうである。ただ，当時の調査がきわめて短期間であったことや今回調査していないため断定できないが一応ここではそのように判断しておきたい。

叙上，主体部出土の須恵器から当古墳の築造時期並びに追葬についてみてきた。すなわち，当古墳は6世紀中葉なかでも6世紀第2四半期後半に築造され，6世紀後半と6世紀末～7世紀前半に追葬が行われ，さらに7世紀後半にも追葬が行われた可能性も秘めている。

勿論このような規模，副葬品を有する当古墳は県下では最大級のもので，規模的には宿毛市平田曽我山古墳に次ぐものである。平田曽我山古墳は県下唯一の前方後円墳と考えられており，全長は約60mと推測されているが，すでに破壊されており現在確認することはできず，資料によっては1947年当時残存していた後円部の径も20～30mとまちまちである。築造時期は4世紀末～5世紀前半と推測されており，当古墳とは1世紀以上の時期差がある。よって当古墳は後期古墳としては最大規模となり，高知平野を中心とする中央部では初現的な古墳でもある。このように後期古墳としては最大規模でかつ須恵器や金銅製杏葉など多数の副葬品を有し，高知平野を一望できる位置に立地していることからして物部川水系延いては高知平野を統括して

いた首長墓であることにほぼ間違いないであろう。このような古墳がなぜ前方後円墳という墳形を採用せず，方墳を築造したのであろうか。6世紀末～7世紀初頭以降になれば首長クラスの古墳も大形方墳を採用するのであるが，土佐という特異な地域性を有する地域でそれらに先駆けて大形方墳を採用したとは考え難く，前方後円墳という墳形を採用せず大形方墳という墳形を採用した者とのつながりがあったのではなかろうか。

そこで，一辺30m以上を測る全国の大形方墳に目を転じてみると管見に触れたもので奈良県枡山古墳（一辺約85m）を筆頭に千葉県龍角寺岩屋古墳（79×80m）など60基が確認されている。築造時期が判明している49基の中でも6世紀末以降のものが比較的多く20基を数える。また，大形方墳が存在する地域は北から群馬県（5），栃木県（2），茨城県（2），千葉県（6），長野県（2），三重県（3），石川県（1），滋賀県（2），京都府（9），奈良県（9），大阪府（8），兵庫県（1），島根県（7），山口県（1），香川県（1），宮崎県（1）である。これら大形方墳のうち当古墳より規模が大きくかつ時期的にみて影響を及ぼす可能性のある古墳は島根県岩屋古墳（一辺40m），長野県中曽根親王塚古墳（一辺52m），大阪府塔塚古墳（一辺45m），奈良県枡山古墳（一辺85m）で，これらは概ね5世紀後半から6世紀初頭に位置付けられている。中でも塔塚古墳と枡山古墳は当古墳が築造されたとみられる時期と近接しており何らかの関係があったのではないかとも考えられるがいかがなものだろうか。これら以外に地理的，時期的にみて当古墳との関係をみいだせる大形方墳は見当たらない。

ともかく，高知平野における当古墳の出現は同時に当地域における須恵器生産の開始をも意味する。土佐の場合，須恵器が最初にもたらされたのは耕地面積の最も広い高知平野ではなく県西部の幡多地方であった。また，古墳の出現も幡多地方であった[(5)]。これは幡多地方に鏡など特別なものを副葬し得る首長が存在していたことが延いては県下で最初に須恵器をもたらし得たものと考えられ，以後6世紀前半まで盛んに河川敷きで祭祀が行われているが，6世紀中葉を境にしてこの痕跡は激減する[(6)]。反対に，高知平野を中心とする地域では古墳の築造が本格化する。この切っ掛けが正に伏原大塚古墳の築造であると同時に須恵器生産に関わる技術の中央からの導入でもあると考えられるわけで，畿内地方との密接な関わりが想定されよう。しかし，他に類例を見ない円筒埴輪の存在は何を意味するのであろうか。中央との緊密なつながりがあれば形式的は埴輪祭祀のみならず，少なくとも円筒埴輪の欠くべからず特徴も伝えられたのではなかろうか。円筒埴輪については次節で検討するが，如何なる状況下にあったのであろうか。

一方，視点を変えて当古墳をみても，県下では珍しい版築工法等しっかりした造りと県下では唯一の石組の暗渠の設置など特筆すべき事項も多く，中央とのつながりを抜きにしては考えられず，畿内の有力者と密接な関係があったであろうことは十分推察される。ここでは問題提起に終始した感もあるが，今後その系譜の究明が延いては土佐の地域性を解明することにつながるのではなかろうか。

2. 円筒埴輪の特徴とその意義

伏原大塚古墳出土の埴輪は，須恵器の製作技法とほぼ同じでありかつ焼成が須恵器と全く遜色がないこと，楕円形埴輪も存在するが円形を指向してつくられていることなどから須恵器系円筒埴輪と位置付けた。そして，口縁部の形態によりまず大きく２種類に分け，うち口縁部が開くものについてはさらに２種４類に細分した。これらの成形技法は共通しており，タガが２条設けられていることから３工程ぐらいに分けて作られたのではないかとみられ，かつ，底部を中心として歪みがみられる個体が比較的多いことから短期間に製作されたものと推測される。すなわち，まず粘土紐を約20cm積み上げ底部を作り出し，乾燥させた後さらに粘土紐を積み上げ胴部を作り出し乾燥させる。そして，その上に粘土紐を積み上げ口縁部を作ったとみられる。Ａ類，Ｂ類とも胴部までの製作過程はほぼ同じで，口縁部を製作する段階で口縁を開かせたもの（Ａ類）そのまま直立させたもの（Ｂ類）とに分かれている。数量的にはＡ類が圧倒的に多く，Ｂ類は２個体確認したにすぎず，原形を復元できた Fig. 44－22も復元した樹立位置（付図）に特別な意味は見出せず，また，Ａ類に対しどのような意味合いがあったのか定かではない。ただ，口縁部の開き具合いからすると，Ａ類を朝顔形円筒，Ｂ類を普通円筒に似せて作ったのかも知れないが，埴輪の概念からすると双方とも前述のとおり円筒埴輪であり想像の域を脱しない。また，Ａ類の方が極端に多いのもおかしな点である。一方，短絡的に製作ミスとするのは愚考なのだろうか。

次に，細分したＡ類についてもう少し詳しくみてみたい。Ａ類はまずＣ種ヨコハケ[7]の施された範囲によってⅠ類とⅡ類に分かれる。これは明らかに意識されたものであり，製作工人の差とみるよりか仕上がりを意識した調整技法の違いと見た方が適切であろう。点数は，Ⅰ類が15点，Ⅱ類が６点を数える。これらはさらに口縁部の開き具合いによりそれぞれａ類，ｂ類に細分される。ａ類は口縁部が外反するもので，ｂ類は口縁部が外傾するものである。Ａ－Ⅰ－ｂ類にみられるような口縁部外面に施されたハケ状工具による刺突文は他の類にみられるそれとは異なり施文具の個体差によるものとみることができる。すなわちその違いは施文具を使用する工人差と判断でき，Ａ－Ⅰ－ｂ類の５個体を同一工人の作とみることが可能である。よって，口縁部の外反か外傾かの違いは仕上がりを意識した違いではなく工人差と考えた方が適切ではなかろうか。個体数が他より多いＡ－Ⅰ－ａ類などでは明確な工人差と工人数は指摘できないが，タガの断面形態にみられるように台形をなすもの，三角形をなすものとがみられ，それらが工人差として把握できるものかもしれない。また，口縁部外面に施されたＣ種ヨコハケの範囲も厳密には個体によって違いがみられ，それらも工人差として捉えられるのではなかろうか。それからするとＡ－Ⅰ－ａ類の製作には少なくとも複数の工人が関わっていたと推測される。

以上，今回出土した円筒埴輪の個体間の特徴について考えてきた。次に，これら円筒埴輪が全国的にどのように位置付けられるかみてみよう。まず，円筒埴輪をまとめられた川西宏幸氏の編年[8]に当て嵌めるとその特徴並びに伴出の須恵器などから第Ⅴ期，中でも前半に位置付ける

ことができよう。C種ヨコハケや高温の還元炎によって堅緻に焼きあげる須恵器の焼成と変わらない点は淡輪系埴輪[9]の特徴の中にもみいだせるが淡輪系埴輪の共通特徴である底部に段を持つという作り方はなく，また，6世紀前半～中葉にかけて九州北部，北四国，紀ノ川沿岸，畿内の一部にかけての瀬戸内海を囲む地域に分布する最下段タガに断続ナデ技法を施したもの[10]は見当らない。全国的にみても類例を見出せず，決め手を欠くが，時期的には6世紀中葉，中でも前半に近い時期であると考えてほぼ間違いなかろう。一方，観点を変えなぜこのような特異な形態の埴輪が作り出されたかを考えた場合，透孔の欠如は埴輪工人の作とは考え難く，伏原大塚古墳に埴輪が採用された当時すでに埴輪の概念は形骸化し，埴輪祭祀と言う行為のみが伝えられた結果，全国的にも希な埴輪が出現したと捉えられるのではなかろうか。換言すれば，土佐には形式化した埴輪祭祀のみが伝えられ，それに伴う埴輪工人は何らかの理由で土佐には来れず，須恵器工人がやむなく埴輪工人に代って埴輪を製作したのではなかろうか。そのため透孔の欠如という現象が起こったとみれないであろうか。埴輪の口縁部とほぼ同じ形態を呈する須恵器の大甕（Fig. 33－11）の存在や須恵器と同じ手法で製作されていること及び昭和52年度の調査の際出土し円筒埴輪と発表しても須恵器との識別が難しいためか疑問視する意見[11]もあったことからもそのことは言えるのではなかろうか。このことからもこの埴輪は正に須恵器そのもので，須恵器の器種の一種ともいい得るものである。今回管見では類例を見出し得なかったが，もし今後も同種のものが発見されなければ，正に土佐という地域性故に出現した土佐独特のもので，土佐型埴輪ともいい得るものではなかろうか。

3.まとめ

ここでは伏原大塚古墳を含む周辺遺跡の消長を年代順に概述しまとめとしたい。伏原大塚古墳の立地する土地では弥生時代を始めとして，古墳時代，古代，中世そして近世の各時代の遺溝が確認されている。この中で中心となるのはやはり当古墳が築造された古墳時代後期で，次いで目につくのが15・16世紀の土坑墓群である。

まず，弥生時代では当古墳の北側を中心に後期後半から終末期の集落が展開し，当古墳の築造面でもいくつかの遺溝が確認されている。ただ，その数は少なく集落の南端部と言えるのではなかろうか。古墳時代にはいり，しばらくの間はこれといった遺溝はなく，周辺部においても人の痕跡は見当たらない。そして，6世紀半ば近くなると当古墳の築造が開始される。当地方では前代未聞の土木工事となる。礫層の掘削等当時の技術や道具からすると想像以上に難工事ではなかったかと推測される。そして，埴輪の製作等も行われ，当時すでに物部川水系を掌握し，絶大な権力を保有していた者の存在が窺える。以後，追葬も何度か行われており古墳時代を通じその権力を保持していたことが看取できる。また，他に当古墳に匹敵する古墳も築造されず，規模的にも南国市小蓮古墳の径22～28mを筆頭に小形の円墳ばかりであることからもそのことはいえよう。続く，奈良・平安時代には目立った動きはみられない。ただ，当古墳

の北側では平安時代，中でも10世紀後半の遺溝が確認され，緑釉陶器や刻書土器など一般の集落のそれとはやや趣を異にする遺物が出土しておりその性格が注目されている。次の中世，中でも15世紀後半～16世紀前半に古墳に樹立していた円筒埴輪は周溝に投棄され，周溝が埋められたことが周溝から円筒埴輪に混じってその時期に位置付けられる土師質土器等が出土したことから推測される。そして，その上から多数の中世墓が検出され，古墳の周辺は墓地化したことが窺える。今回の調査では28基の墓が確認され，これらのほとんどから集石が検出された。中世墓のうち，22基は方形ないし隅丸方形の掘り方を有する土坑墓で，集石を伴うものについては集石土坑墓と呼称し得るものである。残る6基は断面観察でも掘り方が確認できなかったもので，単に方形または不整形に川原石を集めたもので集石墓または配石墓と言われるものであり，これらには火葬された痕跡が認められるものがある。また，文献[12]では当時この地に山田氏の陣地がおかれたとみられる記事も残っており，周溝への埴輪の投棄と周溝の埋没とを関連させてみることも可能であり，中には戦国期の戦乱で討死した者の墓も存在するのかもしれない。調査結果から言えることは埴輪の周溝への投棄並びに周溝の埋没が土坑墓群より先行するが，時期的には大きな隔たりがないことである。以後当古墳周辺では目立った痕跡はなく，18世紀後半～19世紀前半にいくつかの土坑と溝が掘削されている程度である。そして，明治以降開発の波に押し流されるように古墳はその姿を変え，今日に至る。

註

（1）　高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1988年
（2）　大方町教育委員会『早咲遺跡』1991年
（3）　高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1992年
（4）　大阪文化財センター『陶邑』Ⅰ～Ⅵ1976～1989年
（5）　高知県教育委員会『高岡山古墳群発掘調査報告書』1985年
（6）（1）に同じ
（7）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号1978年
（8）（7）に同じ
（9）（7）に同じ
（10）　坂靖「埴輪編年と技法伝播の問題」『同志社大学考古学シリーズⅡ　考古学と移住・移動』1985年
（11）　岡本健児「高知県」『日本考古学年報』30（1977年度版）
（12）『南路志』に土佐軍記いわくとして「・・・・天文二十年の秋，其勢五百騎，前後の備を押分山田の城へ押寄せる。城には監物こそ謀れ共，今寄すへきとハおもひよらされハ，敵寄来と聞て上を下へかへしける。されとも監物，五十騎斗を揃て突て出る。丹後守も百余騎をしたかへ城より押出し，町はづれ少し高き所有，此所に陣を取る。・・・・」とあり，また『土佐物語』上の巻　山田合戦の事に「・・・・山田監物，今日を最後とや思いけん・・・・・手勢百五十騎を随へ犬手より五六町南西伏原の大塚に屯す・・・・」とある。

参考文献

安岡源一　『高知県縄文式弥生式古墳文化遺跡地名表』1952年

廣田典夫　「古墳時代の山田」『土佐山田町史』土佐山田教育委員会　1979年

山本大編　『高知県』郷土史辞典39　昌平社　1983年

岡本健児編『日本の古代遺跡39　高知県』1989年

近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編　1991年

廣田典夫　「土佐の古墳」『高知の研究』Ⅰ　地質・考古編　清文堂　1983年

岡本健児　『高知県史』考古編　1968年

廣田典夫　『土佐の須恵器』　1991年

廣田典夫　『土佐山田町大塚古墳』「古代学研究」第103号　1984年

大塚初重・小林三郎・熊野正也編『日本古墳大辞典』東京堂出版　1990年

西川　宏　「方墳の性格と諸問題」『私たちの考古学』19　考古学研究会　1959年

斎藤　忠　『日本古墳の研究』吉川弘文館　1974年

吉田恵二　「埴輪生産の復元」『考古学研究』第19巻第3号　1973年

森本六爾　「埴輪」『考古学研究』第2年第1号

『考古学』第1巻第4号「埴輪の研究」東京考古学会　1930年

赤塚次郎　「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号　1979年

赤塚次郎　「尾張としての埴輪製作」『考古学の広場』第1号　1983年

古川　登　「越前及び加賀における6世紀代の埴輪について」『北陸の考古学』第26号　1983年

久保智康　「越前・若狭における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号　1991年

藤川智之　「徳島県の埴輪に関する一，二の問題」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 2　1990年

藤川智之　「須恵器からみた徳島県後期古墳の一側面」『真朱』創刊号　徳島県埋蔵文化財センター　1992年

愛知県埋蔵文化財センター『池下古墳』　1991年

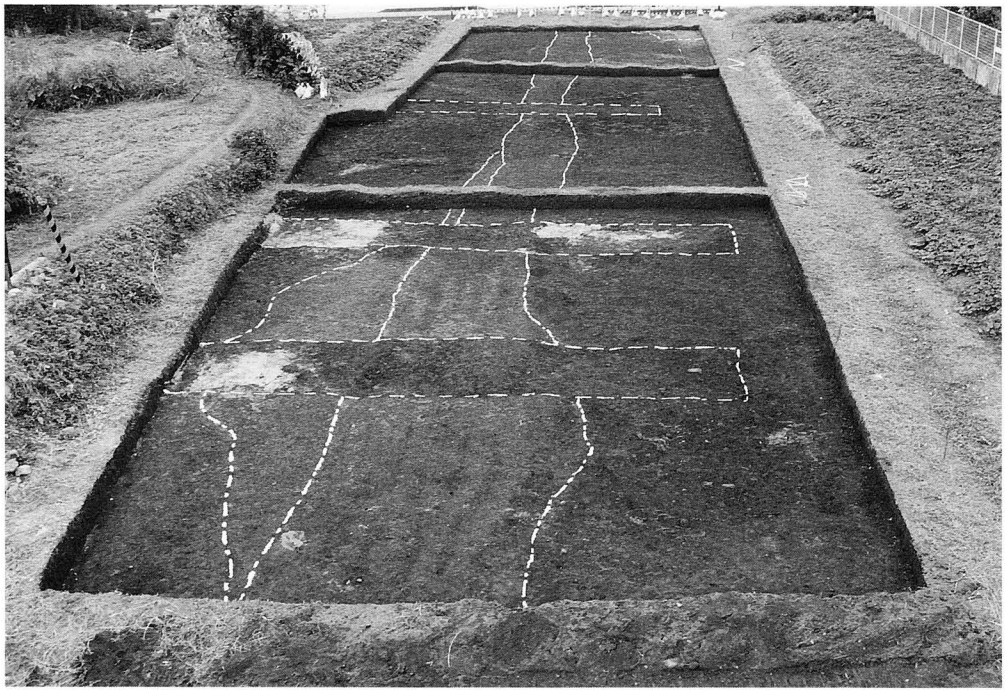
鈴木俊則　「遠江の淡輪系円筒埴輪」『転機』3号　1990年

鈴木俊則　「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie history』Vol. 3　三重歴史文化研究会　1991年

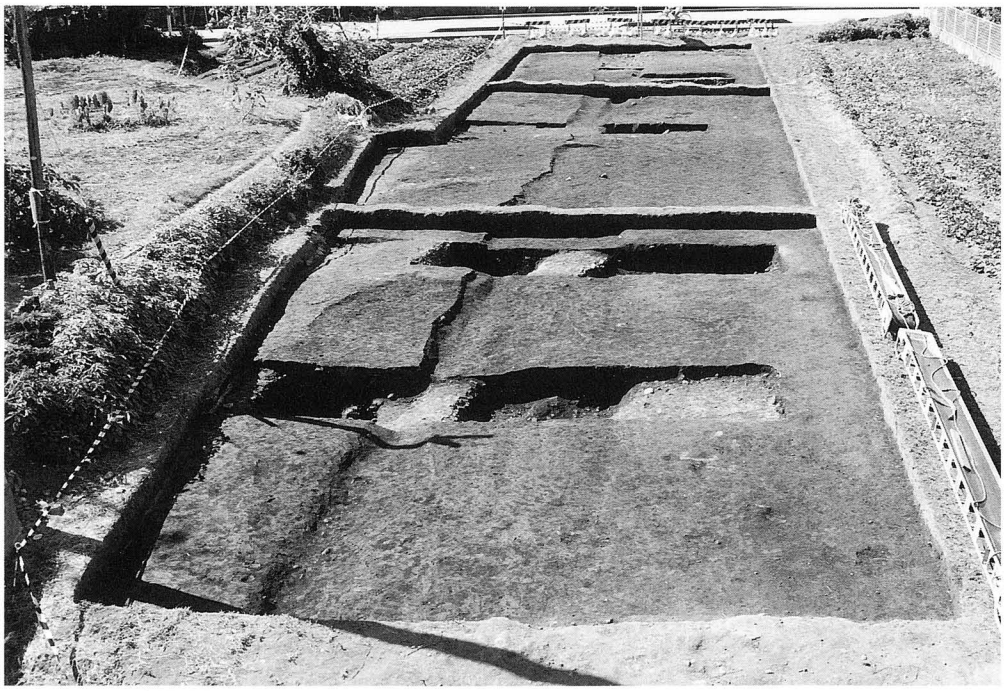
図版

調査前全景（南西より）

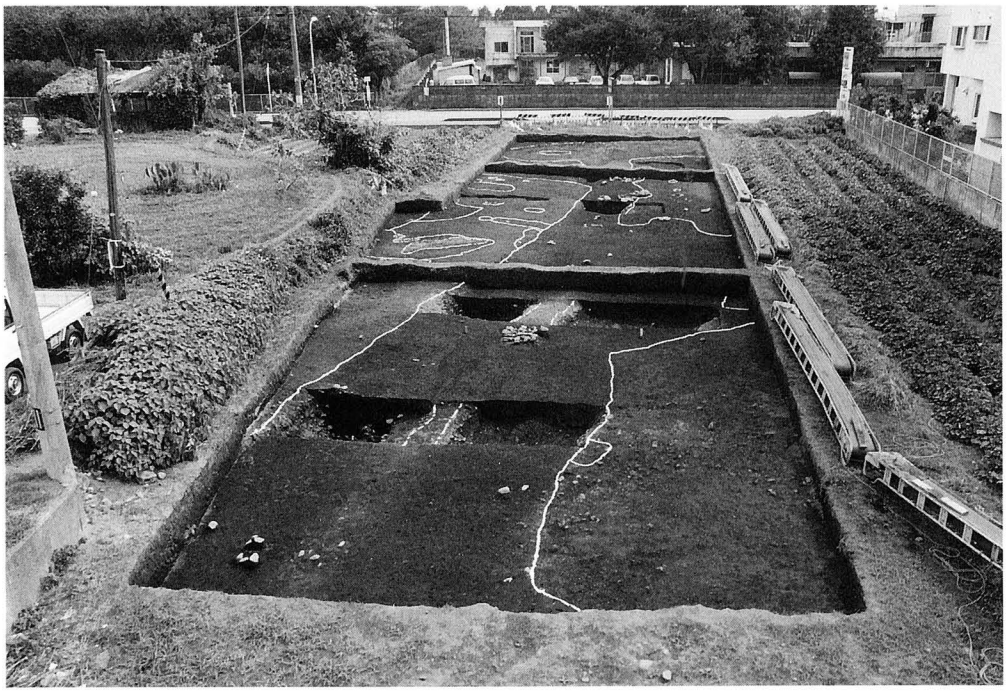
調査前全景（南西より）



Ａ区　近世遺構検出状態（北より）



Ａ区　近世遺構完掘状態（北より）



A区　周溝検出状態（北より）

A区　周溝完掘状態（北より）

Ａ区　遺構完掘状態（北上空より）

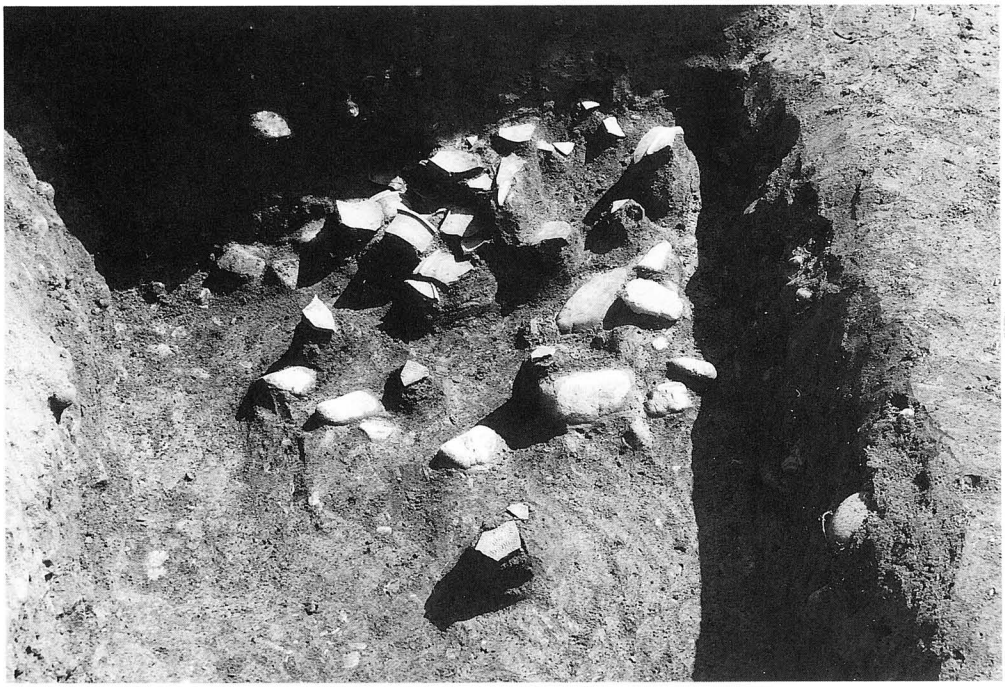
Ａ区　遺構完掘状態（東上空より）

Ａ区　遺構完掘状態（南東より）

Ａ区　遺構完掘状態（東より）

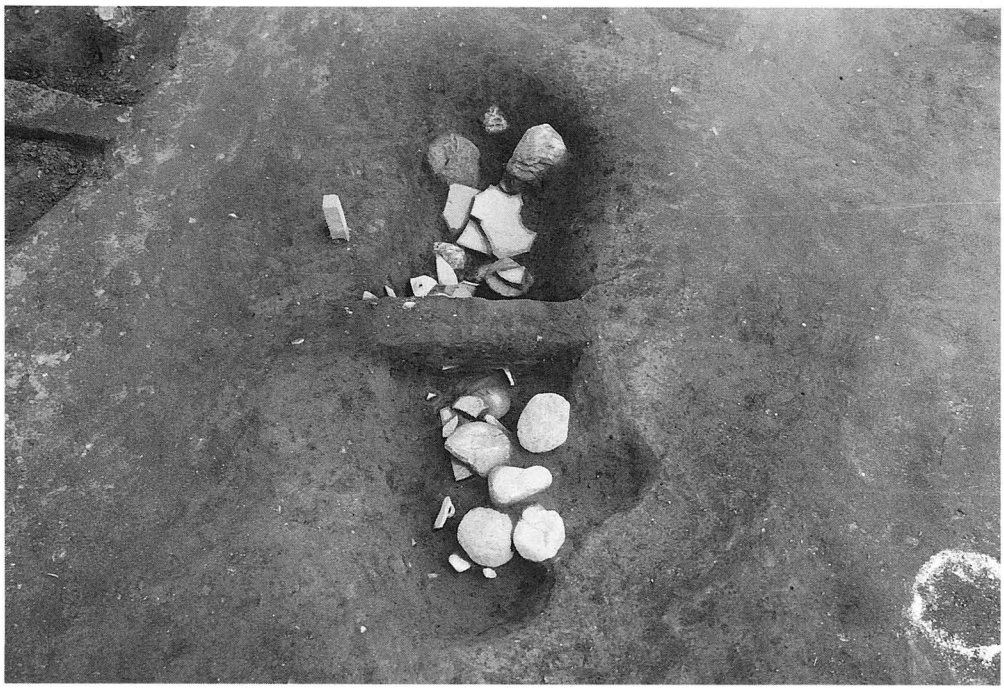
Ａ区　ＳＫ－40（北より）

Ａ区　東壁版築状土層検出状態（西より）

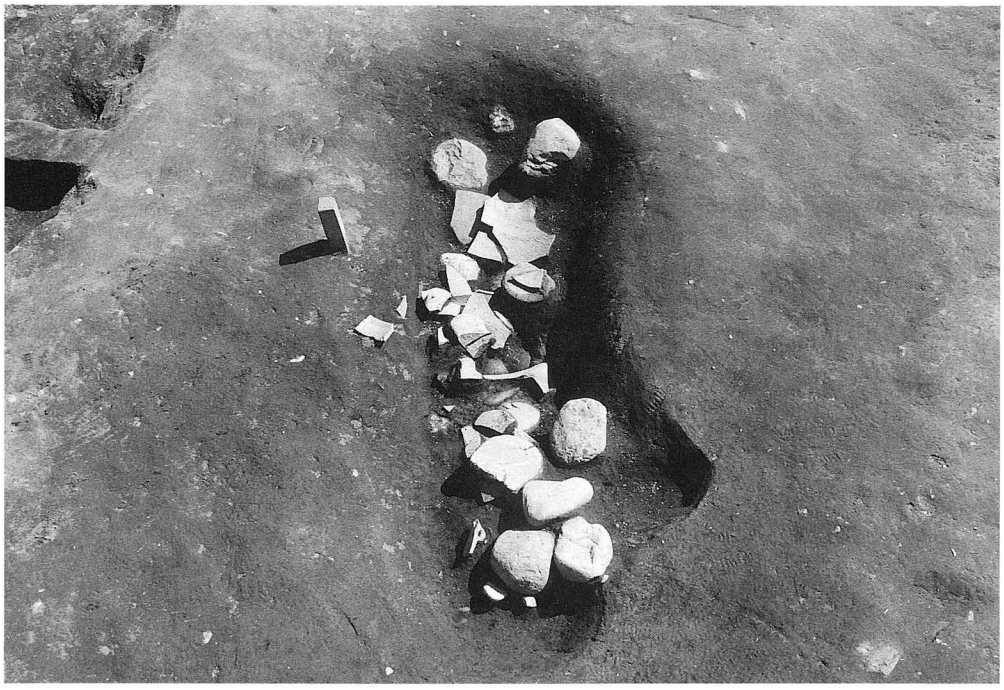


Ａ区　埴輪出土状態（西より）

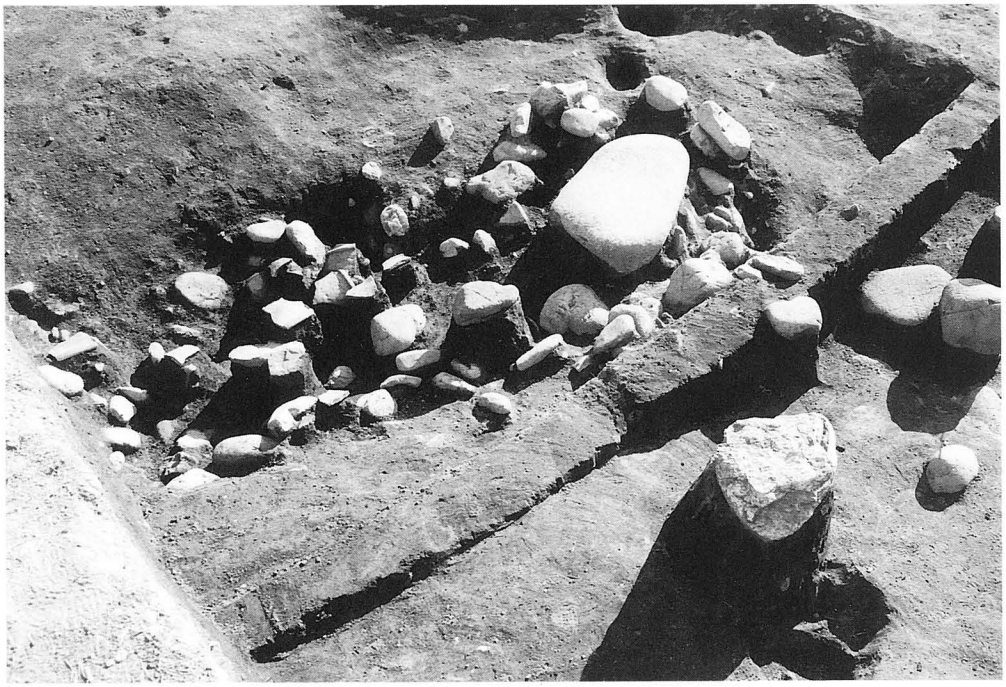
Ａ区　ＳＤ－１セクション（北より）



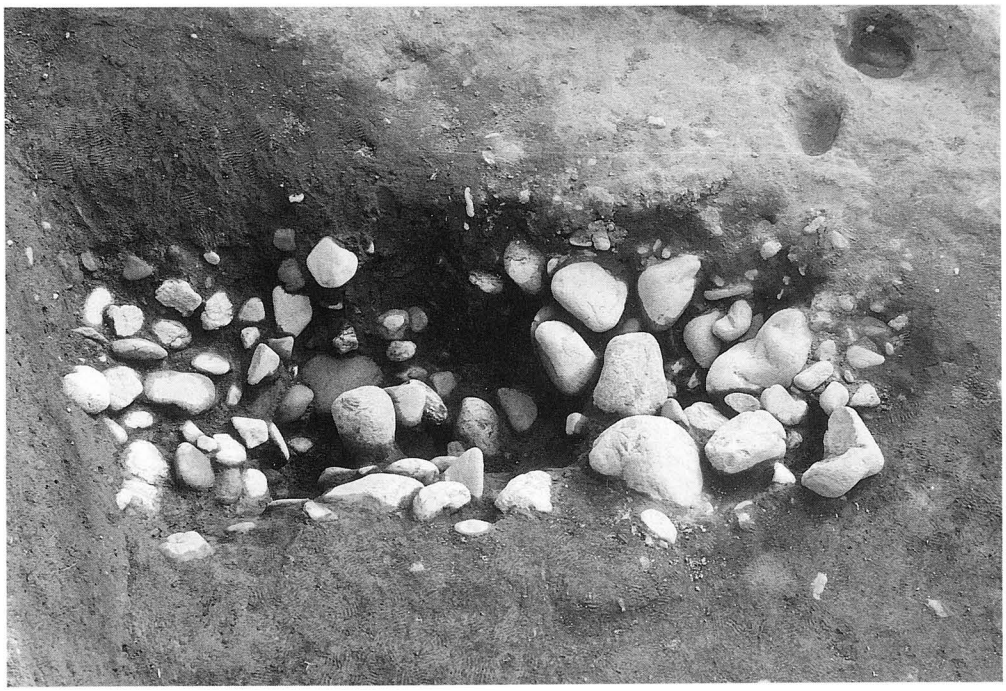
Ａ区　ＳＫ－１（北より）



Ａ区　ＳＫ－１（北より）



Ａ区　ＳＫ－２（北より）



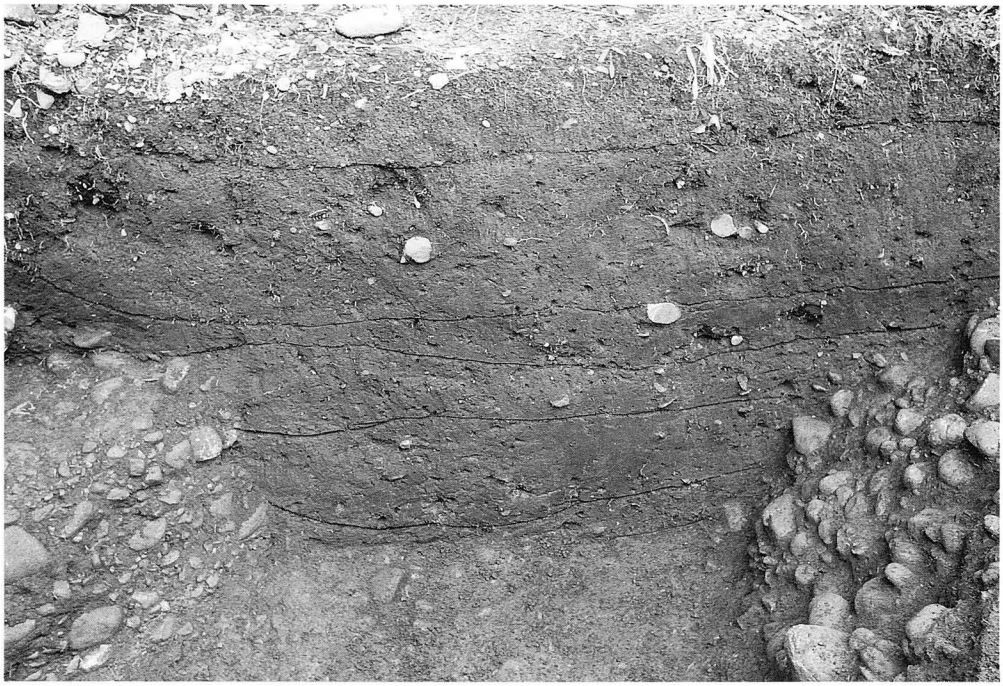
Ａ区　ＳＫ－２（北より）

Ｂ区　ＴＲＢ－１周溝（ＳＤ－１）検出状態（南より）

Ｂ区　ＴＲＢ－１周溝（ＳＤ－１）完掘状態（南より）

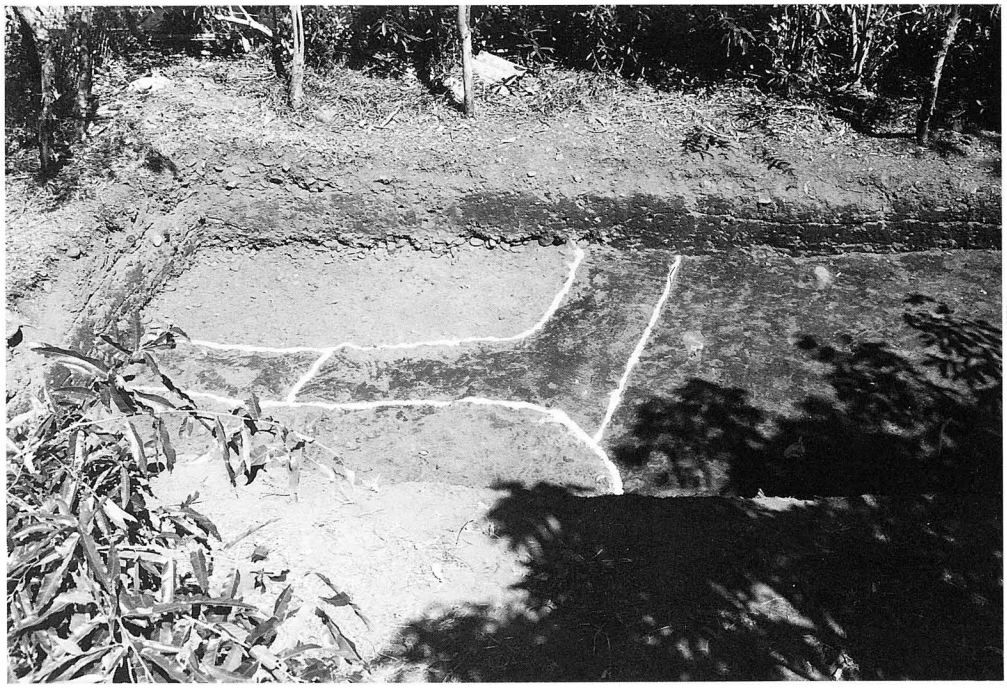
Ｂ区　ＴＲＢ－２周溝（ＳＤ－１）検出状態（東より）

Ｂ区　ＴＲＢ－２周溝（ＳＤ－１）完掘状態（東より）



Ｂ区　ＴＲＢ－１周溝（ＳＤ－１）セクション（東より）

Ｂ区　ＴＲＢ－２周溝（ＳＤ－１）セクション（東より）



Ｃ区　ＴＲＣ－１遺構検出状態（南より）

Ｃ区　ＴＲＣ－１遺構完掘状態（南より）

Ｄ区　調査前全景（北西より）

Ｄ区　遺構検出状態（北より）

Ｄ区　遺構完掘状態（北より）

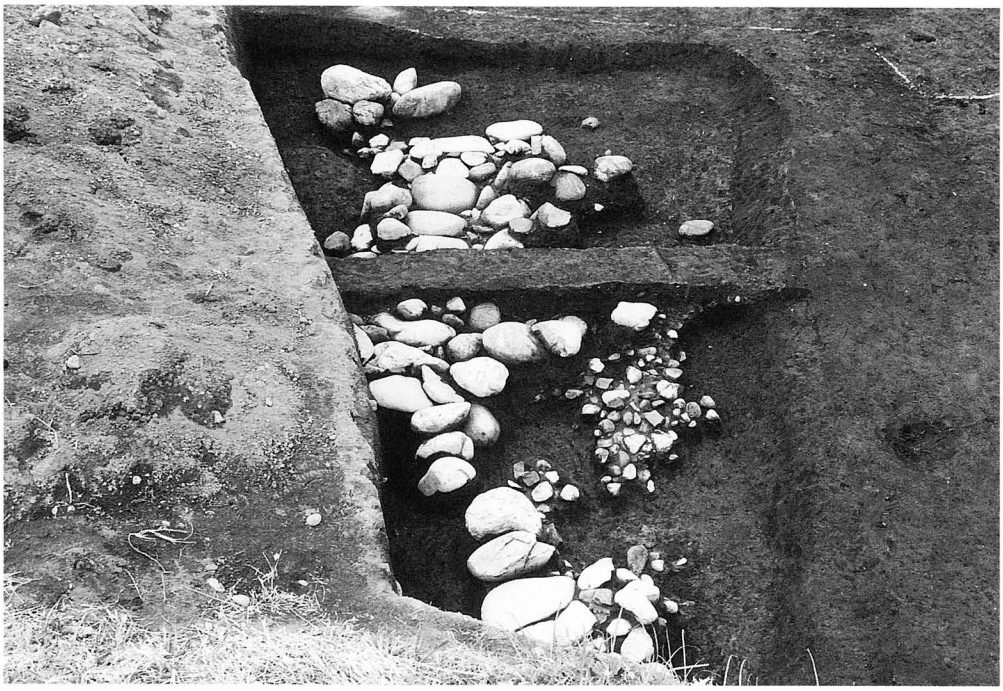
Ｄ区　周溝（ＳＤ－１）セクション（東より）

Ｄ区　ＳＫ－４集石検出状態－上層－（西より）

Ｄ区　ＳＫ－４集石検出状態－下層－（西より）

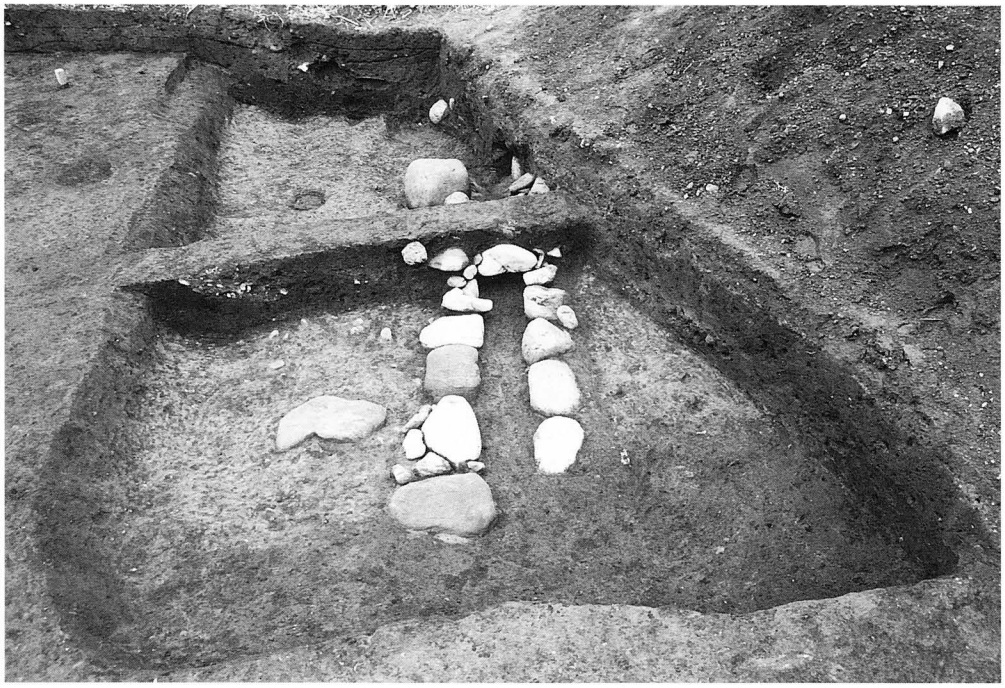
Ｄ区　ＳＫ－４遺物出土状態－基底面－（西より）

Ｄ区　ＳＫ－４セクション（東より）

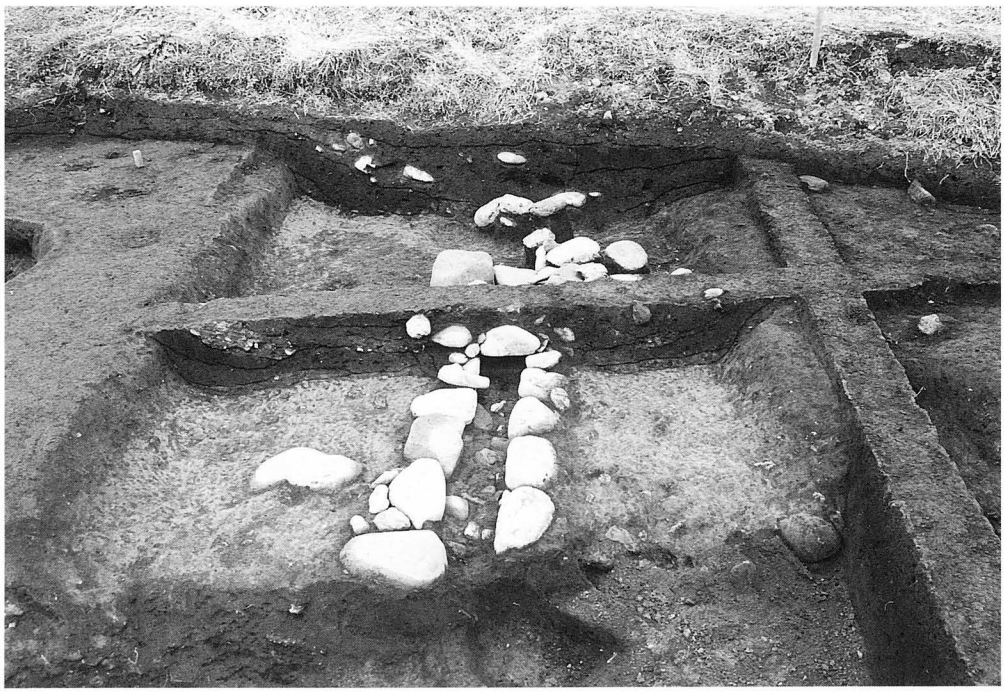


Ｄ区　ＳＫ－５検出状態（北より）

Ｄ区　ＳＫ－５北壁セクション（南より）



Ｄ区　ＳＫ－５（南より）

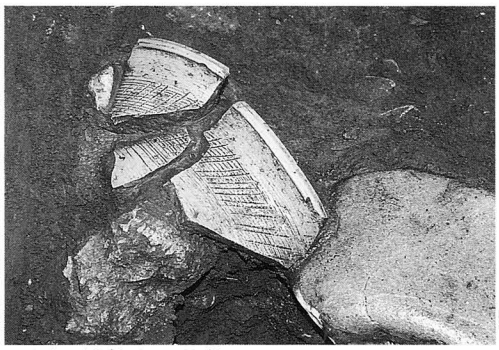


Ｄ区　ＳＫ－５（南より）

Ｄ区　ＳＫ－５（南より）

Ｄ区　暗渠の石組（南より）

A区　埴輪出土状態

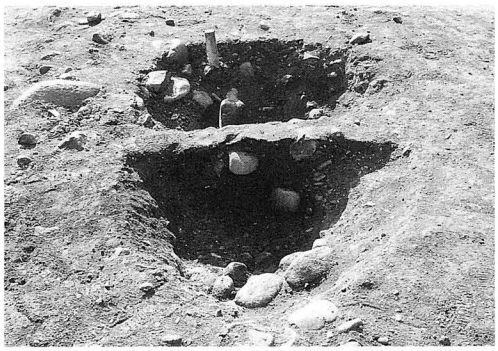

D区　埴輪出土状態

A区　土師器（1）出土状態

A区　馬具（1）出土状態

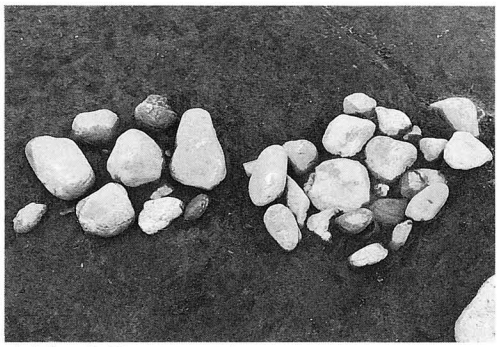
A区　柄付香炉（1）出土状態

A区　柄付香炉（1）出土状態

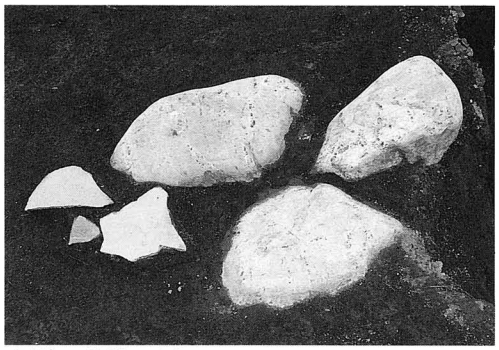

A区　ＳＫ－３

D区　須恵器（11）出土状態

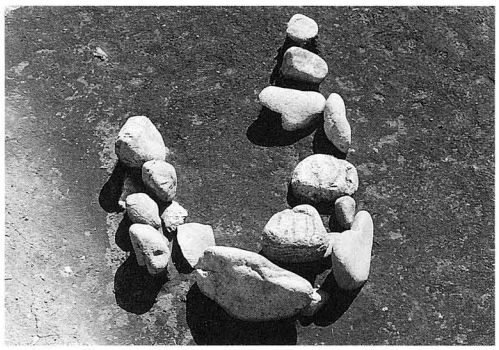
A区　須恵器（Fig50－１）出土状態



A区　ＳＫ－11・19



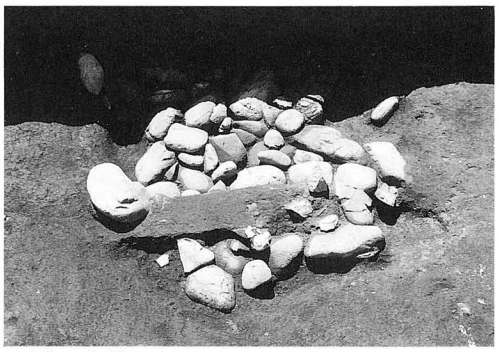
A区　ＳＫ－12



A区　ＳＫ－13

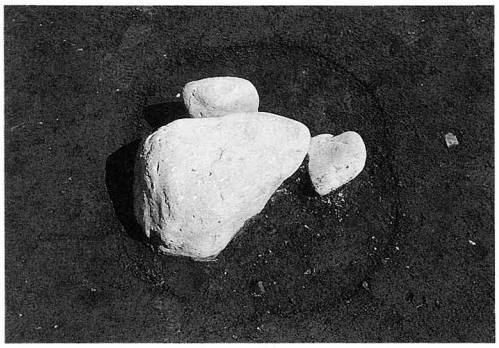
A区　ＳＫ－14

A区　ＳＫ－16



A区　ＳＫ－17

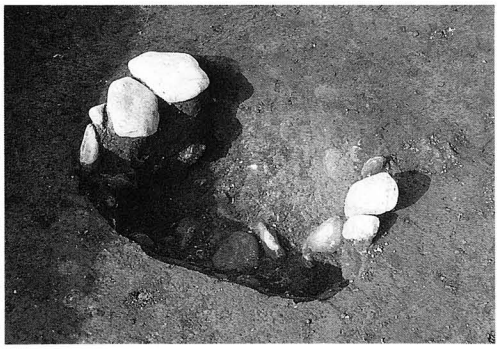
A区　ＳＫ－18



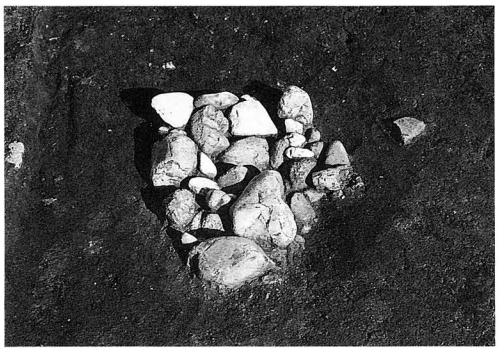
A区　SK－23検出状態

A区　SK－23完掘状態

A区　SK－24検出状態

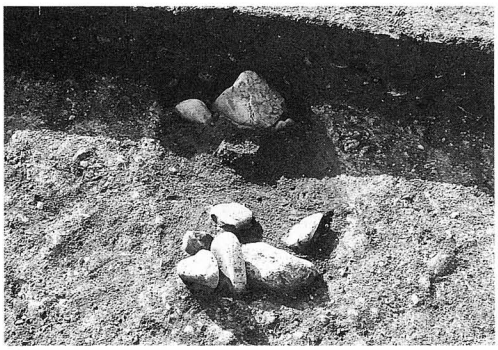


A区　SK－24完掘状態



D区　SK－27

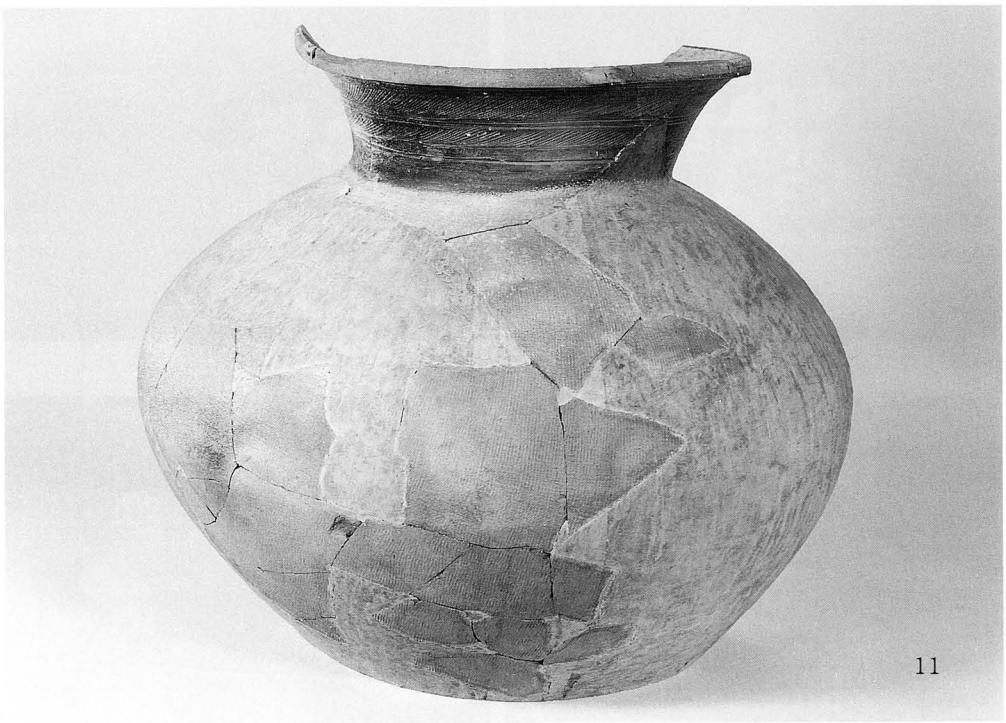
D区　SK－28



D区　SK－29

D区　SK－37

須恵器四耳壷



須恵器大甕

円筒埴輪（1・2・12・13・16・22）

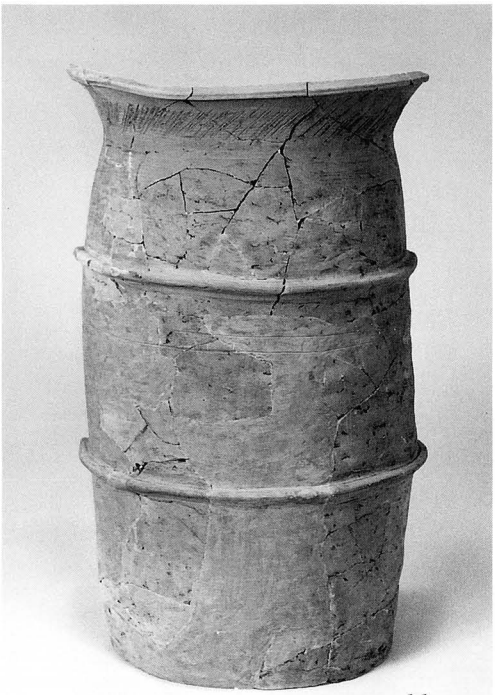
円筒埴輪（1～3）

円筒埴輪（1・12・13）

円筒埴輪（2・3）

4

5



11

14

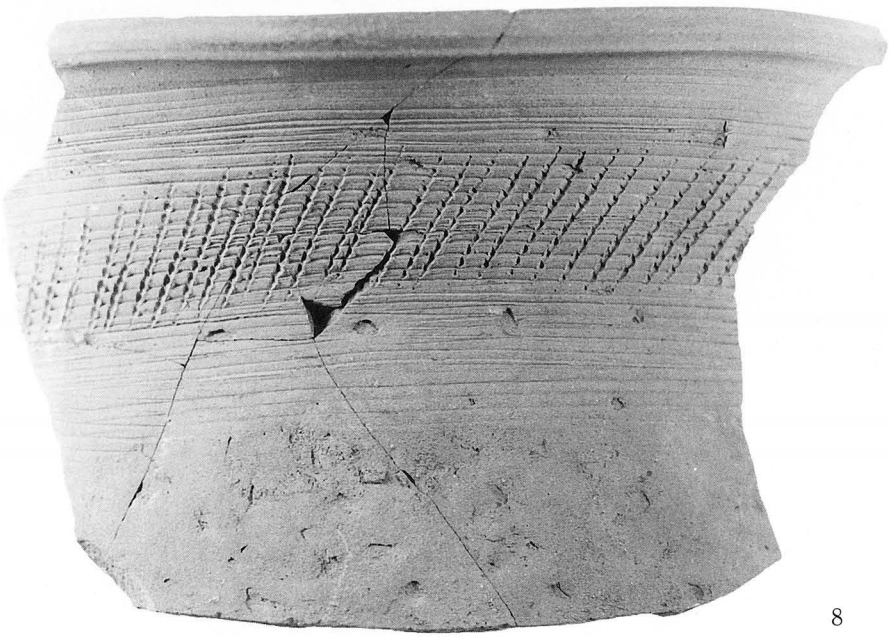
円筒埴輪（4・5・11・14）

円筒埴輪（12・13）

円筒埴輪（16・18・22）

7

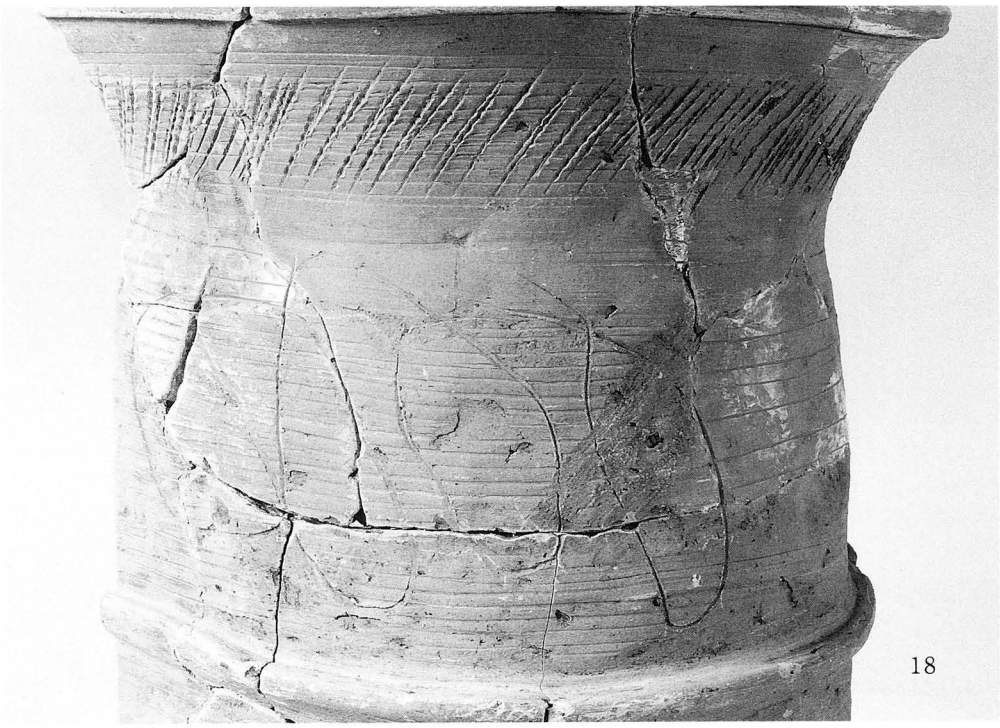
円筒埴輪口縁部 1



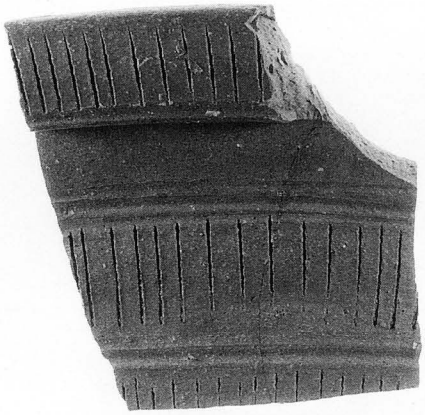
8

円筒埴輪口縁部 2

円筒埴輪口縁部３



円筒埴輪口縁部４



須恵器器台（Fig. 34－14）

円筒埴輪（39）

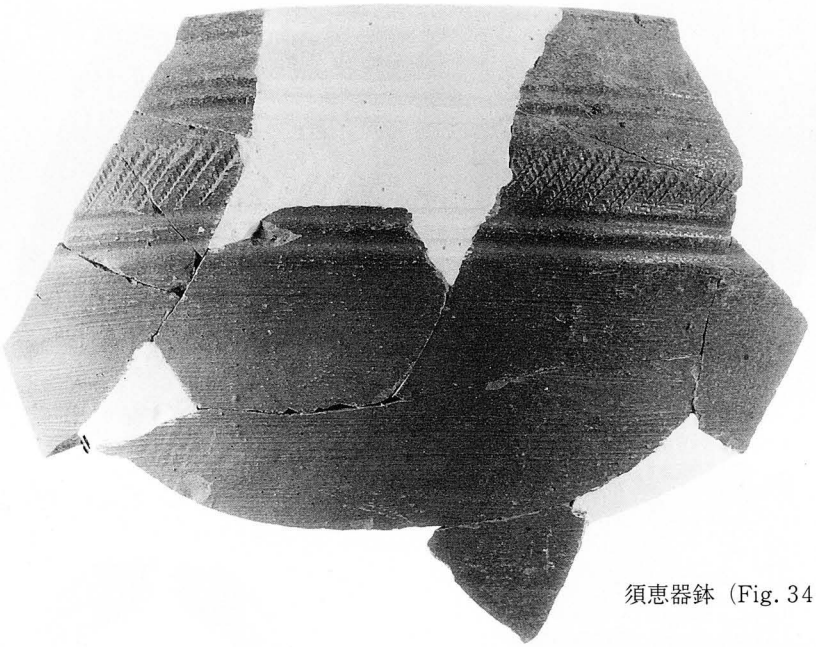
土師器（1）

金環（1）

ガラス小玉（1）

ガラス小玉（2）

須恵器器台，円筒埴輪，土師器，金環，ガラス小玉



須恵器鉢（Fig. 34－15）

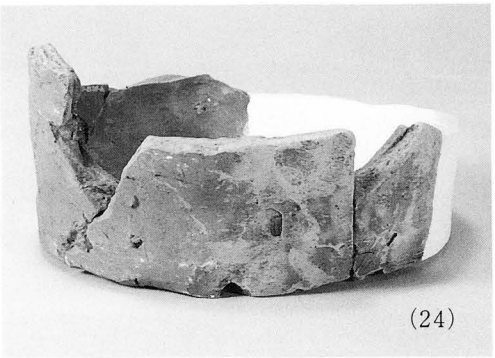
土師質土器（20）

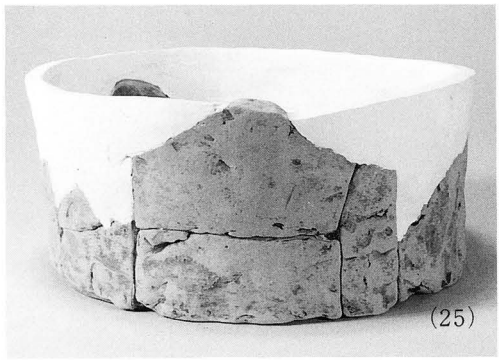
（側面）　柄付香炉（1）

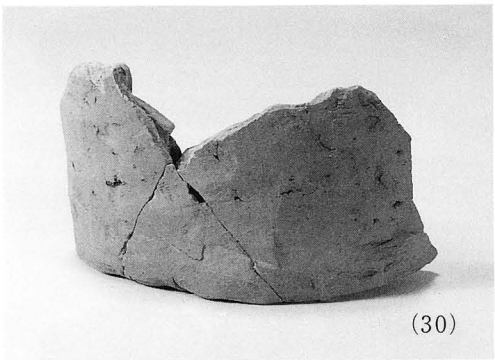
（上から）　柄付香炉（1）

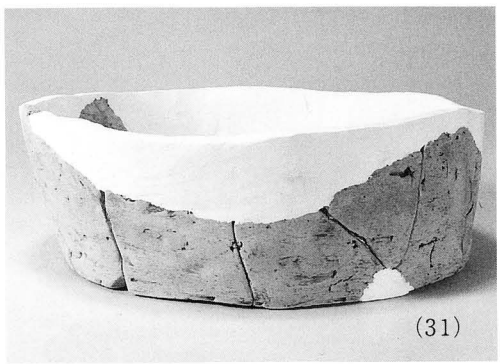
（下から）　柄付香炉（1）

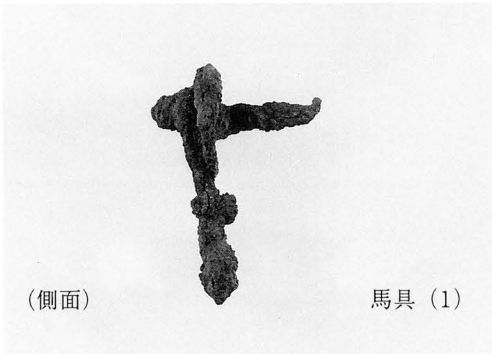
須恵器，土師質土器，柄付香炉





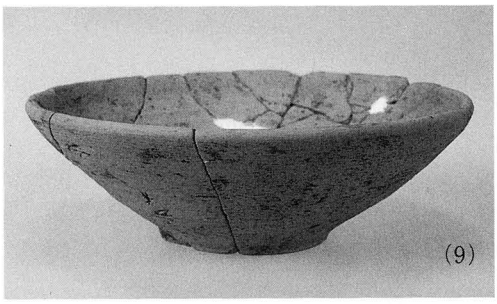


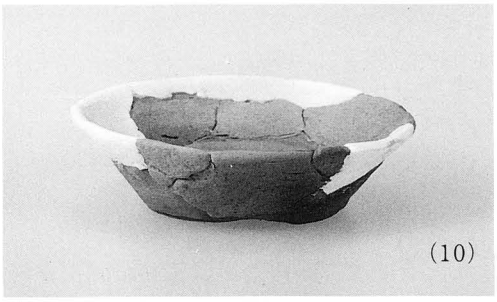


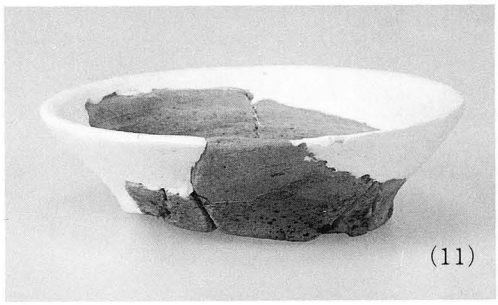


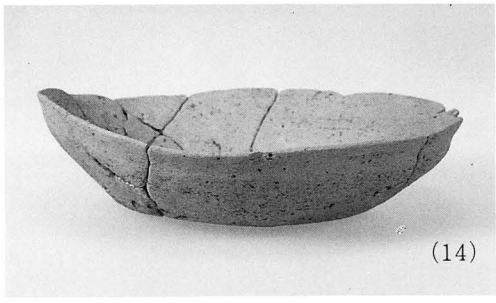
円筒埴輪（24・25・30・31），馬具（1～3）

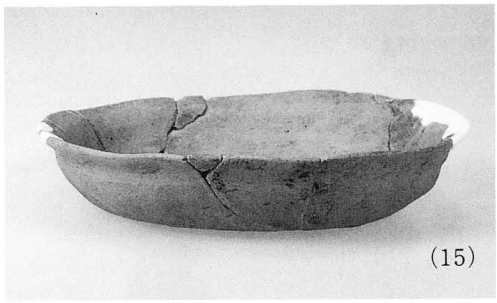
須恵器（1・8），土師質土器（1～8）

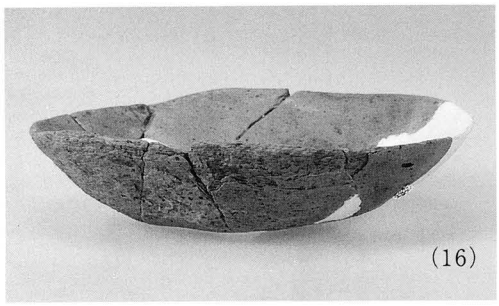












土師質土器（9～16・18・19）

主体部出土須恵器

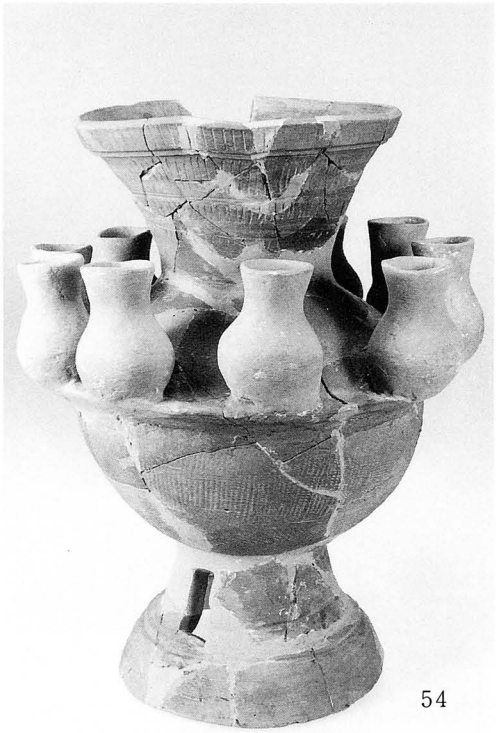
須恵器 高杯（8～11）

須恵器 台付長頸壷（40・41），台付直口壷（43）

須恵器 子持壷（54），子持器台（55）

須恵器 高杯（8～11・29・35）

須恵器 台付椀（36），台付長頸壺（39～42）



須恵器 台付直口壷（43），台付広口壷（49），子持壷（54），子持器台（55）

付図　円筒埴輪個体別出土
位置図（S=1／80）

付図 円筒埴輪個体別出土位置図（S＝1/80）